I　遺跡の位置

桑の丸遺跡は鹿児島県姶良郡溝辺町大字崎森字桑の丸に所在する。

溝辺町を含む姶良郡地方は北部鹿児島湾を中心とした馬蹄形の地域で鹿児島県のほぼ中央部である。

これらの地域は更新世の終末頃活動が始まったといわれる姶良火山が大量の軽石流を噴出しつつ巨大な陥没カルデラとなった鹿児島湾のうち現在の桜島火山以北にあたる。

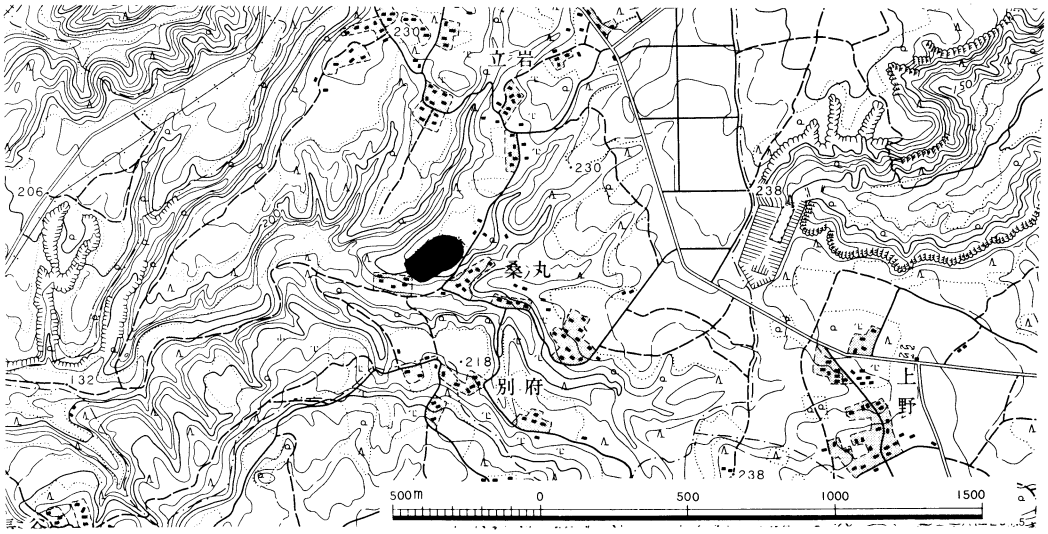
したがって国分、帖佐の沖積平野を経た奥部には急岸の火口壁が東西に走り、その高さは200mに達するところもある。この火口壁に続く背後は広大なシラス台地となる。

溝辺町はこの姶良カルデラの北東から北、鹿児島市街地より東北約35kmの位置で、全町の3分の2にあたる地帯がシラス台地におおわれた地域となっている。このため地目もほとんど畑地で水田は台地の縁辺部の開析谷底や蒲生町付近の盆地にわずかに開けているにすぎない。

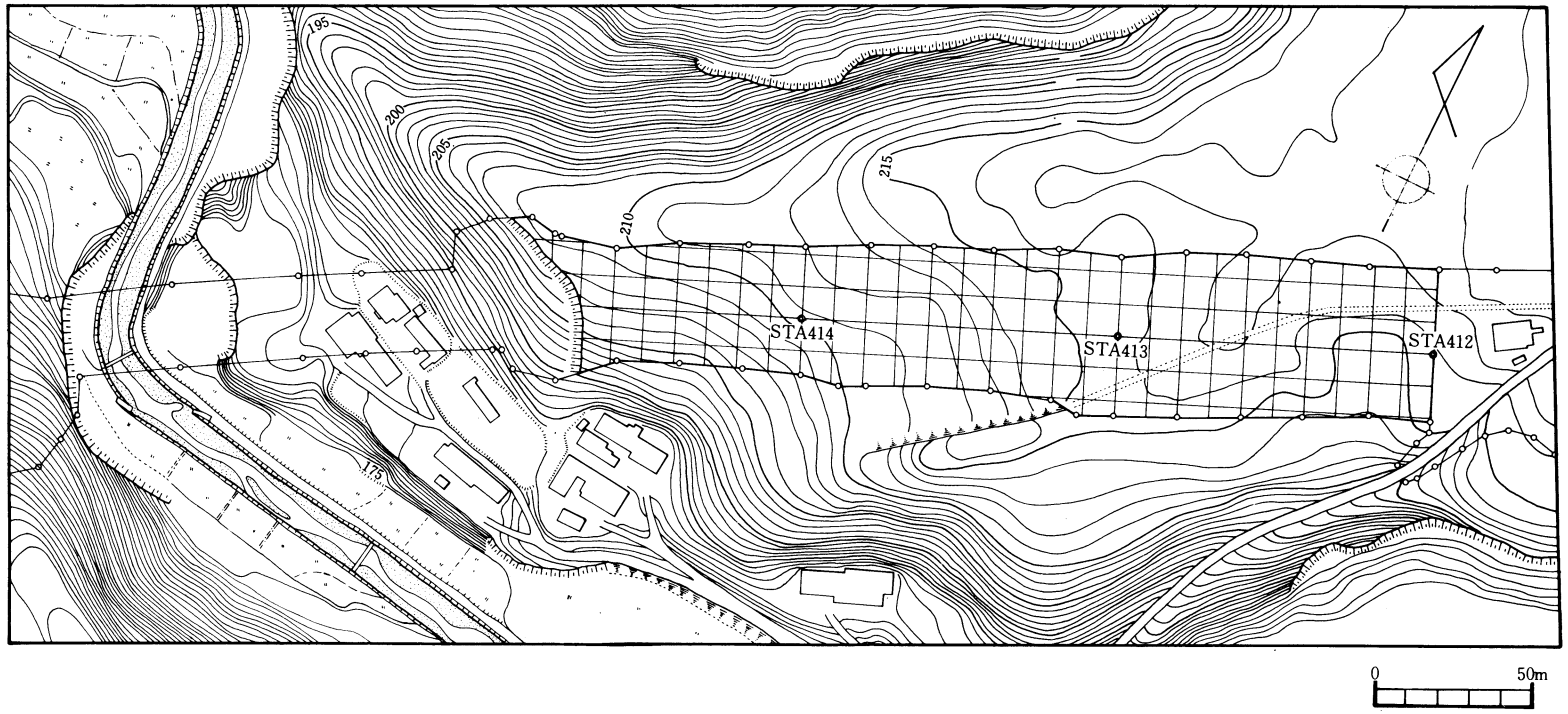
遺跡地はこの溝辺町の南部にあたる。このあたりは台地が火口壁を経て鹿児島湾に至る地域で大小の河川による台地の開析谷が形成される一方、このために台地はえぐられ舌状の台地が谷と交互に位置するといった地形となる。桑ノ丸遺跡は南の桑ノ丸川と西の立岩川が舌状台地先端部で合流するその両河川にはさまれた西面する舌状台地上である。

谷底と台地面との比高は約35m、南側はやや緩やかな傾斜とはなるものの北側は急傾斜となり一見狭立した状況を呈している。台地基部は平坦となり広大な十三塚原台地へとつづいてる。

台地面は現在各畑ごとに段位があるがかってはほぼ平坦であったものと思われる。遺跡はこの台地全体が推定されるが主体は舌状台地先端部約270mであった。



第1図　桑ノ丸遺跡周辺地図



第2図　桑ノ丸遺跡地形図

II　調査の経過

発掘調査は、昭和49年８月５日から開始し昭和50年４月25日終了した。発掘調査の経過は、日誌抄で略述することにした。

８月２日　プレハブ・調査機材・調査機具運搬

５日　発掘調査開始。担当新東、牛ノ浜。作業員に対して調査の主旨と作業上留意すべきことについて説明を実施。道路敷内に調査区の設定。伐採作業開始。

８日　トレンチ設定、掘り下げに入る。トレンチは西から番号をつける。トレンチ11、13を調査開始。工事用道路の関係を考えてＢ区に南北トレンチを入れる。

10日　トレンチ11、調査続行。１層下部より成川式土器・土師器出土。Ⅲ層において縄文式土器片らしきもの確認。

15日　トレンチ11・13調査続行。連日の猛暑のため作業員の出席が悪くはかどらず。

16日　姶良・伊佐地区文化財担当者会議現場視察。

22日　トレンチ９設定、掘り下げ開始。

26日　トレンチ７設定、掘り下げ開始。これまでのトレンチは南北トレンチであったが、東西方向にもトレンチを入れて確認することにした。８・９－Ｂ区に横トレンチ設定、掘り下げ開始。

27日　トレンチ１・３・５設定する。トレンチ５は掘り下げ開始。

29日　トレンチ５・７に溝を確認。Ⅱ層に掘り込まれている。６・７－Ｂ区に横トレンチを設定。掘り下げ開始。

９月２日　４・５区に横トレンチ設定、掘り下げ開始。トレンチ３掘り下げ開始。

３日　横トレンチの４区より磨製石鏃出土。

４日　トレンチ１設定、掘り下げ開始。トレンチ３は終了。

５日　トレンチ１・３と４・５区の横トレンチに溝を確認。溝中より近世陶器出土。

10日　トレンチ４設定、掘り下げ開始。入道遺跡の作業員20人合流。

11日　近世溝の平板実測。トレンチ11の断面図作成、渡辺調査員応援。トレンチ１において縄文式土器検出。

12日　平板実測。トレンチ１掘り下げ続行。Ⅲ層中が縄文前期の包含層であることを確認。

14日　トレンチ２と２・３区の横トレンチの断面実測。トレンチ４掘り下げ続行。

17日　犀川文化課長視察。

18日　トレンチ３・４・５掘り下げ続行。

21日　調査員会議。工事用道路敷内に遺物包含層が確認されたので、本道部分へのグリッド調査へ移る。

24日　1 C区、1 D区から平面調査続行。

26日　1 C区、1 D区、2 B区平面調査。2 B区で成川期の手担土器出土。

28日　1 B区、1 C区平面調査続行。河野主任文化財研究員来跡指示をうける。

30日　1 B区、1 C区平面調査続行。1 E区、1 F区設定、掘り下げ開始。表土排除。弥生式土器片多数出土。トレンチ4は、範囲確認調査。Ⅲ層上部で塞ノ神式出土、Ⅲ層下部で前平式土器出土。

10月3日　2 DE区、3 DE区に確認のための東西トレンチ設定。表土排除開始。

7日　2 DE区、3 DE区の東西トレンチ続行。

8日　トレンチ5・7設定。表土排除開始。2 DE区、3 DE区続行。

11日　トレンチ5・7掘り下げ続行。2 DE区、3 DE区続行。

14日　6・7 D区に横トレンチ設定。掘り下げ開始。このトレンチより近世墓検出。

16日　6・7 D区の横トレンチ掘り下げ続行。近世墓3個掘り下げ。

21日　調査員会議。ＳＴA412～ＳＴA413の間の遺跡確認を急ぎ遺跡範囲を把握するようにとのこと。よって17区以東にトレンチを設定することを計画。

22日　ＳＴA412～413の草木の伐採。トレンチ17設定、掘り下げ開始。

26日　トレンチ17掘り下げ続行。Ⅲb層より吉田式土器が完形に近い状態で出土。

28日　トレンチ17掘り下げ続行。トレンチ19設定（A～F区）掘り下げ開始。
牛ノ浜主事山神遺跡の調査へ、かわって青崎主事当遺跡調査員へ。

30日　トレンチ19掘り下げ続行。トレンチ21設定（A～F区)。

11月1日　トレンチ23設定、掘り下ぜ開始。トレンチ19、21掘り下げ続行。トレンチ19は、Ⅰ層からⅢ層までは削平されている。

6日　トレンチ21掘り下げ終了。トレンチ23堀り下げ続行。トレンチ25設定、掘り下げ開始（A～D区)。

8日　トレンチ23、25区掘り下げ続行。トレンチ25より指宿式土器出土。トレンチ27設定。

11日　トレンチ23、25、27掘り下げ続行。21～27区のC区に東西トレンチ設定。トレンチ25平板実測、写真撮影。

15日　トレンチ25、27黒褐色火山灰層まで終了。18C、D区にグリッド設定、平面掘り下げ開始。トレンチ19断面実測図作成。

20日　17C、18CD区平面調査続行。13BC区グリッド設定、掘り下げ開始。

26日　17CD、18CD区平面調査続行、黒褐色の上面検出に入る。16、17E区に5×10mのグリッド設定、掘り下げ開始。13BC区の平面掘り下げ続行。

30日　13区の平面掘り下げ続行、Ⅲ層に入る。17C区、18CD区平面掘り下げ続行。18－19区にかけては、Ⅳ層の黒褐色火山灰層は、攪乱をうけて存在しないところもある。

12月4日　この間、平面調査続行。Ⅱ層の黄褐色火山灰土層の推積が厚く、排土に苦労する。13BC区平面掘り下げ続行。17C区、18CD区堀り下げ続行。16、17E区続行。

12月５日　トレンチ13のＤＥＦ区設定、掘り下げ開始。ＤＥＦ区の確認を行う。

９日　トレンチ13掘り下げ続行。17Ｃ、18ＣＤ掘り下げ続行。16、17Ｅ区掘り下げ続行。

11日　17Ｃ区、18ＣＤ区掘り下げ続行。縄文前期層に出土遺物はほとんどみられない。16 17Ｅ区掘り下げ続行。13ＢＣ区掘り下げ続行。

12日　17Ｃ区、17ＣＤ区掘り下げ終了。Ⅳ層に落ち込みがみられたが他に遺構は存在せず。遺物は、トレンチ調査によって確認された吉田式土器のみであった。平板実測、写真撮影。13ＢＣ区 掘り下げ続行。４ＢＣ区にグリッドを設定、平面調査開始。

16日　13ＢＣ区掘り下げ続行。４ＢＣ区掘り下げ続行。トレンチ９の調査終了。中村主事調査に加入。

19日　13ＢＣ区掘り下げ続行。13Ｃ区の北壁断面図作成。トレンチ13断面図作成、13区第２地点はほぼ終了し、主体を第１地点の平面調査に移す。１Ｂ区、４ＢＣ区、６ＢＣ区掘り下げ続行。

23日　１ＢＣ区、４ＢＣ区、６ＢＣ区掘り下げ続行。Ⅲａ層の検出が終了しⅢｂ層に移り４Ｃ区－Ⅲｂ層中より角筒土器の破片出土。前平式土器に併う遺物である。

24日　４ＢＣ区縄文前期層までほぼ終了。１ＢＣ区、６Ｃ区掘り下げ続行。作業員の作業は今日で終了。

26日　実測図作成。東西トレンチ22～27（Ｃ区)。トレンチ25（Ａ～Ｆ区)。トレンチ21（Ａ～Ｆ区)。

27日　実測図の整理、事務所の整理を行う。現場作業は今日まで。

１月８日　新年度作業開始。雨の為、作業は午前中。１ＢＣ区、４ＢＣ区、６ＢＣ区の縄文前期（Ⅲｂ）層検出作業。多量の前平式土器片がみられる。

10日　６ＢＣ区終了。５Ｂ区グリッド設定。排土の捨て場がないので６ＢＣ区の遺物の出土していないところに排土を置く。２Ｃ区グリッド設定、表土排除開始。24、25ＢＣ区盛土排除作業にかかる。トレンチ７（ＤＥＦ区）終了。断面実測図作成。

14日　４ＢＣ区終了。平板実測。５Ｃ区Ⅱ層掘り下げに入る。２Ｄ区、３Ｃ区グリッド設定、表土排除にかかる（以上第１地点)。24、25ＢＣＤ区盛土及び表土排除。

22日　１、２Ｄ区Ⅲ層掘り下げ、５Ｃ区Ⅲ層の縄文前期層まで終了。４ＤＥ区グリッド設定、表土排除開始。３Ｃ区表土排除続行。25、26ＢＣＤ区表土排除続行。５Ｄ～７ＤＣ区に検出された近世墓は、子孫の下桑の丸部落住人で掘り上げ、改葬がなされることに決定する。墓穴の検出、掘り上げに協力する。

27日　１Ｄ区、２Ｄ区、３Ｃ区縄文前期層（Ⅲｂ層）検出に入る。１ＣＤ区北壁の断面にのぞいていた遺構の検出に入る。成川の窯状の遺構。

30日　１Ｅ、４ＤＥⅡ層掘り下げ続行、３Ｄ区グリッド設定。２Ｄ区に出土していた完形の成川式土器の実測、写真。

２月２日　雨のため遺物整理。１～６、Ａ～Ｅ区の層位区分。池畑主事今日から調査に加入。

5日　1 E区Ⅲ a b層検出終了。2 E区はⅡ層まで。東西トレンチ8～12まで断面実測図。下桑ノ丸部落近世墓掘り上げ開始する。

8日　2 E区縄文前期層掘り下げ終了。3 D区、4 D E区、5、6 E区続行。

10日　3 D E区、4 D E区、5 D E区掘り下げ続行。4 D E区は、縄文前期層以下の遺物確認のためトレンチで深掘りを開始。下桑ノ丸部落の近世墓の掘り下げ続行。

15日　3 D区Ⅲ b層検出。1～3 C区終了。第1地点がほぼ終了するので、第2地点にグリッドを設定する。10、11、12 B C区の設定。掘り下げ開始。

24日　10～12 B C Ⅱ層掘り下げ続行。続行していた25、26 B C区は、Ⅲ層掘り下げ開始。

26日　10～12 B C Ⅲ層掘り下げ続行。25、26 B C区の出土遺物の平板実測。

3月7日　10～12 B C区Ⅲ層遺物検出。10、11区平板実測。

11日　3 E区、6 D E区、4 D E区の遺物平板実測図作成。10～12 B C区Ⅲ b層検出続行。

17日　5、6、7 D E区Ⅲb層の検出。県文化財専門委員河口貞徳（考古学）、同石川秀雄（地質学）調査指導。

24日　10、11 D E区仕上げ作業。8、9 B C区の盛土を機械力で排土。10～13 D E区も。

25日　10～13 D E区平面掘り下げにかかる。8、9 B C区も開始。

31日　8、9 B C区Ⅱ層の遺構検出。10～13 D E区Ⅱ層検出続行。

4月7日　8、9 B C区Ⅱ層掘り下げ続行。10～13 D E Ⅱ層からⅢ層堀り下げ。

8日　11 E区に完形に近い縄文式土器出土。8、9 B C区続行。10～13 D E区続行。

11日　10～13 C D E区におけるⅢ層は、遺物を包含しない。8、9 B C区平板実測。

15日　8、9 B C区Ⅲ層平面掘り下げ続行。有村八郎課長補佐遺跡来訪。

21日　8、9 B C区のⅢ b層の調査終了。10 D E区のⅢ b層終了。

23日　掘り下げ終了。実測図終了。

24日　発掘調査器具、機材整理をおこない次の調査予定地葛根塚遺跡へ運搬。

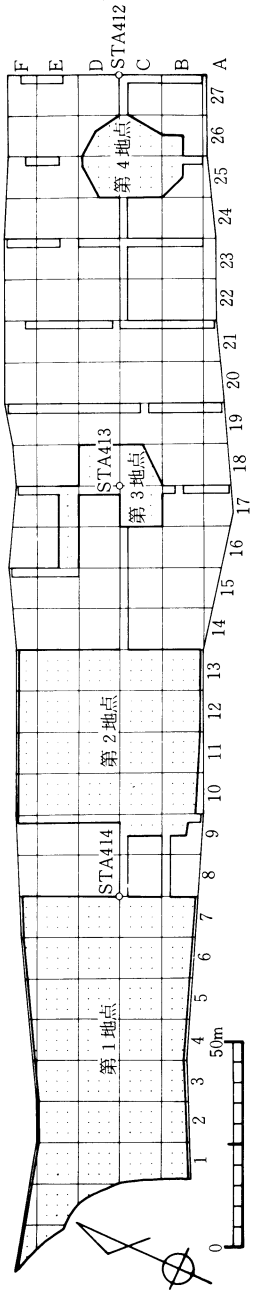
25日　桑ノ丸遺跡調査終了。

III　調査・出土遺物の概要

昭和48年８月に実施した分布調査においては、次のような遺物が表面採集されている。縄文式土器片，弥生式土器片、土師器片、須恵器片などの土器類とチャート、黒曜石片などである。また、ごぼう畑耕作中に土師器の完形品や坏や丸底の底部などが出土している。

桑ノ丸遺跡の発掘調査は、昭和49年８月５日から開始された。最初に、昭和47年度８月におこなった分布調査の結果にもとずいて、当桑ノ丸遺跡の調査方法の検討を実施する。その後、遺跡が所在する路線敷内に、調査区の設定を行なう作業から始めた。路線予定地の中心杭であるＳＴＡ412とＳＴA413を基軸にして、10m×10mを基本とするグリッドを設定する。遺物の散布状況によると、舌状台地の中ほど（ＳＴA413)に集中してみられ遺跡の存在が推定されるが、調査区は、舌状台地の先端からＳＴA412まで設定することにした。そして調査区は、舌状台地先端部から出発してＳＴA412まで設定、１区～27区と呼ぶことにした。中心杭を基軸とした基準線から南の路線予定区域は、10m×10mの基本グリッドが３個設定されるので南から北へＡＢ、Ｃ区とした。そして基軸から北へはＤ、Ｅ、Ｆ区と呼称した。このようにして、10m×10mの基本グリッドは、１Ｂ区あるいは25Ｃ区と呼称することにした。

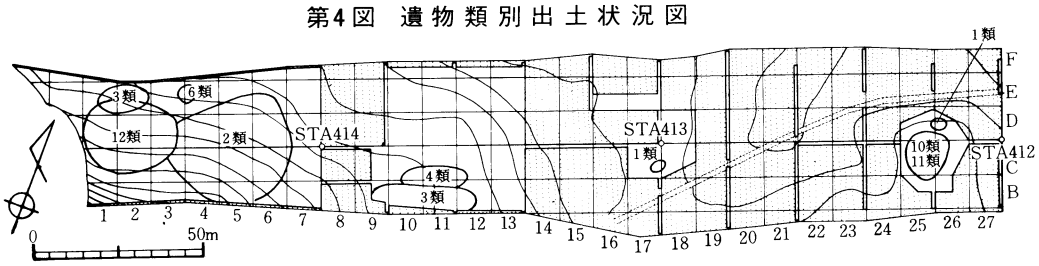
調査は、遺跡の範囲を確認するために各区の南側に２m×10mのトレンチを設定し確認調査を実施することから開始した。確認調査のトレンチは、工事用道路を加味し、奇数区のＢ区の東側に設定しトレンチ○と呼ぶことにした。確認調査の結果、包含層及び遺物の出土範囲が限定されるため、調査の便宜上、調査地点名を付記することにした。そして、１区～７区までを第１地点、９区～13区までを第２地点、17区～18区を第３地点、25区～26区を第４地点と呼ぶことにした。確認調査終了後、本調査を開始した。



第３図　桑ノ丸遺跡グリット配置図

本調査は、各地点ごとにおこない、各地点ごとに整理することにした。報告書の作成にあたっては、各地点ごとに調査の概要を記し遺構の説明と出土遺物の概要について記する方法をとった。出土遺物については、1地点から、4地点までを一括してあつかい土器と石器にわけてそれぞれ個々に記載することにした。出土土器は、各形式ごとに分類する方法をとり列記し説明することにした。縄文式土器、1類から11類に類別が可能であった。これは、桑ノ丸遺跡において出土した層位順に記載したものであって、編年位置を示すものではない。たとえば、塞ノ神B式土器・阿高式土器・轟式土器などは、数片の出土であって層位的に出土してもその実体を知る量ではなかった。次に、縄文式土器以外に成川式土器・土師器・須恵器・近世陶器の種類の遺物がみられる。これらは、その種類に類別番号を記載し、12類から15類とした。遺物は、この類別に説明をおこなった。詳細は、下記表に示した。

第4図　遺物類別出土状況図



第1表　桑ノ丸遺跡出土土器類別表

桑ノ丸遺跡類別	形式	特徴	出土地点	図遺物番号	頁	文献
1類	吉田式土器	円筒土器・口縁部わずかに外反・端部に平縁・胴部文様貝殻押引文・底部にキザミ	第3地点 第4地点	0001～0004	186	河口貞徳「南九州出土の条痕文土器」石器時代1号
2類	前平式土器	円筒土器・口縁端部にキザミ施文・胴部は貝殻条痕文・角筒土器	第1地点	0005～0083	187	河口貞徳「鹿児島県における貝殻条痕文土器について」鹿児島考古第4号
3類		貝殻施文具による、櫛目及び羽状施文口縁端部が内傾し、内湾する。	第1地点 第2地点	0084～0118	202	
4類	押型文土器	山形押形文・楕円押形文・底部は平底	第1地点 第2地点	0119～0128	208	寺師見国「南九州の押型文土器」古代文化 河口貞徳「出水貝塚」鹿児島県文化財報告書
5類	平栫式土器	口縁端部肥厚、凹線文で文様、頸部に凸帯がつく	第4地点	0129	209	河口貞徳「塞ノ神式土器」鹿児島考古第6号
6類	塞ノ神A式土器	口縁部凹線文、胴部撚糸格子目文	第1地点 第4地点	0130～0139	211	河口貞徳「塞ノ神式土器」鹿児島考古第6号
7類	塞ノ神B式土器	口縁部、連続貝殻刺突文	第2地点	0140～0141	211	河口貞徳「塞ノ神式土器」鹿児島考古第6号
8類	轟式土器	口縁部分に4条のミミズバレ凸帯	第1地点	0142～0143	211	松本雅明他「轟式土器の編年」考古学雑誌47－3
9類	阿高式土器	口縁部分に凹線文	第1地点	0144～0145	211	
10類	指宿系土器	2本の凹線を基本に曲線文・直線文	第4地点	0146～0150	212	河口貞徳「南九州に於ける縄文式文化の研究」鹿児島考古学紀要第3号
11類	西平・三万田式土器	頸部「く」の字形　黒色研磨 磨消縄文、凹線文、連点文	第4地点	0151～0155	213	
12類	成川式土器		第1地点	0156～0176	219	文化庁「成川遺跡」
13類	土師器		第1地点 第2地点 第4地点	0177～0189	220	
14類	須恵器		第2地点 第4地点	0190～0191	220	
15類	近世陶器	香炉・高坏の仏具飴釉・化粧土に透明釉のもの	第1地点	0192～0200	222	

Ⅳ　各地点の調査

(1) 層　位

層位は、表層からシラス層までをⅣ層に分離した。畑の耕作土がある地域と無い地域が存在するので耕作土を表層とし、それ以下をⅠ層からⅣ層までに区分した。

表層　現在および過去において畑地耕作がおこなわれ休耕されているところの層である。第1地点においては、舌状台地の先端部という地理的条件も加わり耕作土はみられない。第2地点より以東の地点は、台地も平坦であり長期にわたる耕作の跡がみられ厚い耕作土層がある。ゴボウなどの深耕の跡もみられる。

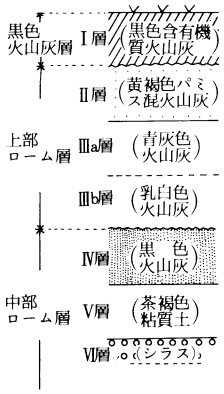
Ⅰ層（黒色含有機質火山灰層）　黒色を呈し上層においては、植物質の腐植物がみられる火山灰層である。第1地点においては、表層にこのⅠ層がみられる。他の地点は、耕作土の下層に残存し耕作による撹乱を免れている。このⅠ層中からは、13類の土師器がみられる。また、Ⅰ層下部からⅡ層との接点において13類土器（成川式土器）が出土する。

Ⅱ層（黄褐色パミス混火山灰層）　黄褐色の火山灰層にパミス混入の多い部分が認められ厳密には分層すべきところであるが、当遺跡では一層として処理した。第1点においては、上層から9類土器（阿高式土器）が出土し、また、第4地点では、10類土器（指宿式土器）およびⅡ類土器（西平式土器）が出土している。

Ⅲａ層（青灰色火山灰層）　このⅢ層は、上層と下層においては明確に層位の違いが認められるが分層するにあたってはその区別は明確ではなく暫移層となっている。そのためａ層およびｂ層として区別することにした。ａ層は、青灰色を呈し粘質が強く固い。第1地点においては、このａ層に6類土器（塞ノ神Ａ式土器）が出土している。また、ａ層の下部およびｂ層との暫移部分に4類土器（押型文土器）が出土している。

Ⅲｂ層（乳白色火山灰層）色調は、乳白色を呈する。Ⅲａと土質を比較すると若干砂質を帯びているようである。Ⅲｂ層中に1類土器（吉田式土器）、2類土器（前平式土器）および3類土器が出土している。これらの土器は、Ⅲｂ層の下部で次層に接するところに集中して出土している

Ⅳ層（黒色火山灰層）黒色を呈する火山灰層である（無遺物層）。第1地点から第4地点にわたり全面に拡っている。この黒色火山灰の下層には、黄褐色のパミス層が混在している。このパミス層は、鹿児島市吉野台地周辺においては



第5図　桑ノ丸遺跡層序

厚く純粋な推積が60cm～80cmみられるが、当遺跡においては、黒色火山灰層に混入した状態であった。分層すべきところであるが当遺跡においては、一括してとりあつかった。

V層（茶褐色粘質土）　色調は、茶褐色のチョコレート色を呈するものである。この層から細石器を出土する遺跡がみられるが、当遺跡においては、確認されなかった。

VI層（シラス）　上層は、軽石が多いが、下層は、いわゆるシラス層である。この層は、40mから100m推積しているといわれている。調査においては、基盤層としてあつかう。

(2) 第1地点の調査

1　調査の概要

第1地点は、舌状台地の先端部南側傾斜面に位置している。台地の西側裾を桑ノ丸川が南流する好条件に面した場所である。川を渡る縦貫道橋染建設のため、舌状台地先端部を掘削中に縄文式土器の条痕文土器の細片が採集された。

確認調査の結果、舌状台地先端部においては、1区から6区まで遺物の出土が確認された。したがって、1区から7区までの縦貫道道路敷部分を全面的に平面調査を行った。調査の便宜上、第1地点と呼称することにした。平面調査における遺溝、遺物の種類について列記すると次のようなものがある。

確認調査において検出された近世墓は、5・6・D・E区に拡がり総数において66基確認されている。溝状の落ち込みは、3本検出されたがいずれも近世墓群の方向にむいていることや溝の状態と遺物などから察して近世墓群に関係する墓道と推定された。

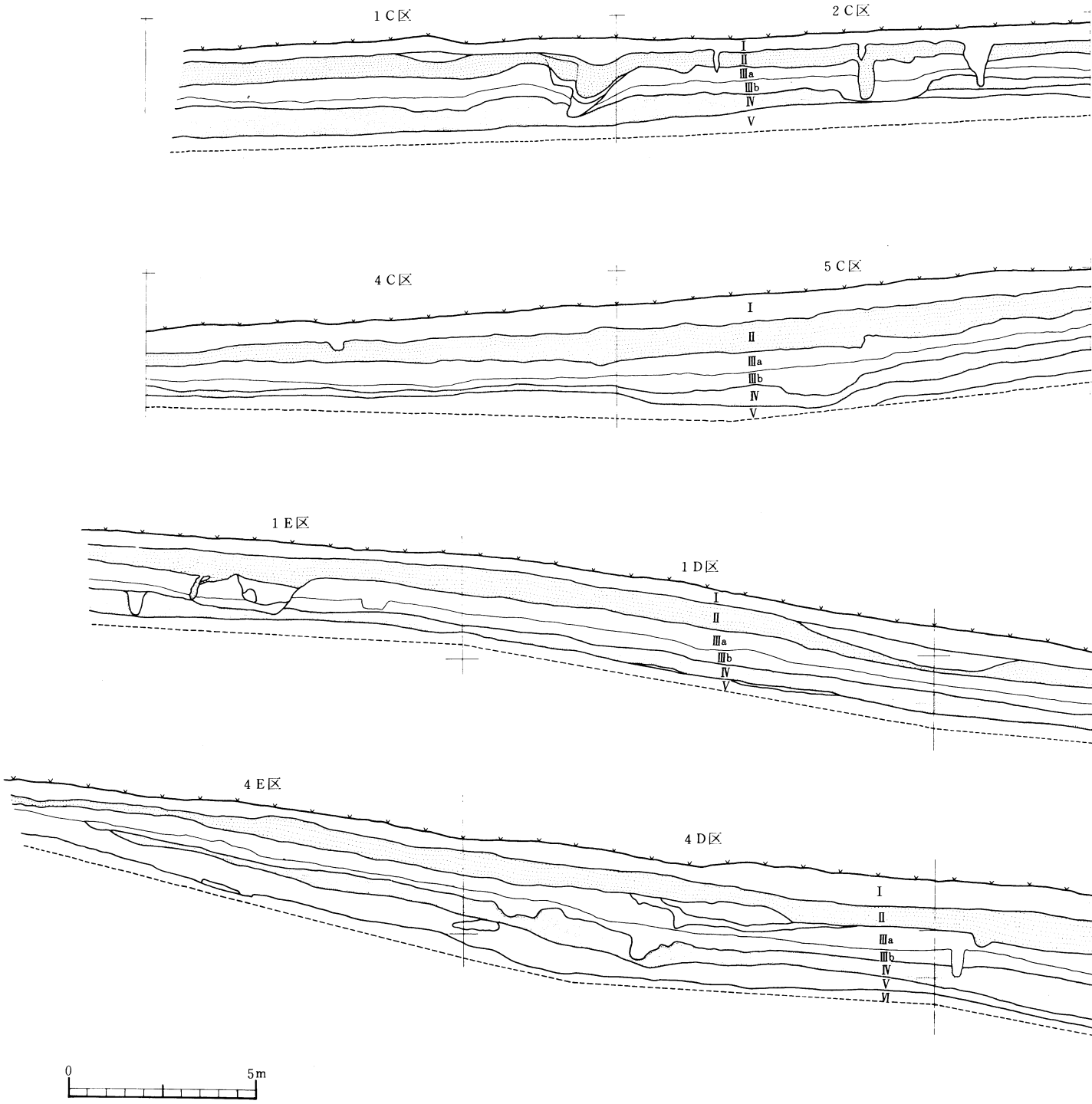
I層とII層の接点から出土する12類土器（成川式土器）は、ほとんどが散乱の状態で出土しているが、ピットの中に置れた状態の完形壺が1個発見されている。その他に12類の遺物を含み炭火物を敷いた落ち込が発見されている（窯状遺構）。この時期に併うと考えられる磨製石鏃は、確認調査で出土した2本以外は出土していない。

確認調査においてII層から出土した8類土器（轟式土器）および9類土器（阿高式土器）はそれ以外には、平面調査においては出土していない。

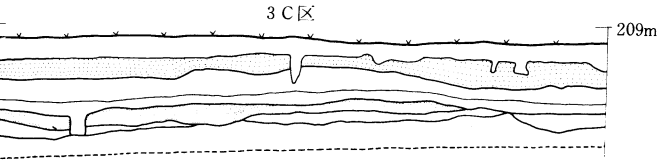
III層の平面調査においては、多量の縄文式土器と石器が出土したが遺構は確認されていない。2類土器（前平式土器）が出土するIII b層下部において自然礫群がみられた。しかしながら、その量はまばらであり、いわゆる集石遺構は発見されていない。住居址様の円形および楕円形の落ち込みが4ケ所検出されたが、調査・検討の結果地層の逆転であることが判明した。その他に局部的な断層も一ケ所確認された。

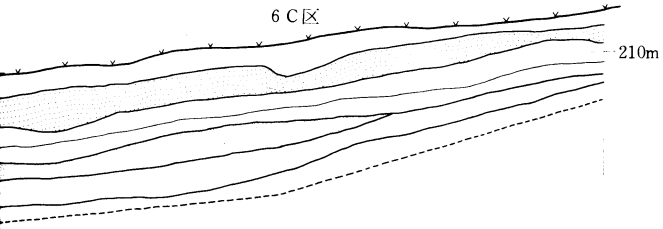
出土土器は、2類土器が最も多く当遺跡を代表する遺物といえる。その他に、3類土器・4類土器（押型文土器）・6類土器（塞ノ神A式土器）・8類土器（轟式土器）・9類土器（阿高式土器）・12類土器（成川式土器）・14類土器（近世陶器）がみられる。

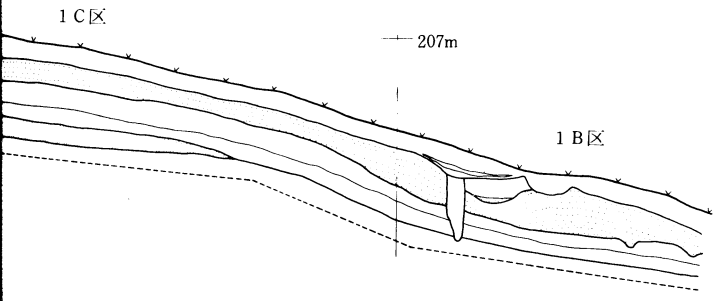
出土石器は、I層下部から磨製石鏃2点とIII b層に共う石器として石斧と磨石がみられる。

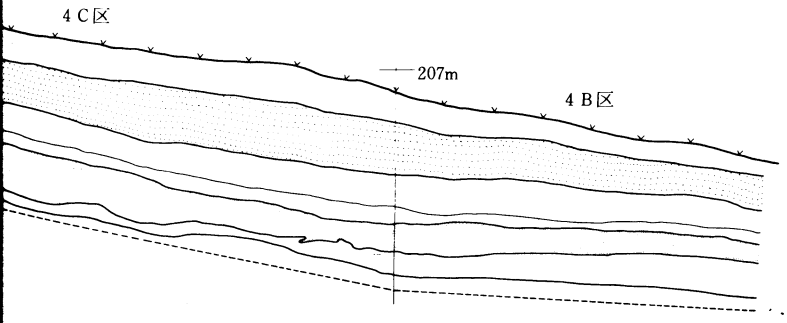


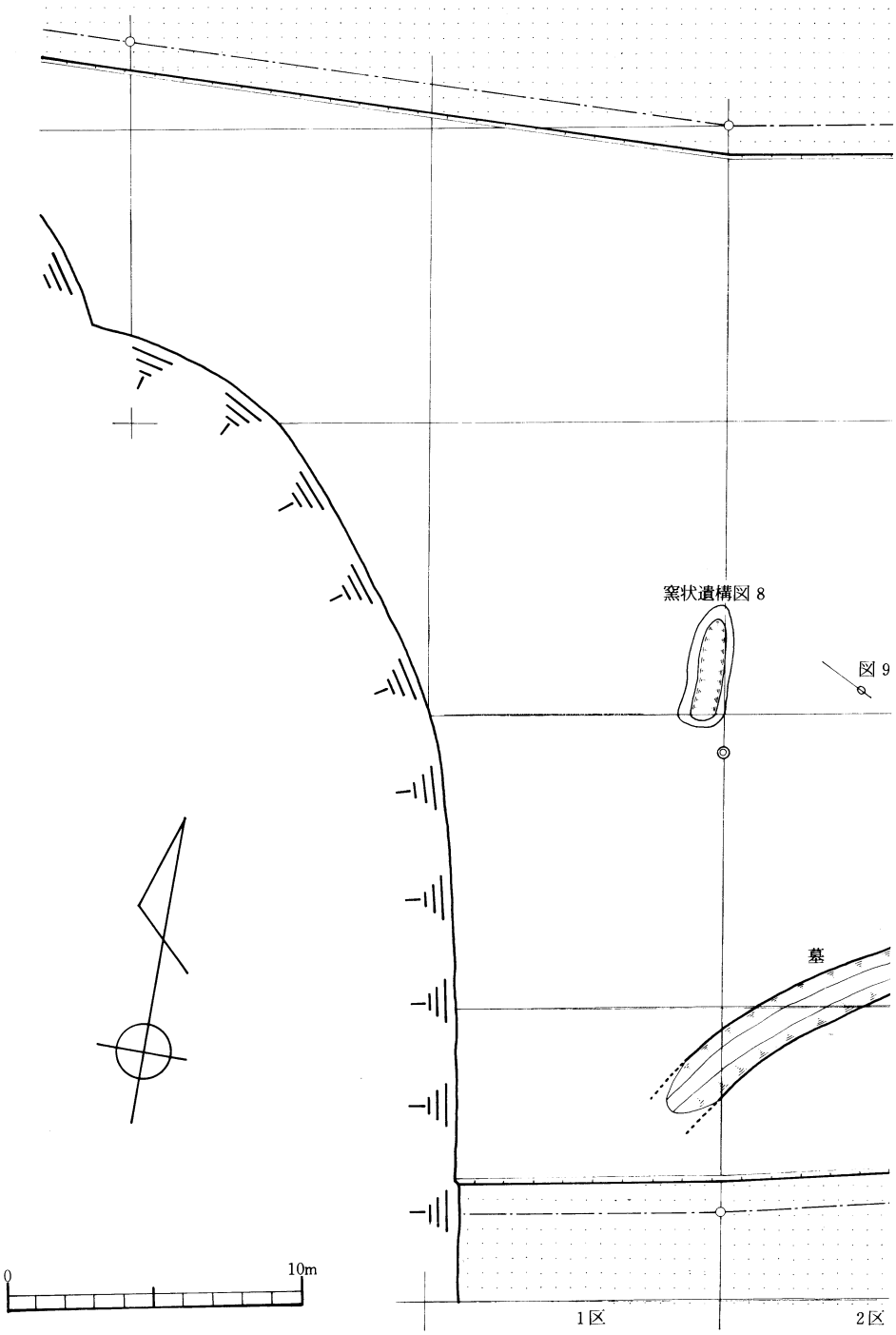
第6図　第1地点断面実測図


3 C区
209m

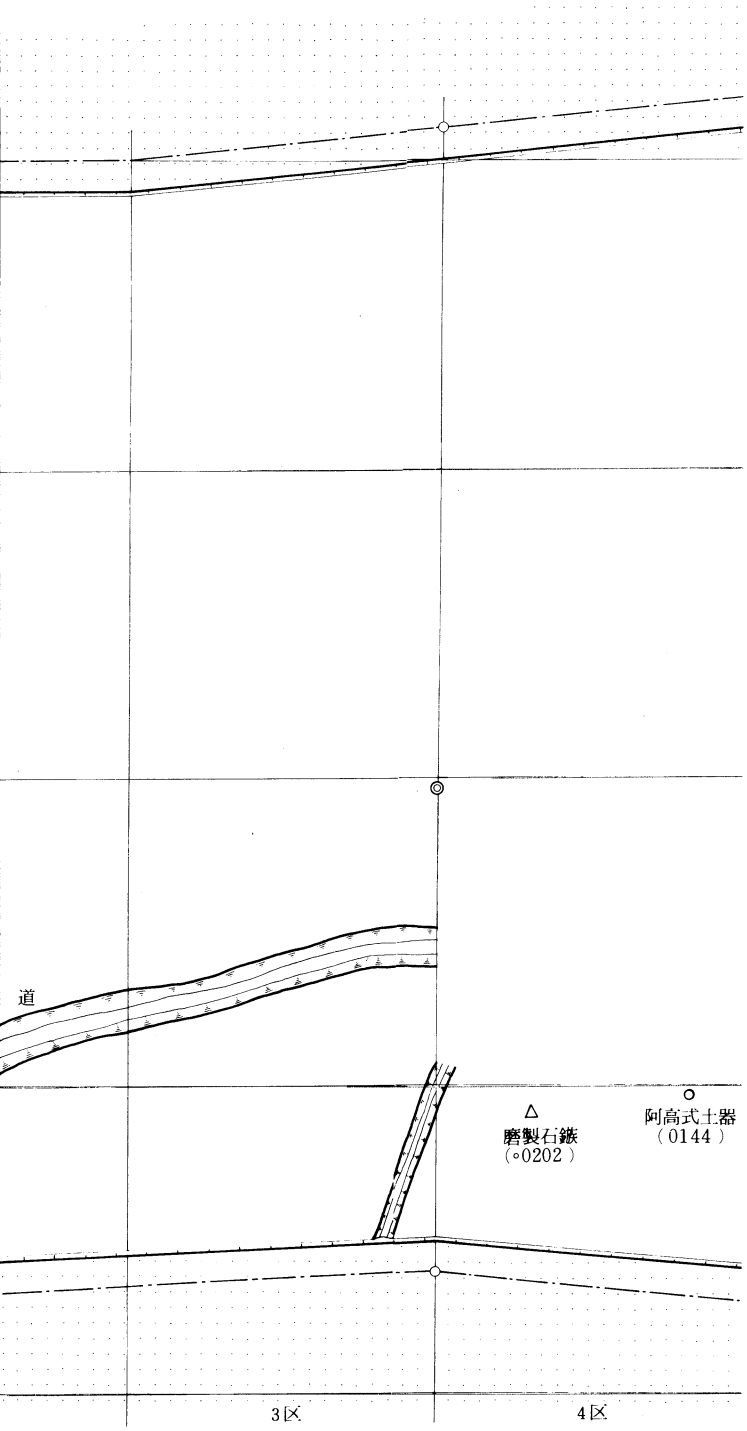

6 C区
210m


1 C区
207m
1 B区

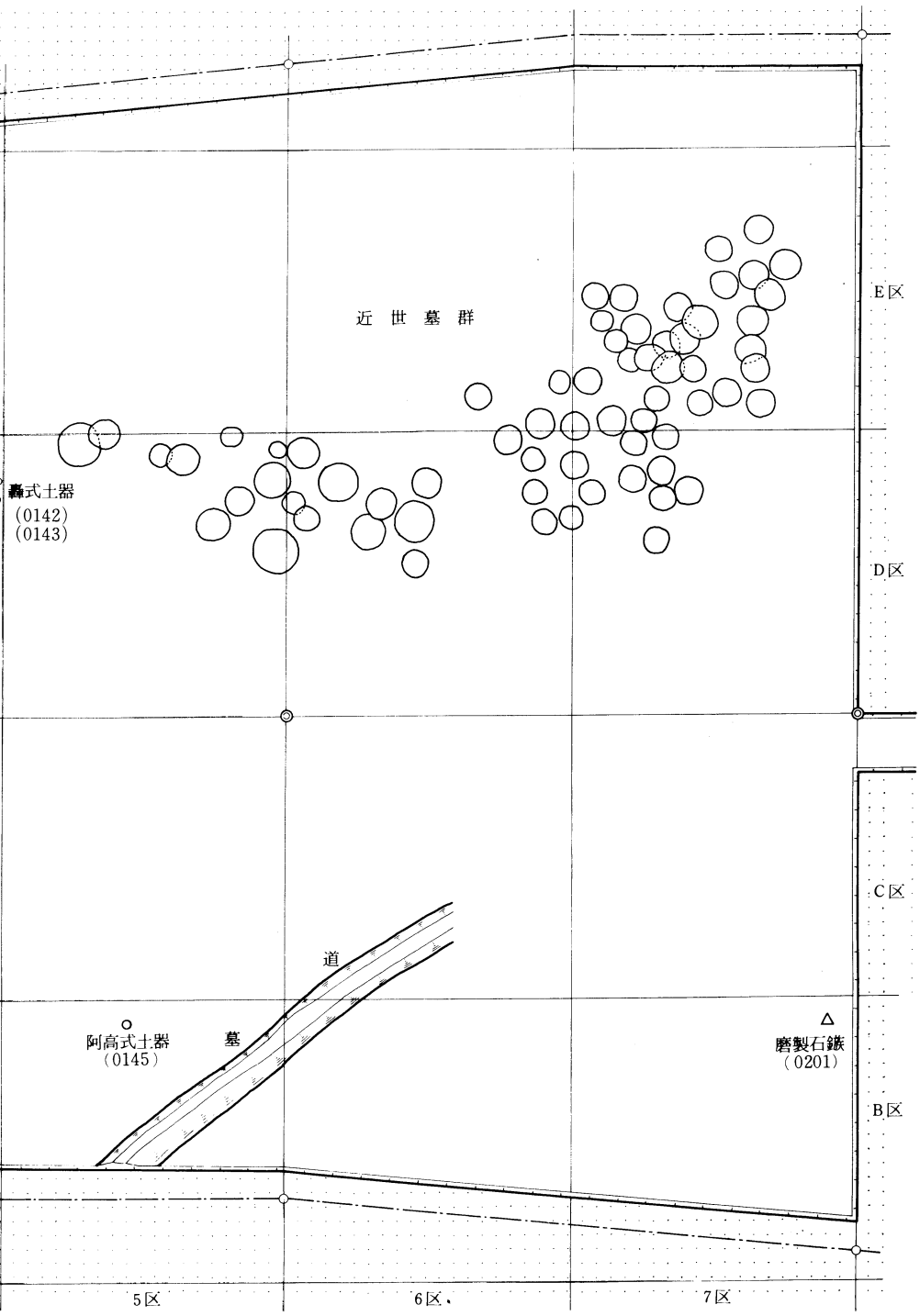

4 C区
207m
4 B区

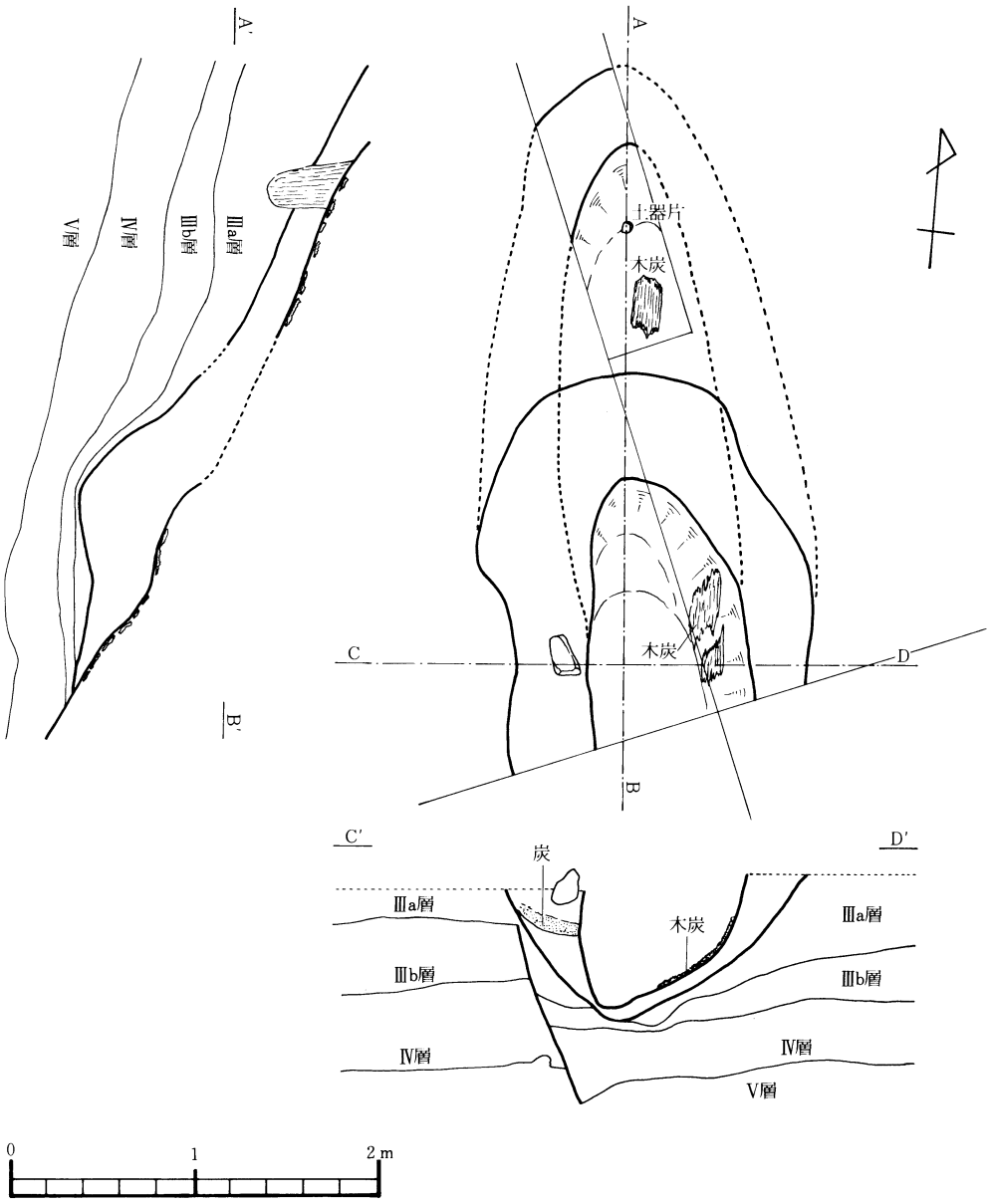


第7図 第



第1地点平面図(Ⅰ)


近世墓群
E区
D区
C区
B区
轟式土器
(0142)
(0143)
道
墓
阿高式土器
(0145)
磨製石鏃
(0201)
5区
6区
7区


A'
B'
Ⅲa層
Ⅲb層
Ⅳ層
Ⅴ層
A
B
C
D
土器片
木炭
木炭
C'
D'
炭
Ⅲa層
Ⅲb層
Ⅳ層
木炭
Ⅲa層
Ⅲb層
Ⅳ層
Ⅴ層
0
1
2 m

第8図 窯 状 遺 構 実 測 図

2　遺構

①近世墓と墓道（第7図）

近世墓は、５Ｄ・６Ｄ・７ＤＥ区に集中して発見された。総数は、66基である。いずれも、正円形に近いきれいな掘り込みである。深さは、1.3m程度のものである。掘り込みの径は、1.6mの最も大きいものから0.6mの小さいものまでみられる。墓穴の底のほうは、空洞をなすものもみられる。墓穴の底には、人骨と共に棺桶の残片や釘金具が残っているものがある。

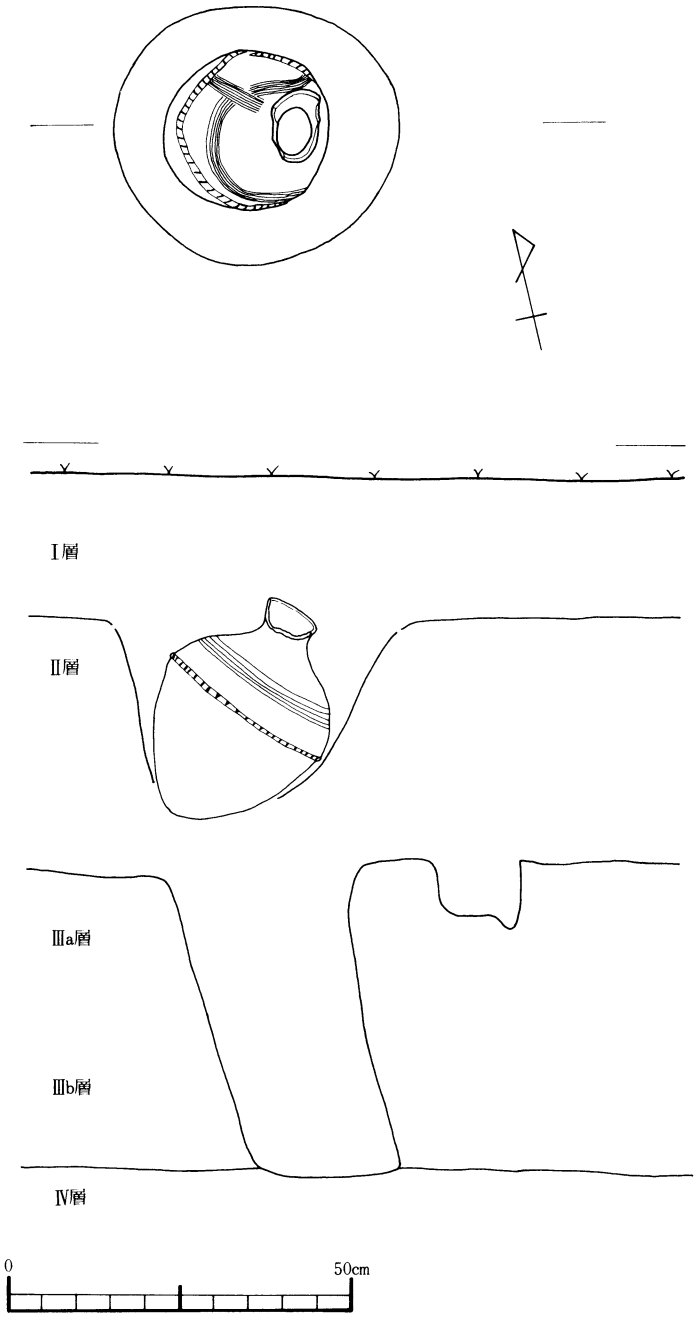
縦貫道敷地外の台地南側傾斜地の山林の中に、墓石の断片が残存していた。また、聞き込み調査における古老の話によると「昔、台地南側の裾部に墓石が積重ねて置れていた」ということである。が、現在の住人の中には、ここを墓地としていたことを記憶している人はいない。現在の墓地は、発見された墓より300m余り東側にある。下桑ノ丸部落に所属する墓地である。溝が、１Ｂ・２Ｃ・３Ｃと３Ｂと５Ｂ・６Ｃにかけて３本検出された。そのうちの２本は、1.7mから1.3mの背巾をもつものであるが、３Ｂのものは、0.5mの狭いものである。溝の断面中には、大正３年の桜島大爆発の火山灰といわれる青灰色の灰層が推積しているのがみられる。溝の底面および周辺からは、近世陶器や磁器の破片が多数出土した。３本の溝は、いずれも近世墓群の方向をむいていることや溝の状態などから察して近世墓群に関係する墓道と推定した。尚、確認調査において近世墓と確認された時点で日本道路公団と下桑ノ丸部落の協議が行なわれた。その結果、墓の掘り下げが行なわれ骨や副葬品は、現在の墓地に改葬されることになった。

②窯状遺構（第8図）

１Ｄ区の東南方向の角に、長径が3.6mで短径が1.8mの登窯状の遺構が検出された。床面および壁面と考えられる部分には、II層（黄褐色）に類似する粘土で築かれている。内面は、巾0.9m、長さ3.2m残存している。壁面にあたる部分の高さは、基部において0.7m残存している。遺構の基部の傾斜は、約30度であり後方に行くに従って約25度の緩傾斜となる。内面の床面と壁面にあたる部分には、火をうけた痕跡が確認される。その上面には、木炭や灰が多量に残存している。後方部の床面には、12類（成川式土器）に伴う丹塗土器の細片が１点密着する状態で確認されている。この窯状遺構が検出された１Ｄ区の周辺区（１Ｂ、２Ｂ・Ｄ、３Ｂ・Ｄ）においては、多量の12類土器が出土している。窯状遺構の５ｍ東方には、下記の12類土器の完形品がピットに入った状態で出土している。この窯状遺構は、層位と遺物から判断すると12類（成川期）の時期に築かれたものと推定される。形態から察すると登窯と考えられるが、土器を焼くためのものか他に使用したものか現状では不明である。

③12類完形土器出土状態（第9図）

完形土器は、第１地点の２Ｄ区におけるＩ層（黒色火山灰層）下部より出土した。この周辺から他にも壺・甕・丹塗土器などが集中して出土しているが、いずれも成川式土器と呼称され



第9図　12類完形土器出土状態実測図

るものであり当遺跡においては12類にあたるものである。

完形土器の出土した地域は、舌状台地の先端部近くであり南側にゆるやかな傾斜がみられる。遺物の散布がみられるところは若干平坦面を呈した部分である。

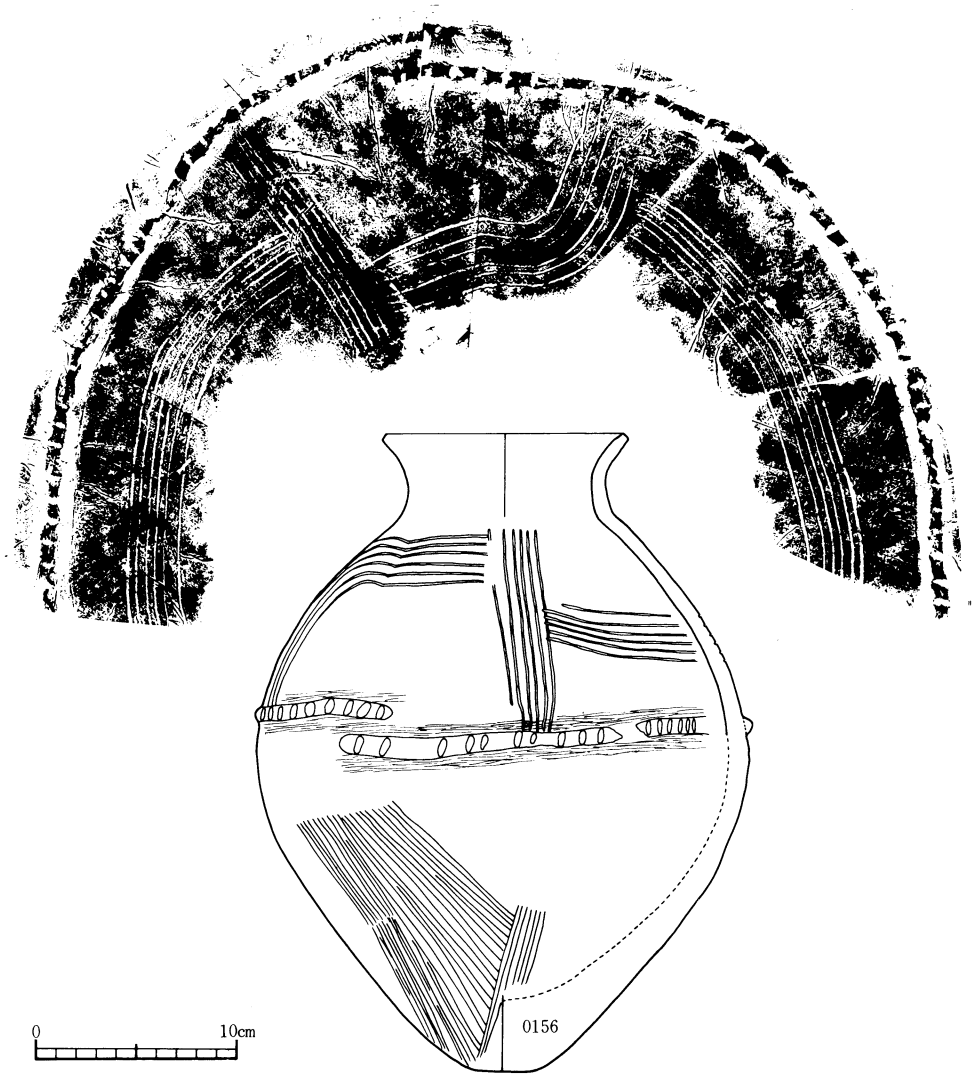
完形土器は、第II層（黄褐色パミス混火山灰層）に掘り込んだ径40cm、深さ25cmの円形のピット中に出土している。土器は、約60度の傾きをもって底部を下に口縁部を上の状態で出土している。土器内部の土からは、炭化物が微量に検出されただけである。

④12類完形壺（第10図）

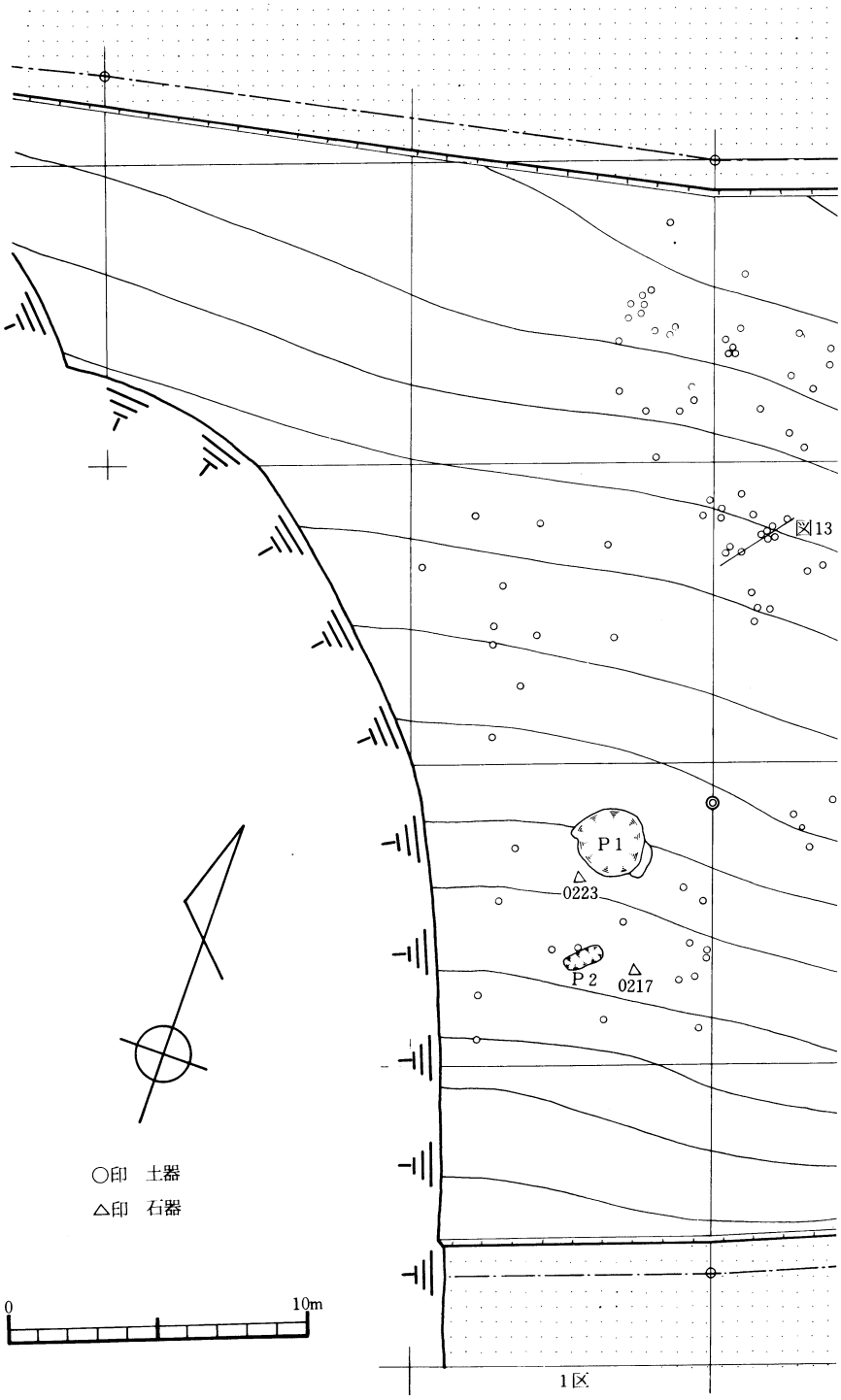
出土した土器について説明すると次のようになる。

胴部がやや球形状に張った器体で、胴部最大幅(24.6cm)がほぼ中位の高さにある。底部は径3.4cmの尖底に近い平底であり、器高は32cmを測る。胴部からしまってきた頸部は外びらきの短い頸部を有する器形である。胴部最大幅の位置に幅約0.8cm、厚さ0.4cmのはりつけ突帯をめぐらす。しかしこの突帯はつながらず上下にすれちがう。又、突帯には布目圧痕が見られる刻目が施されている。この土器の

大きな特徴はヘラ状の施文具による沈線文を頸部から胴部にかけて施していることである。6条の沈線を頸部より突帯上部まで縦にひき、その縦位の沈線を中心に右方向に6条の沈線を横位に$\frac{2}{3}$周めぐらす。左方向には同じく6条の沈線で重孤状の文様を施す。突帯のはりつけ部分はハケによる横なでの調整を行ない、胴部突帯以下は斜位のヘラ調整を施す。成川式系統の土器でヘラ状施文具による文様を施す土器は指宿市に舟を描いたもの、鹿児島市吉野町七社遺跡に魚を描いたものがある。又、下甑村手打の大原・宮園遺跡にヘラによる沈線を描いたものが見られる。



第10図　土器実測図及拓影



第11

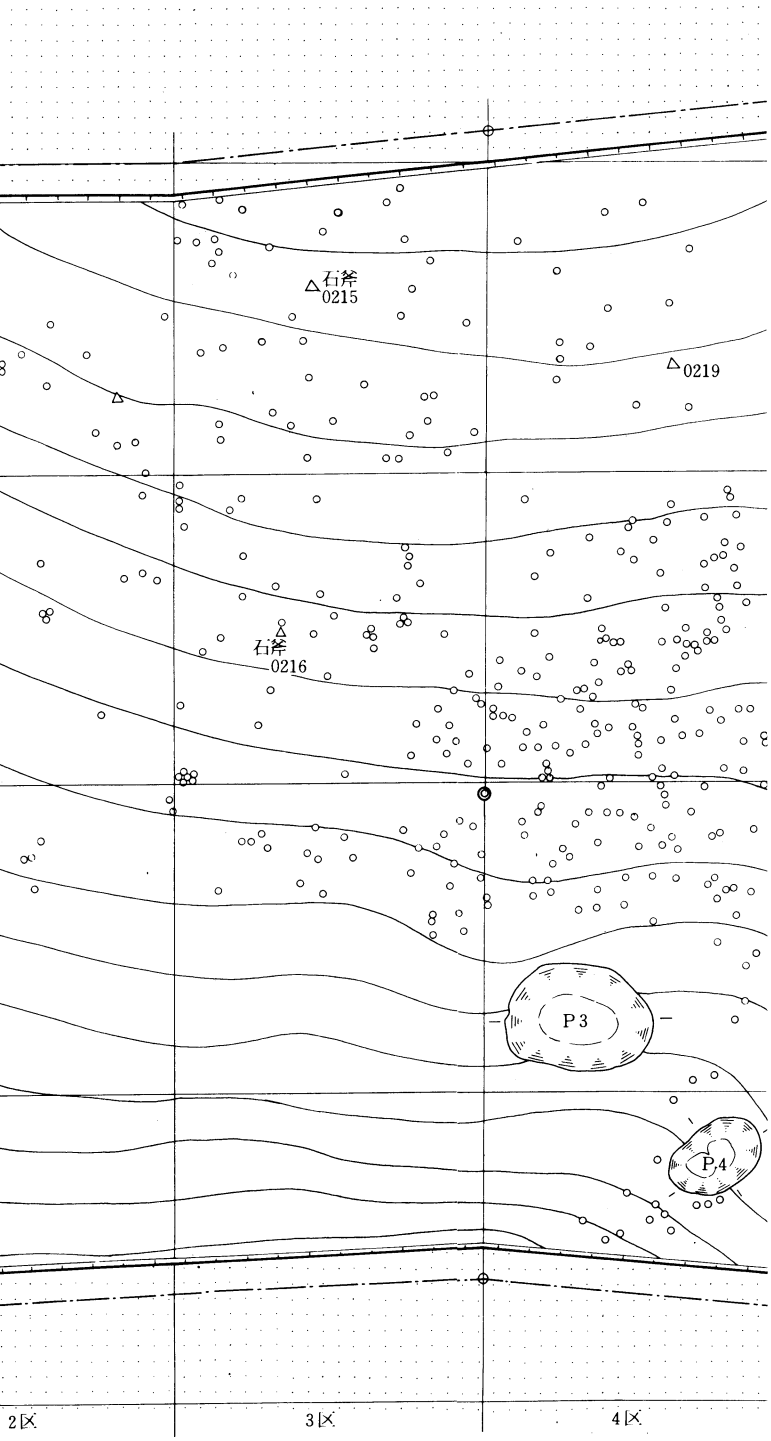
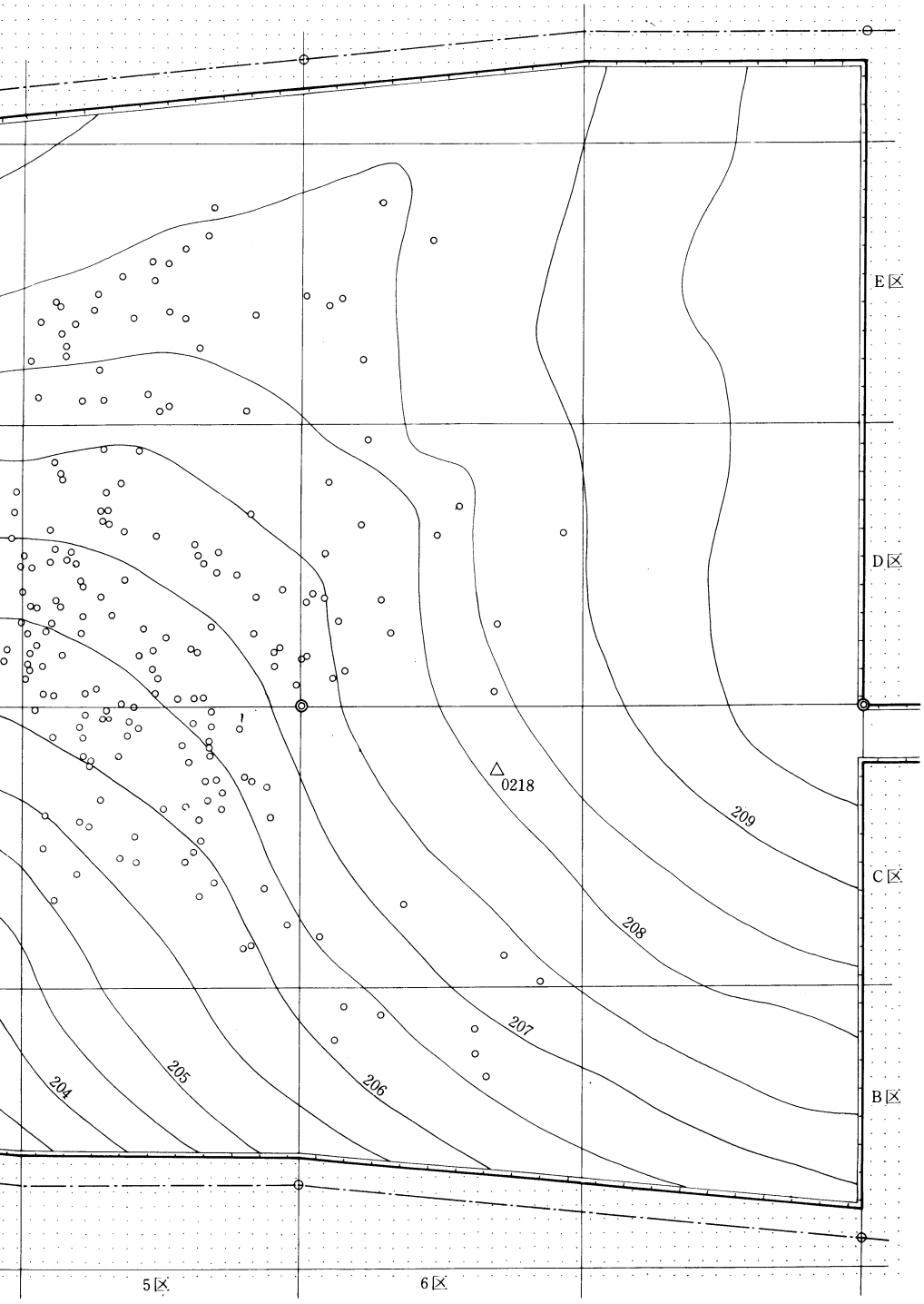


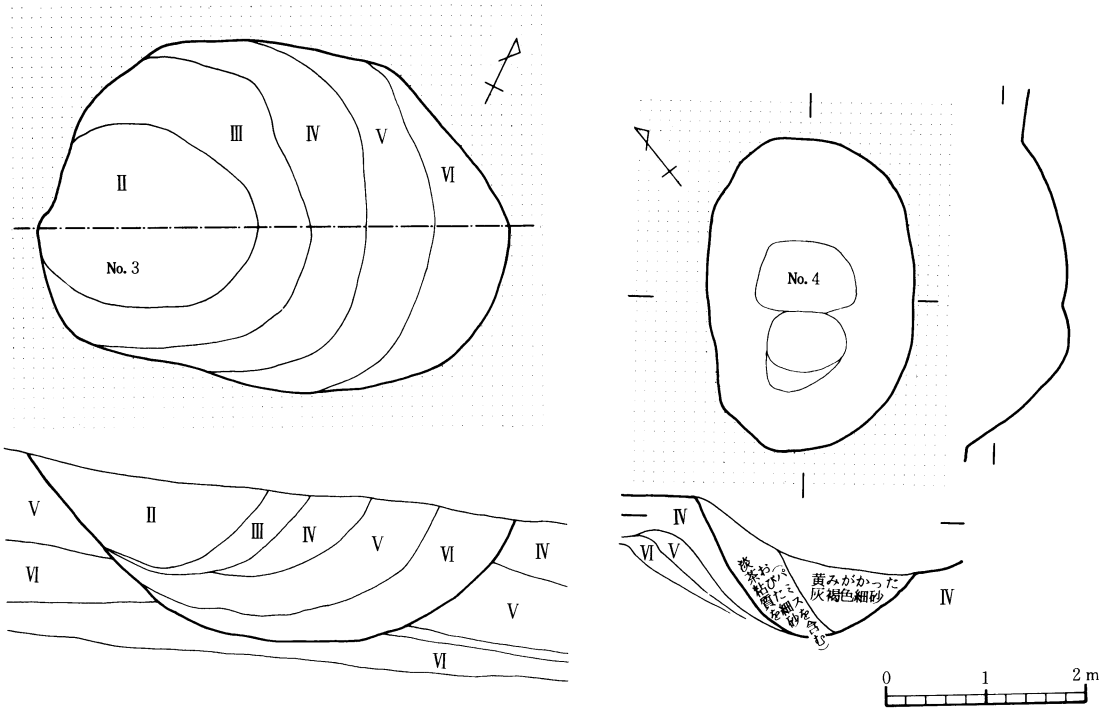
図 第1地点平面図(Ⅱ)(Ⅲb層地形図と2類土器)


E区
D区
C区
B区
5区
6区
△0218
209
208
207
206
205
204

⑤4－C区及び4－Bにおける地層の撓曲部について

4 C区においてはⅤ層（茶褐色粘質土層・チョコレート色）及びⅣ層（黒色火山灰層）の上面において長径2.4m、短径1.8mで深さ約0.8mの撓曲が見られる。Ⅱ層（黄褐色パミス混入の火山灰層）Ⅲ a層（青灰色土層）、Ⅳ層、Ⅴ層、Ⅵ層（シラス層）が横転した状態で落ち込み状にⅣ層、Ⅴ層、Ⅵ層まで入りこんでいる。撓曲の最下部であるⅥ層の下面においては正常な土層と接する部分が鮮明でなくⅥ層下部の細砂等が混入して荒れた状態である。又当遺跡において2類の土器の主たる包含層であるⅢ b層（乳白色土層）は見られない。Ⅳ B区においては長径1.5m、短径1.0mのだ円形の落ち込みが見られる。落ち込み内の埋土は淡茶色で粘質を帯びている細砂（パミスを含む）と黄色がかった細砂である。一見遺構ではないかと考えられるが、断面を見ると撓曲により生じた窪地であり、傾斜の強い部分であるために人為的な落ち込みと見まちがえるような埋土の状態になったものと思われる。

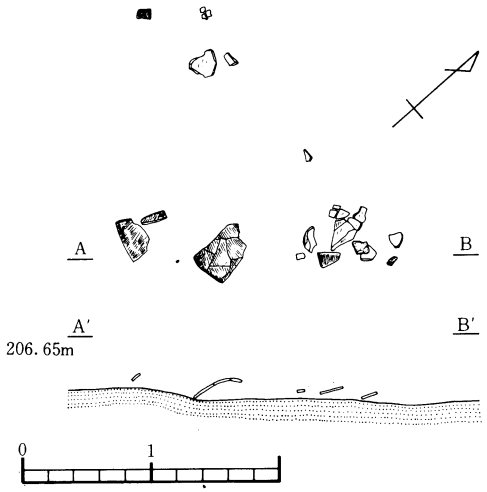
このような局所的な地層の撓曲や小断層は桑ノ丸遺跡をはじめ溝辺台地には各所に見られる現象である。鹿児島大学の石川秀雄教授によると、このような地層の変化の形成時期は上部ローム層が推積したあとであり、黒色火山灰層が推積する以前ではないかということである。おそらく当時においては活発な火山活動や地殻変動が起こりこのような地層の変化が生じたものと思われる。



第12図　地 層 横 転 実 測 図

⑥出土遺物と土器出土状況

発掘調査に従って、出土遺物を概述すると次のようになる。近世墓に伴って15類(近世陶器)が出土している。これは、近世墓周辺と墓道にみられるものである。陶器は、竜門寺焼であり香炉など仏具の他に碗類がみられる。1層中からは、土師器（13類）が出土している。Ⅰ層下部においては、12類と称する成川式土器が出土している。これらは、舌状台地の先端部に一群となって出土しているものであり中に完形壺が前記したような形で発見され窯状遺構が存在するという特異な様相を呈している。次にⅡ層の黄褐色土層中より9類土器（阿高式土器）と8類土器（轟式土器）がみられる。いずれも2片という小量であり、特に8類土器（轟式土器）については、疑問の残る出土層位といえる。Ⅱ層以下は、Ⅲa層とⅢb層であり、いずれも縄文前期層に比定される層位である。当遺跡において第1地点は、このⅢ層が最も広くみられるところであり、その出土遺物は多い。Ⅲa層からは、6類土器（塞ノ神A式土器）と4類土器（押型文土器）がみられる。Ⅲb層からは、若干の3類土器と2類土器（前平式土器）がみられる。3類土器は、第2地点で出土したものと同類でありこれまでの形式にはみられないものである。また、3類土器と2類土器は、その出土範囲の中心は重ならない。第1地点においては、2類土器が広い範囲で最も多量に出土している。この2類土器には、円筒土器と角筒土器がみられる。2類土器は、Ⅲb層下部にみられⅣ層上面に密着した状態のものもある。出土状態は、ほとんどが細片化し散在して出土しているが、その場で押しつぶされた状態の完形品の出土も数ケ所でみられる。円筒土器の完形品は、2個体出土し、角筒土器の完形に近いものは、3個体みられる。石器は、Ⅰ層下部でⅡ層上面に位置するところに磨製石鏃が2本検出されている。Ⅲb層においては、石斧と石ケン状石がみられる。特に石ケン状石は、Ⅲb層の所産と考えられ、前平式土器に伴うことが明確となった。

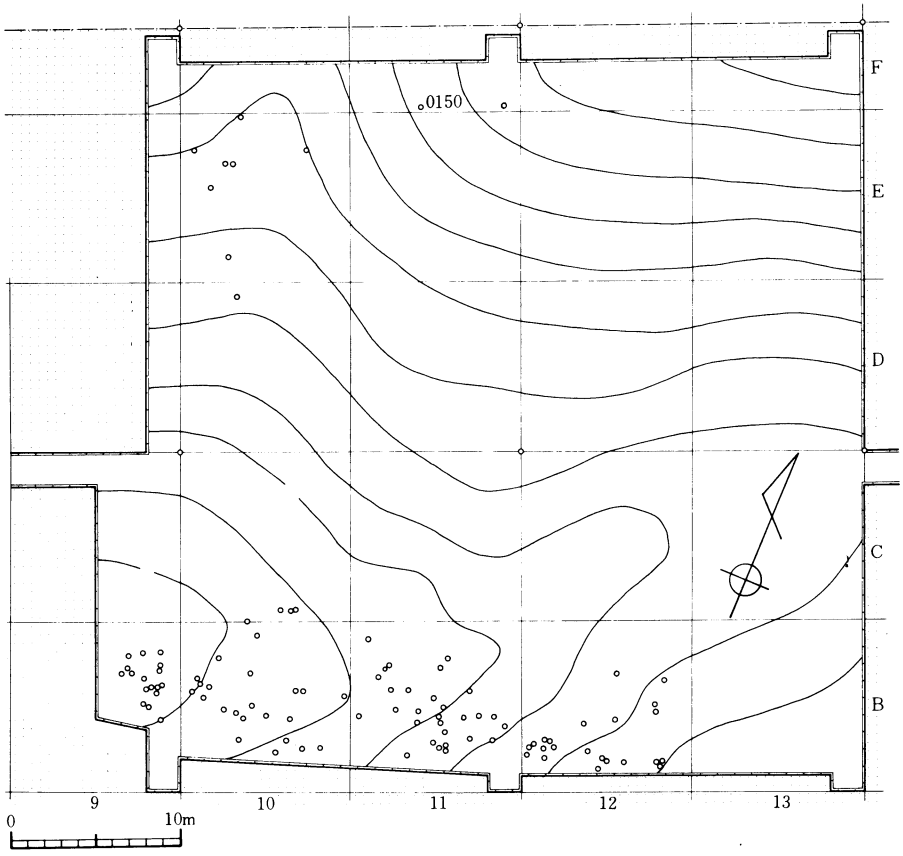


第13図　縄文式土器出土状況図

(3) 第2地点の調査

①調査の概要

第1地点から第2地点へ移行すると、8区付近で一段高くなり平坦地となっている。第1地点は、丘陵の自然地形を残しているが第2地点は平坦化され畑が営なまれている。その段は、高い所で約1.5mにおよんでいる。東方15区のところにおいてさらに一段高くなり平坦な畑地がみられる。これらの平坦地から土師器片などの散布がみられる。この段によって区限られた9区から13区までを調査の便宜上第2地点と呼ぶことにした。この平坦地は、近年の農地整理事業において重機における大がかりな整備によるものであり、遺跡の攪乱が予想された。第2地点は、9区、11区、13区にトレンチを設定し確認調査から開始した。確認調査の結果、B・C区のⅢb層に縄文式土器の包含を確認した。地形は、平坦を呈しているが農地整備事業において相当量の土の移動が行なわれたことが確認された。北側のD・E区は、Ⅱ層まではほとんど削平されて消滅している状態である。そして削平された土は、B・C区に盛られている。B・



第14図 第 2 地 点 平 面 図

C区においては、縄文層（III b）に至るには約1.5m～2mの深さである。

第2地点においては、遺構は検出されていない。ただ、13C区のIII a層において、自然石の比較的密集した状態が検出されている。

出土遺物は、縄文式土器が多種にわたってみられ10E区の一部と9～12B区に集中して出土した。9～12B区においては、3類土器と4類土器（押型文）が多量にみられる。その他の出土土器としては、2類土器（前平式土器）の角筒土器片2点と7類土器（塞ノ神B式土器）片2点が混在している。

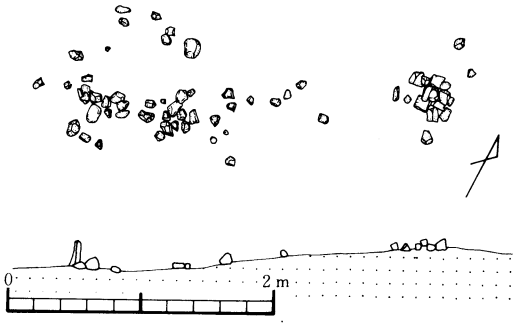
②集石について

1号、2号集石は13C区の第III a層に検出された。1号集石は握拳大の角礫、円礫17個が長径40cm、短径40cmの円形状に、一応まとまりを成して出土した。2号集石の出土状況は数個がまとまっているものの、バラツキが大きく、四方に散在し、攪乱を受けているものと思われる。また第III b層にも同様な小礫が数多くみられるが、そのほとんどが散乱して点在している。礫や集石の周辺を詳細に観察したが、木炭、灰の残存や腐蝕物の付着など、痕跡は認め得なかった。素材としては輝石安山岩がほとんどである。

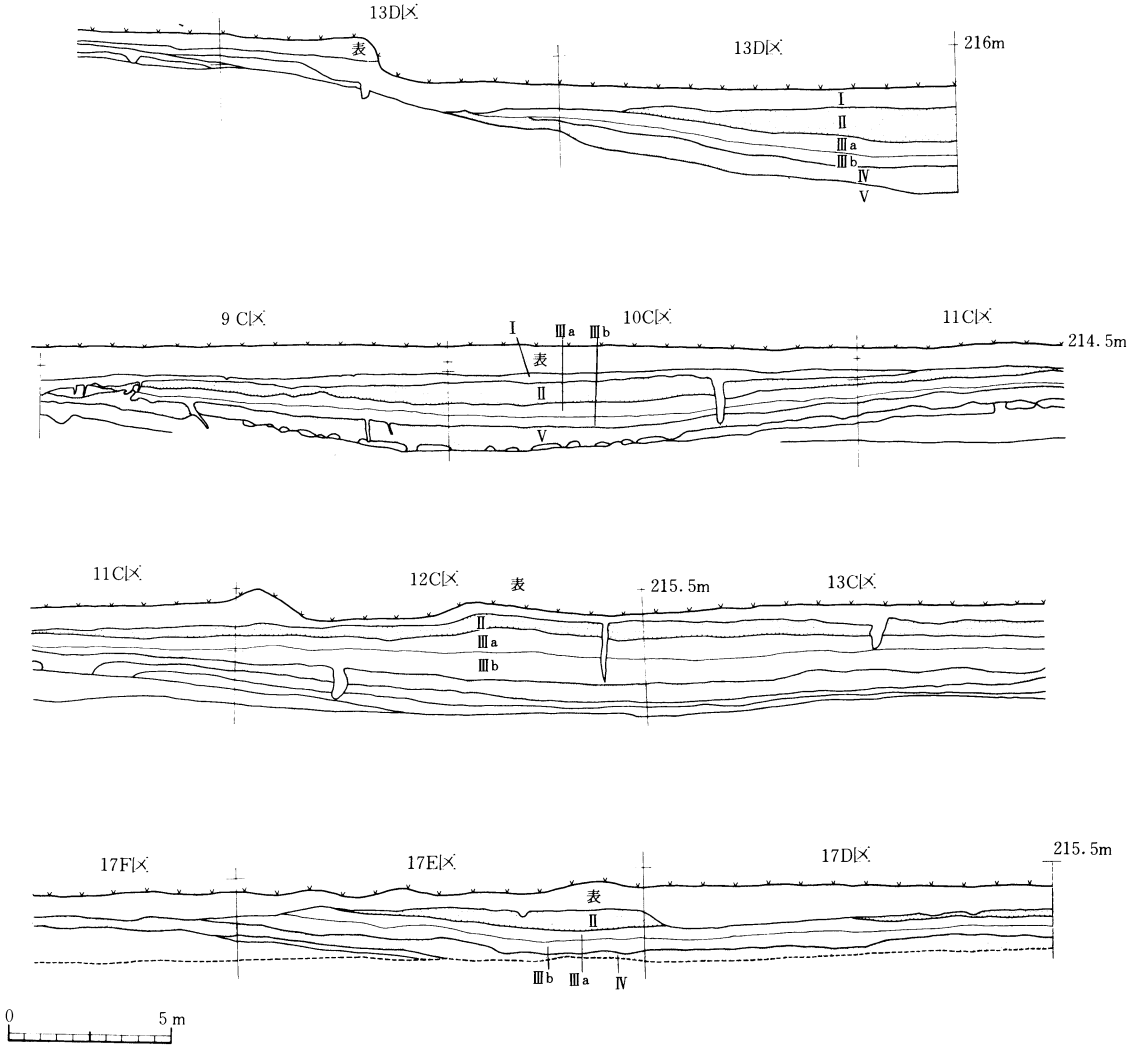
この種の集石は、本県においては縄文時代前期の遺跡である「北手牧遺跡」、「花ノ木遺跡」など、一遺跡に数基の発見例をみるが、その性格など定かでない。

③出土土器

1層出土の土師器、須恵器を除くと他の遺物は、縄文前期に比定されるIII a層およびIII b層からその出土がみられる。いずれも縄文前期の遺物である。III a層中より、7類土器（塞ノ神B式土器）が2片出土している。次にIII a層とIII b層の暫移部分に4類土器（押形文土器）が出土している。当遺跡においては、押型文土器は第1地点と第2地点の両地点にみられる。2類土器に含めた角筒土器片2片もほぼ同層位から出土している。次にIII b層に主体を占める3類土器が多量に出土している。第1地点にも若干出土しているがII類土器（前平式土器）と層位を同じくすることから近隣の文化と考えられるものである。これまで形式区分のなされていないものであり当遺跡を代表するものとなろう。



第15図　集　石　実　測　図

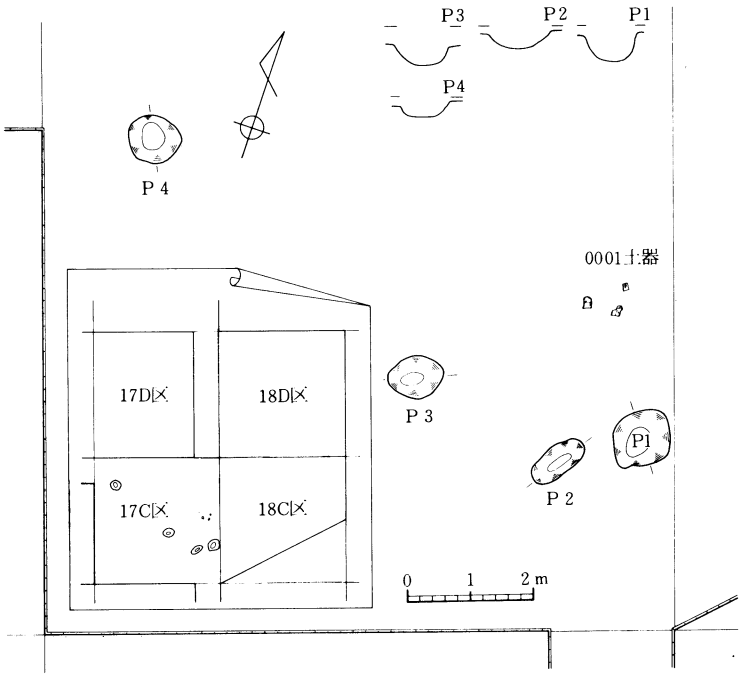


第16図　第2地点・第3地点断面図

(4)第3地点の調査

①調査の概要

第1地点の東端の15区付近で再び一段高くなり平坦な畑が営まれねいる。分布調査の折、この平坦な畑地には、若干の弥生式土器・土師器細片の散布が認められた地域である。20mピッチでトレンチを設定し確認調査をおこなった結果、15・19・21・23の各トレンチにおいては、遺物を包含するII層及びIII層はすでに削平されている状態であった。しかしながら、17区のトレンチにおいて完形に近い状態の1類土器（吉田式土器）が出土したため、この17C区を中心に平面調査を行った。この地点が、第3地点である。1類土器を包含したIIIb層は、19区から以東においてはすでに削平されている。平面調査の結果、IV層下の黄褐色パミス層において、80cmから90cmの円形及び楕円形の落ち込が4ケ所確認された。17C区においては、IV層下部の黄褐色パミス層が比較的しっかり残っているところである。このIV層下部にIV層上部の黒色火山灰層を流入した落ち込みが検出された。この落ち込みは、円形及び楕円形の人工的形状を示すものであるが、遺物は発見されず、無遺物層の黒色火山灰層が流入したものであり性格は不明である。出土遺物は、表層（耕作中）18D区から出土した磨製石斧とIIIb層（17C区）より出土した1類（吉田式土器）のみで他にはみられない。

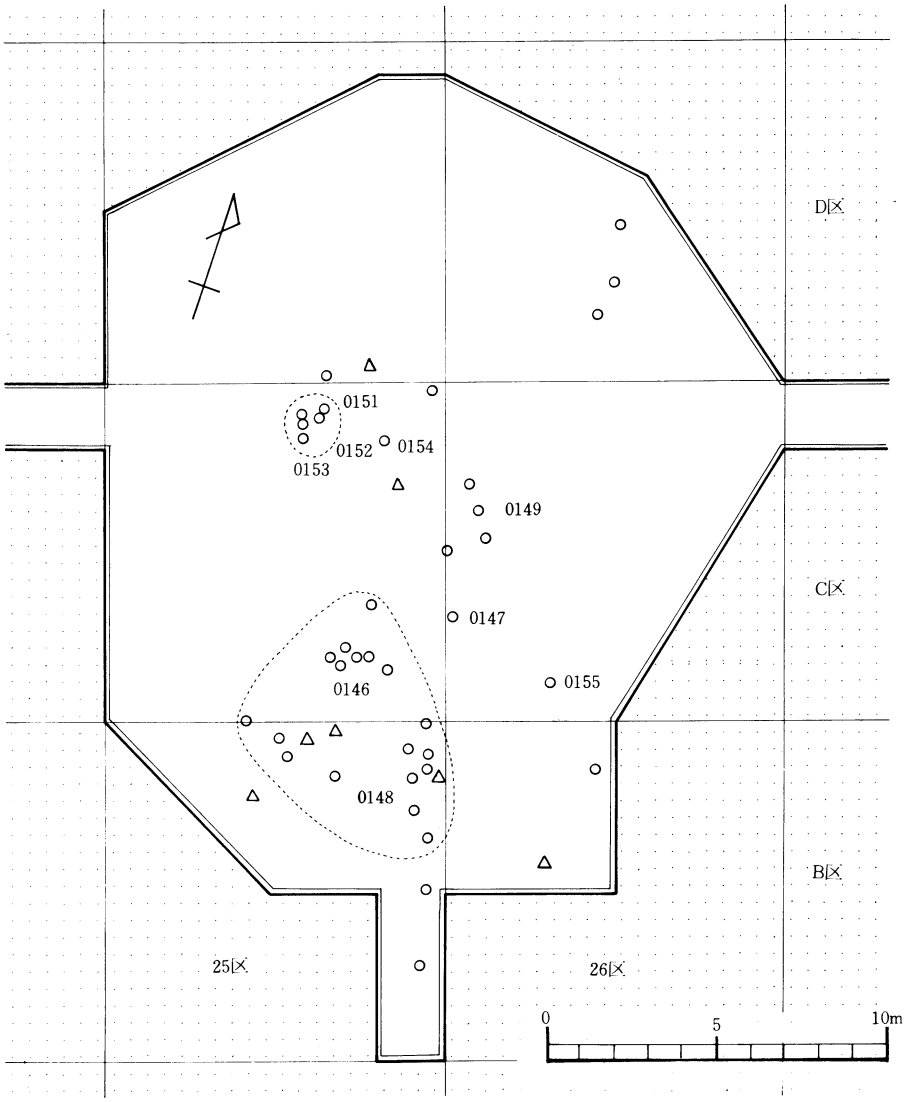


第17図 第 3 地 点 平 面 図

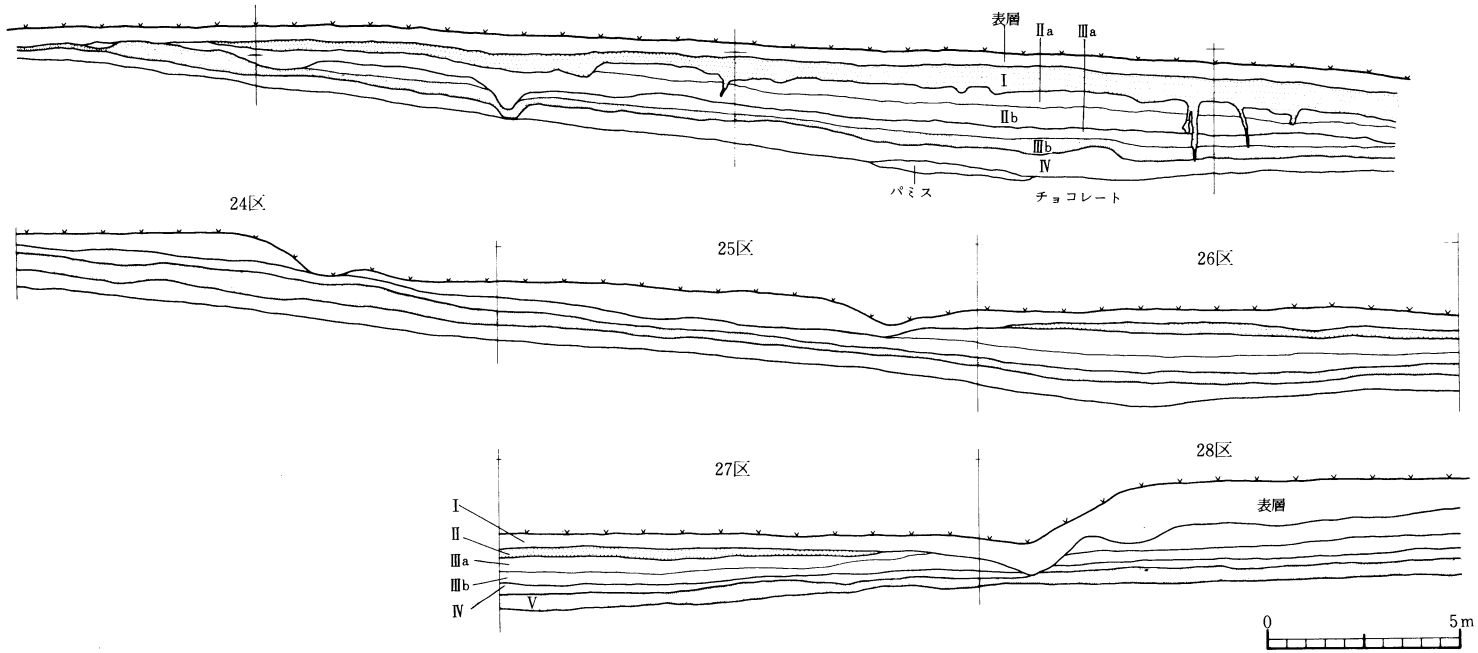
(5)第 4 地点の調査

①調査の概要

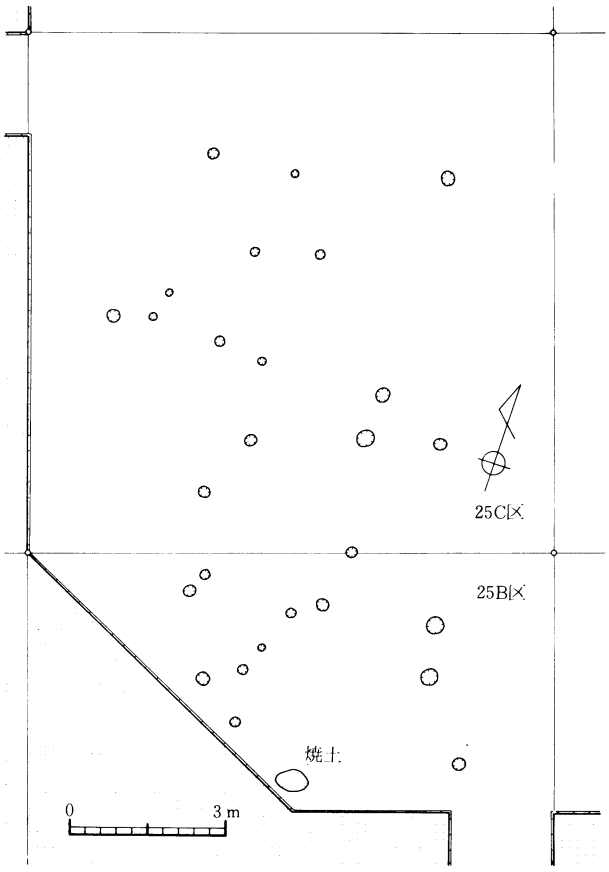
25・26区付近は、周辺の地形よりも一段低くなり南の方へ傾斜している。この谷状の窪みを形成する中央部分にトレンチ25を設定し確認調査をおこなったところ次のような遺物が出土した。Ⅰ層黒色火山灰層下部から土師器杯、Ⅱ層（黄褐色パミス混火山灰層）から縄文式土器(後期)片が出土した。さらに、調査を進めるとⅢb層からは、縄文前期に比定される平拵Ⅱ式が確認された。次に谷を横切るように東西トレンチを設定し、遺跡の範囲を確認した。確認調



第18図　第 4 地 点 平 面 図



第19図　第 4 地 点 断 面 図



第20図　柱穴遺構配置図

査において遺跡の範囲を限定し平面調査を行なった。その結果、II層上面において柱穴群が確認された。I層下部において土師器が確認されている。柱穴群は、II層に掘り込んでいるところからこの土師器の時期と推定される。II層中からは、ある程度まとまった量の10類土器（指宿式系土器）及び11類土器（西平式・三万田式土器）が出土している。しかしながら、遺構は確認されなかった。III a層においては25B区より6類土器（塞ノ神A式0130）が1片出土している。III b層においては、25C区より5類土器（平拵II式0129）が1片出土した。

②柱穴遺構と焼土塊（第20図）

I層を掘り下げると、II層の黄褐色火山灰層が検出される。このII層に掘り入れて約15cmから30cmの大きさのピット（柱穴）群と一ケ所の焼土塊が検出された。ピットは、深さ5cm程度のものであるが、その痕跡を残すだけのものもみられる。柱穴の径は、約15cm程度の小さいものと約30cm程度のものが不規則に検出され、建物跡の柱配列は確認されなかった。柱穴の検出面と同じくして、焼土塊がみられる。これは、柱穴群と関連するものと考えられるが、詳細は不明であった。尚、時期は、I層下部とII層上面にみられる13類土器の時期に比定される。

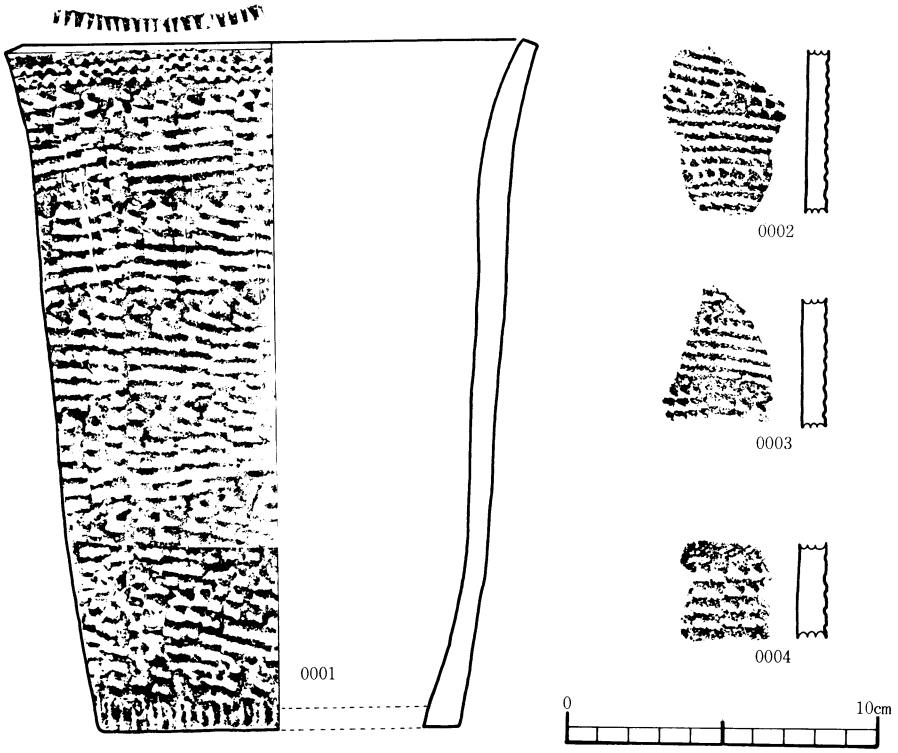
V 出 土 遺 物

(1) 土　　器

出土土器は、便宜的に型式および種類ごとに記載する方法をとり１類から15類に類別した。１類から11類が縄文式土器、12類が成川式土器、13類が土師器、14類が須恵器、15類が近世陶磁器である。以下、これに従って記載していく。

①１類（吉田式土器）(第21図)

１類土器は、完形品１・胴部破片３が出土した。17－Ｄ区（３地点）に完形品（土器番号0001）が出土し、26－Ｂ区（４地点）に破片（0002～0003）３個が出土している。出土層位は、いずれもⅢｂ層と呼ぶ乳白色土（微砂混粘質土）層中である。土器0001は、口縁径17cm底径11.5cmを計り高さが22.4cmの円筒形の土器である。器壁の厚みは、1.0～0.8cmである。器形は、口縁部がわずかに外反し底部近くでわずかに狭まる円筒土器である。口縁端部は、平坦でありそ



第21図　１類土器（吉田式土器）

のうえに3～4mm間隔に正確な沈線が刻まれている。口縁部外側には、横位平行に貝殻腹縁棘突による3条の沈線が施されている。器面胴部は、貝殻腹縁による横位の押し引き手法で施文されている。底部外面は、3～4mm間隔で長さ1cm呈度の沈線が刻まれている。内面は、ヘラ磨き状に整形されている。0002～0004は、いずれも細片である。厚さにおいて若干の差異がみられるが、整形手法・胎土焼成とも近似点がみられ同一個体と考える。

1類土器、器形・整形・施文からみて吉田式土器と考えられるが、当遺跡出土のものには、吉田式土器の特徴とするクサビ形貼布文はみられない。

第2表　1類土器（吉田式土器）一覧表

遺物番号	出土区層位	器種・器部	法　量	形態の特徴	手法・文様の特徴	胎　土	焼成	色　調	備　考
0001	17－DⅢb	円筒土器（完形）	口縁径17cm底部径11.5cm高さ22.4cm器壁厚08~10	口縁部が外反	口縁端部が平担(沈線) 口縁外側貝殻腹縁の棘突線	若干石英粒混	普通	暗褐色	
0002	26－BⅢb	円筒土器胴部			貝殻押し引き文		普通	明褐色暗褐色	同一個体？
0003	26－BⅢb	円筒土器胴部			貝殻押し引き文		普通	暗褐色	
0004	26－BⅢb	円筒土器胴部			貝殻押し引き文		普通	暗褐色	

②2類（前平式土器)(第22図～30図)

桑ノ丸遺跡では、この2類土器が第1地点のⅢb層から顕著に認められ、当遺跡を代表する土器群の一つである。2類土器には、円筒土器と角筒土器の2種類の器形がみられる。

A円筒土器

円筒形を呈し貝殻およびヘラ状の施文具によって口縁端部に連続刺突文を施し、胴部には貝殻条痕文を施す一群の土器である。口縁端部の連続施文には、数種類のバリエーションが認められる。a口縁端部が凹凸をなすもの、b圧痕文を連続施文するもの、c連続刺突文を施すものに区別される。なお、cにおける連続刺突文には、貝殻とヘラ状施文具によるものに区別され、次のように細分される。C－イヘラ状施文具による連続刺突文（単斜）C－ロ貝殻施文具による連続刺突文（単斜）　C－ハヘラ状施文具による羽状連続刺突文（複斜）　C－ニ貝殻施文具による羽状連続刺突文（複斜)。

a口縁端部が凹凸をなすもの（0005、0006）口縁端部が凹凸をなし、口縁端部内面に段をもつのが特徴である。0005は、口縁端部外面に貝殻施文具による連続刺突文が施されている。いずれも口縁部が直口した円筒土器である。内面は、横方向のヘラ状削りでていねいに整形され、外面の条痕は薄い。石英粒の混入がみられる。

b圧痕文を連続施文するもの（0007、0008）　いずれも刺突の手法ではなく、押圧の手法である。0007は施文具は明確ではないが、指圧状の痕跡と考えられる。0008はハイガイ等の貝殻の肋の背の部分を押圧した痕跡を残している。また、その下段には圧痕文と並行して、貝殻縁による連続刺突文が施されている。内面は横ナデの整形がみられ、外面には斜めの強い条痕がみられる。

c 連続刺突文を施すもの　連続刺突文の施文具には、ヘラ状のものと貝殻にもるものとの2種類に区別される。2類土器においては、Cが主体で数量的にも最も多い。

C－イヘラ状施文具による連続刺突（単斜）（0009～0018）　刺突文は、約1.0cm巾で約0.5cm間隔に規則正しく1列に施文されている。ほとんどが左さがりに斜めに刺突されているが、なかには右さがりもみられる（0007)。0014は、巾が約2.0cmありヘラ切りの手法である。器形は口縁部がほとんど直口する。口径は、計測できるものが2点あり、0017が20.5cm、0018が17.3cmを計る。口縁端部は、平坦を呈すのが普通であるが、その巾は、口縁端部にヘラ状連続刺突文が斜に施されるため、器厚の約半分の巾である。なかには、整形上丸味を帯びるもの(0012、0016）や、ヘラ状連続刺突文が、口縁部内壁近くまで施文され断面が三角形を呈するもの（0015）もある。また、ヘラ状連続刺突文が施されたため、その部分が肥厚するもの（0012）もみられる。内面の整形は、口縁端部においては横ナデであり非常にていねいである。それ以下、胴部内面においてはヘラ削りの整形がみられる。外面の整形は、連続刺突文より以下は横位および斜位に貝殻条痕文が施されている。なかには、条痕文の強いもの（0014）もみられる。

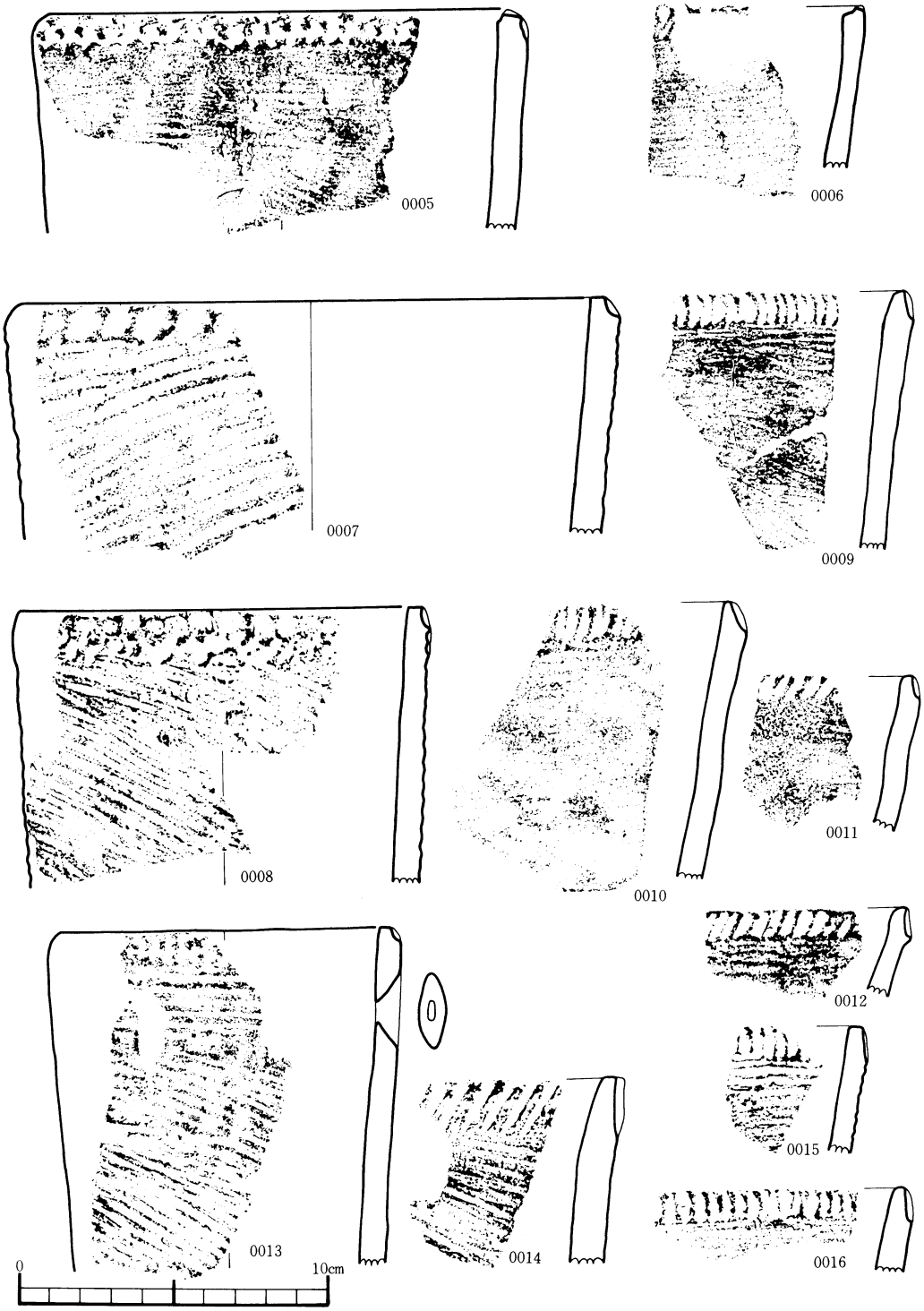
C－ロ貝殻施文具による連続刺突文（単斜）(0013、0019～0052)前記したヘラ状連続刺突文と同じ形で同じ部位に、貝殻の施文具で1列に連続に刺突文が施されているものである。貝殻連続刺突文は、斜位に施されるもの以外に縦位にていねいに施されるものが多い。器形は、口縁部が直口するが、口縁端部が若干内湾するもの（0029、0038）もみられる。口縁部は、平坦なもの（0021、0032）や丸味を帯びるもの（0022、0052）や断面が三角形を呈するもの(0028、0043）がある。口縁端部が平坦をなすものの中に、器形と同じ厚みの平坦を残し連続刺突文は口縁部側面に施されるもの（0045）もみられる。外面の整形は、連続刺突文以下において横位の貝殻条痕文が多い。内面は、口縁端部近くにおいて横ナデ調整をおこないそれ以下胴部中央付近までは横方向にヘラ削り整形がおこなわれ、以下底部までは縦方向のヘラ削りがみられる。0044は、底部を若干欠損しているがほぼ完形な円筒土器である。口径は17.9cm、現存高29.4cmを計り底部付近は13.8cmのまさに円筒形を呈した器形である。口縁端部には、貝施文具による連続刺突文が施されそれ以下底部まで縦・横位の貝殻条痕文がみられる。貝殻条痕文は、非常に強く荒い表現で施されている。底部外面は、欠損していて若干しか残っていないが縦位の沈線は無いようである。内面は、口縁部近くは横方向のていねいなヘラ削りの手法がみられ、それ以下底部までは縦方向の荒いヘラ削り整形である。口縁部分に穿孔のあるもの(0013、0023、0044、0053）がみられる。

C－ハヘラ状施文具による羽状連続刺突文（複斜）(0053～0057)口縁部外側に2段にヘラ連続刺突文が施されるものであり、羽状に規則的に施文されている。上段の連続刺突文は、口縁端部の内面近くまで施され普通平坦面はみられない。器形は、これまでの一段の連続刺突文と同じである。0053は、比較的太い2段のヘラ状連続刺突文が口縁端部外側の器面に施されている。口縁端部は、内傾している。口縁径は、17.9cm、底部近くは、15.8cmの円筒形を呈している。

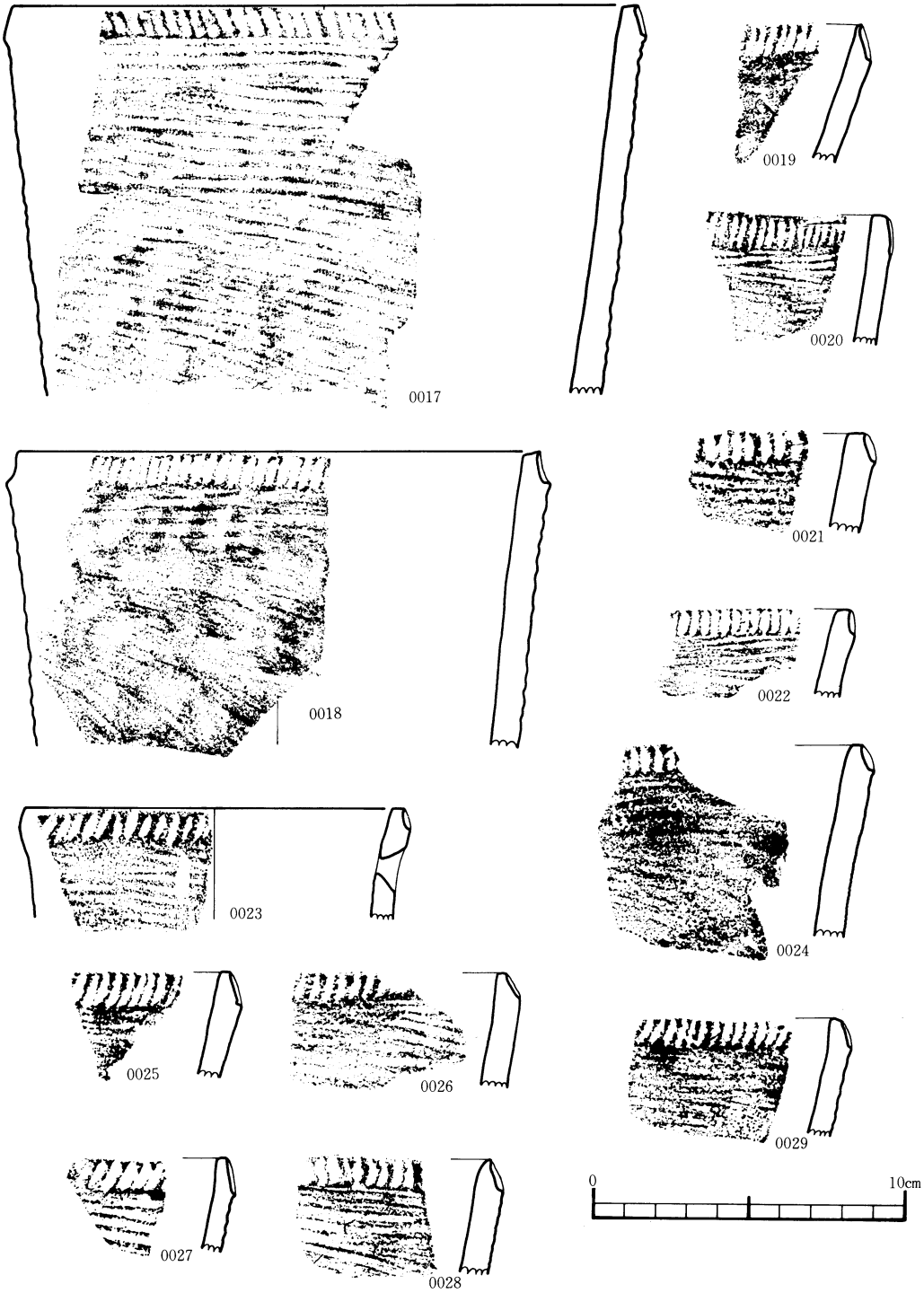
第3表　2類土器（前平式土器・円筒形）一覧表

遺物番号	出土区層位	器種・器部	法量	形態の特徴	手法・文様の特徴	胎土	焼成	色調	備考
0005	4D－IIIb	口縁部	口径 16cm 器厚 0.9cm	口縁直口	口縁端部凹凸、胴部の条痕うすい	石英細粒混	良好	黄褐色	口縁部の凹凸の下に貝による連続刺突文
0006	2E－IIIb	口縁部	器厚 0.5～0.7cm	口縁直口・内側に段をもつ		石英細粒混	良好	黄褐色	口縁端の凹凸の下にヘラによる連続刺突文
0007	3D－IIIb	口縁部	口径 19.7cm 器厚 1.0cm	全体にわずかに外反	指圧文・条痕が強い 口縁部貝殻肋背の押圧条痕が強い	内面:石英大粒混 外面:石英小粒混	普通	暗褐色	
0008	1B－IIIb	口縁部	口径 13.5cm	口縁直口		石英小粒混	良好	赤褐色	貝肋背押圧文の下に貝連続刺突文
0009	3D－IIIa	口縁部	器厚 0.8cm	口縁直口	ヘラによる連続刺突文	石英粒混	良好	黒褐色	
0010	4D－IIIb	口縁部	器厚 0.8cm	全体にわずかに外反		石英粒混	普通	褐色	
0011	4D－IIIb	口縁部	器厚 0.7cm				普通	褐色	
0012	5D－IIIb	口縁部	器厚 0.6cm	連続棘突のところが厚い		石英・雲母混	普通	黒褐色	
0013	2C－IIIb	口縁部・胴部	口径 11.5cm 器厚 0.8cm	口縁直口		石英粒混	普通	口縁：黒褐色 胴部：赤褐色	2.5cm×0.9cmの穿孔がみられる。口縁部近くススが多い
0014	4B－IIIa	口縁部	器厚 1.1cm	棘突より連続ヘラ切口縁部わずかに外反		石英粒混	普通	黒褐色	連続ヘラ切り
0015	4D－IIIb	口縁部	器厚 0.7cm			石英粒混	良好	褐色	
0016	3D－IIIb	口縁部	器厚 0.8cm			石英粒混	良好	黒褐色	
0017	5D－IIIb	口縁部	口径 20.5cm 器厚 0.8cm	口縁直口		石英粒混	良好	黒褐色	
0018	3D－IIIb	口縁部	口径 17.3cm 器厚 1.0cm	口縁直口		石英粒混	良好	黒褐色	
0019	1D－IIIa	口縁部	器厚 0.7cm	口縁直口	貝による連続刺突文	石英・雲母混	普通	赤褐色	
0020	5D－IIIb	口縁部	器厚 0.7cm	口縁直口		石英混	普通	赤褐色	
0021	4D－IIIb	口縁部	器厚 1.0cm	口縁直口		石英混	普通	褐色	
0022	4D－IIIb	口縁部	器厚 0.7cm	口縁直口		石英・雲母混	普通	黒褐色	
0023	4D－IIIb	口縁部	口径 12.5cm 器厚 0.7cm	口縁わずかに外反		石英混	普通	褐色	1.7cm× 0.5cmの穿孔がみられる
0024	3D－IIIb	口縁部	器厚 0.9cm	口縁直口		石英粒多し	普通	黒褐色	部分的に赤褐色
0025	4C－IIIb	口縁部	器厚 0.9cm	口縁直口		石英・雲母	良好	黒褐色	
0026	3D－IIIb	口縁部	器厚 0.8cm	口縁直口		石英混	普通	褐色	
0027	5C－IIIb	口縁部	器厚 0.6cm	口縁わずかに内反		石英混	普通	褐色	
0028	5C－IIIb	口縁部	器厚 0.8cm	口縁直口		石英粒混	普通	黒褐色	
0029	5E－IIIb	口縁部	器厚 0.7cm	口縁わずかに内弯		石英粒混	普通	黒褐色	スス付着がみられる
0030	4C－IIIb	口縁部	器厚 0.7cm	口縁直口		石英粒混	普通	赤褐色	
0031	4D－IIIb	口縁部	器厚 0.6cm	口縁わずかに内弯			普通	黒褐色	
0032	1D－IIIb	口縁部	器厚 1.0cm	口縁直口			普通	赤褐色	
0033	4D－IIIb	口縁部	器厚 0.9cm	口縁直口			普通	黄褐色	
0034	3E－IIIb	口縁部	器厚 0.8cm	口縁直口		石英粒混	普通	赤褐色	
0035	3D－IIIb	口縁部	器厚 0.7cm	口縁直口		石英粒混	良好	黒灰色	
0036	4D－IIIb	口縁部	器厚 0.8cm	口縁直口・端部肥厚		石英粒混	普通	黒褐色	
0037	3C－IIIb	口縁部	器厚 0.8cm	口縁直口		石英粒混	普通	赤褐色	
0038	4B－IIIb	口縁部	器厚 0.7cm	口縁内弯		石英粒混	普通	黒褐色	
0039	4D－IIIb	口縁部	器厚 0.9cm	口縁直口		石英粒混	普通	黄色	

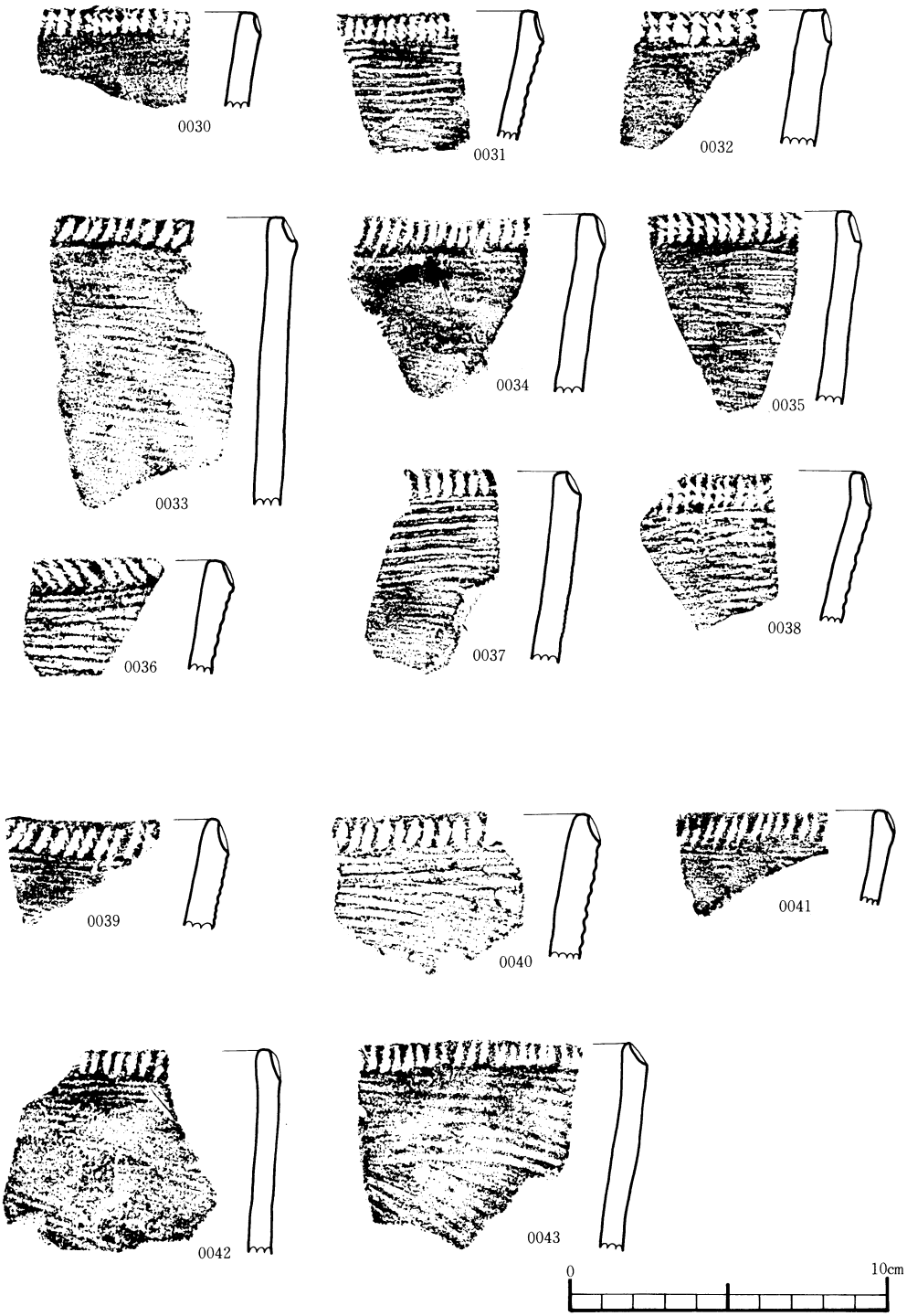
遺物番号	出土区層位	器種・器部	法量	形態の特徴	手法・文様の特徴	胎土	焼成	色調	備考
0040	4B－Ⅲb	口縁部	器厚 1.0cm	口縁直口	貝による連続刺突文	石英粒混	普通	赤褐色	
0041	4B－Ⅲa	口縁部	器厚 0.6cm	口縁直口		石英粒混	普通	暗褐色	
0042	4C－Ⅲb	口縁部	器厚 0.7cm	口縁直口		石英粒混	普通	黄褐色	
0043	3D－Ⅲb	口縁部	器厚 0.7cm	口縁直口		石英粒混	普通	暗褐色	
0044	4C－Ⅲb	口縁部・胴部	口径 19.7cm 現存高 29.4cm	口縁直口			普通		
0045	4C－Ⅲb	口縁部	器厚 0.9cm	口縁直口		石英粒混	普通	黒褐色	
0046	4C－Ⅲb	口縁部	器厚 1.0cm	口縁直口		石英粒混	普通	赤褐色	
0047	4D－Ⅲb	口縁部	器厚 0.8cm	口縁直口		石英粒混	普通	褐色	
0048	3D－Ⅲb	口縁部	器厚 0.7cm	口縁直口		石英粒混	普通	黒褐色	
0049	4D－Ⅲb	口縁部	器厚 0.8cm	口縁直口		石英粒混	普通	黄褐色	
0050	4D－Ⅲb	口縁部	器厚 0.8cm	口縁直口		石英粒混	普通	黄褐色	
0051	4C－Ⅲb	口縁部	器厚 0.9cm	口縁直口		石英粒混	普通	黄褐色	
0052	3D－Ⅲb	口縁部	器厚 0.8cm	口縁直口		石英粒混	普通	黄褐色	
0053	4C－Ⅲb	口縁部・胴部	口径 17.9cm 現存高 26.5cm	口縁直口 口縁施文のところ肥大	ヘラによる羽状棘突	石英粒混	普通	口縁近く黒褐色他は赤褐色	2.9×0.7の穿孔が3孔
0054	3D－Ⅲb	口縁部	器厚 0.7cm	口縁直口		石英粒混	普通	黒褐色	
0055	2E－Ⅲb	口縁部	器厚 0.8cm	口縁直口		石英粒混	良好	黄褐色	
0056	5D－Ⅲb	口縁部	器厚 0.7cm	口縁直口		石英粒混	普通	赤褐色	
0057	3C－Ⅲb	口縁部	器厚 0.8cm	口縁直口		石英粒混	普通	黒褐色	スス付着
0058	5D－Ⅲb	口縁部	器厚 0.8cm	口縁直口	貝による羽状の棘突		普通	黒褐色	スス付着
0059	4D－Ⅲb	口縁部	器厚 0.9cm	口縁直口			普通	赤褐色	
0060	3D－Ⅲb	口縁部	器厚 0.8cm	口縁直口		石英・雲母混	普通	黒褐色	
0061	4D－Ⅲb	口縁部	器厚 0.7cm	口縁直口わずかに肥厚			普通	黒褐色	
0062	3D－Ⅲb	底部	底部径 14.8cm 底部厚 1.8cm		底部端部に縦沈線		普通	黄褐色	
0063	3D－Ⅲb	底部	底部径 8.8cm 底部厚 1.1cm		底部端ヘラ削り	石英粒混	普通	黄褐色	
0064	3C－Ⅲb	底部	底部径 13.5cm		底端部まで条痕		普通	黄褐色	
0065	3D－Ⅲb	底部	底部径 6.9cm		底部端まで条痕	石英粒混	普通	黒褐色	
0066	4D－Ⅲb	底部	底部径 10cm		底部端ヘラ削り	石英粒混	普通	赤褐色	
0067	4C－Ⅲb	底部	底部径 12.3cm		底部端まで条痕		普通	赤褐色	
0068	3C－Ⅲb	底部	底部径 10.8cm		底部端ヘラ削り	石英粒混	普通	黒褐色	
0069	3C－Ⅲb	底部	底部径 12cm		庭部端ヘラ削り		普通	赤褐色	
0070	4D－Ⅲb	底部	底部径 11cm		底部端ヘラ削り		普通	黒褐色	
0071	3D－Ⅲb	底部	底部径 11.8cm		底部端まで条痕		普通	赤褐色	
0072	2D－Ⅰ	底部	底部径 11cm 底部厚 13cm		底部端ヘラ削り	石英・雲母	普通	黄褐色	
0073	3C－Ⅲa	底部	底部径 10.2cm 底部厚 0.9cm		底部端ヘラ削り		普通	赤褐色	
0074	3D－Ⅲb	底部	底部径 10.2cm 底部厚 0.9cm		底部下端まで条痕		普通	黄褐色	



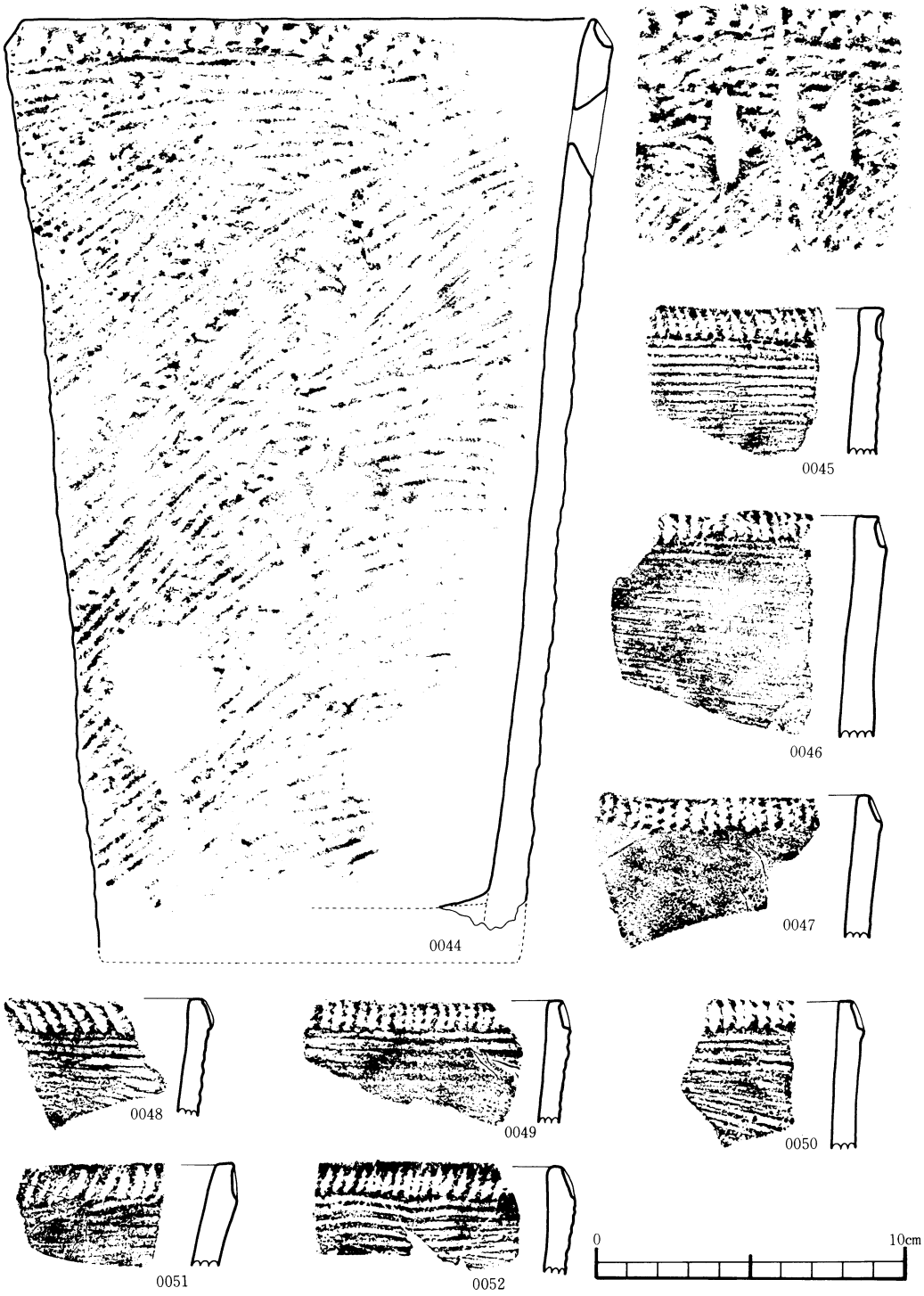
第22図　2類（前平式土器――Ⅰ）



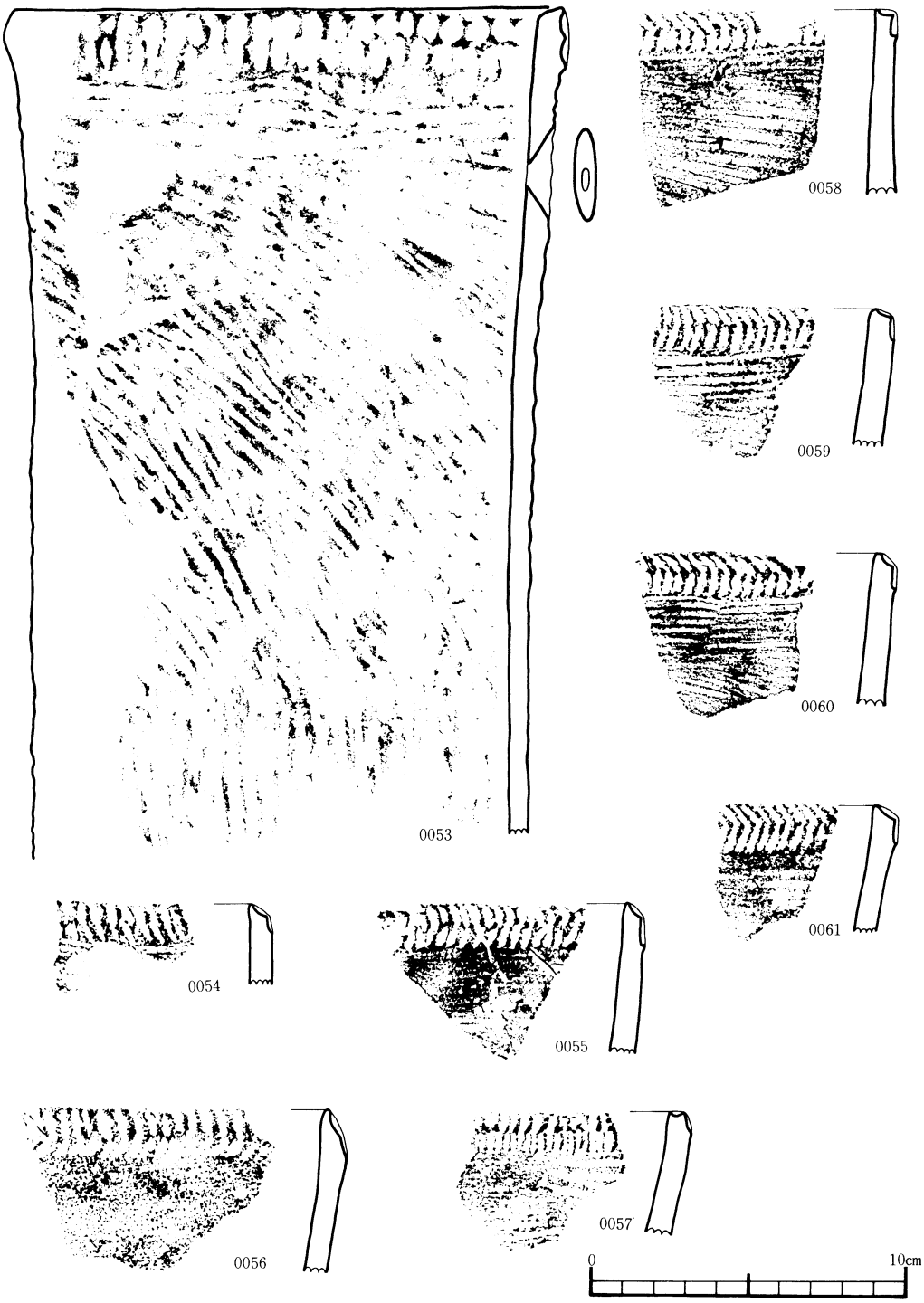
第23図　2類（前平式土器――Ⅱ）



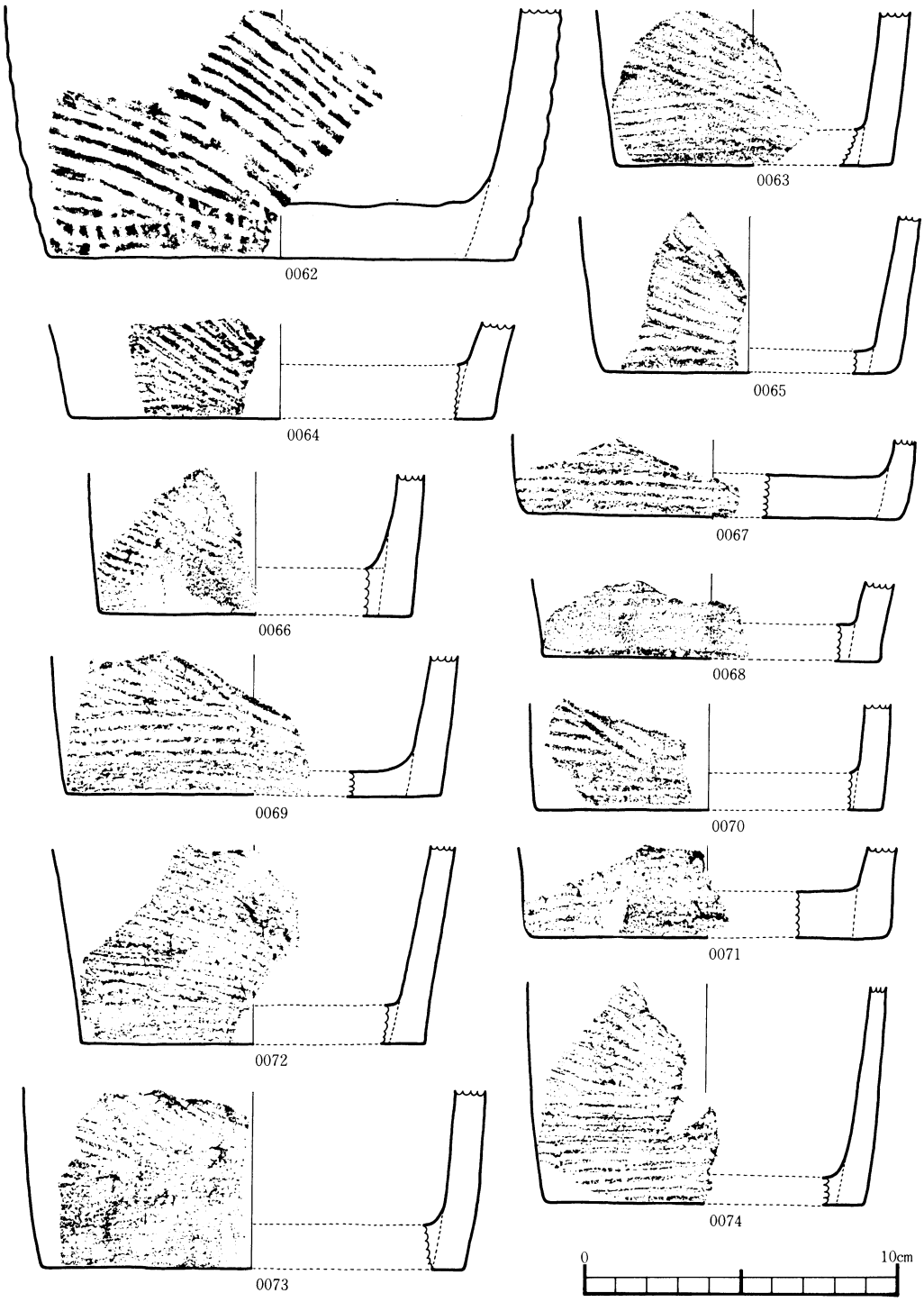
第24図　2類（前平式土器――Ⅲ）



第25図　2類（前平式土器――Ⅳ）



第26図　2類（前平式土器――V）



第27図　2類（前平式土器―― Ⅵ）

器面には、口縁部付近では横方向に、胴部は斜方向に底部付近では縦方向に太い貝殻条痕文が施されている。

D－二貝殻施文具による羽状連続刺突文施文具に貝殻を使用している以外は、C－ハにみられるものとはほとんど同じである。

2類土器の底部

底部径は、6.9cmのものから14.8cmの大きさまでみられるが10cm前後のものが多い。底部は、平底であり正円に近い平面を呈する。底部と胴部の接着は、底部円盤の外側に粘土帯を貼付ける方法をとっている。底部からわずかにふくらみをもって胴部に拡がって円筒形をなすものと底部からふくらみをもたずに直線的に胴部へ移行するものとがみられる。底部外側面の整形は、下端まで貝殻条痕が施されそのうえから縦の沈線が施されるもの（0062）と貝殻条痕が施され下端においては横方向に条痕を施し器形を整形するもの（0065、0067、0074）と下端においてはヘラ削りで器形を整形するもの（0063、0066、0073）などがみられる。底部内面は、ヘラ削りの整形がみられる。

穿孔のある土器（0013、0023、0044、0053）

口縁部近くに、穿孔のあるものがみられる。外面から凸レンズ形の平面形に穿孔がおこなわれ内面に至ると狭い孔で貫通するものである。0013は 2.5cm、0023は 1.4cm、0044と0053が3cmの長さの穿孔である。いずれも貝殻条痕整形後、荒いタッチで穿孔されている。これらの穿孔は、0013と0044をみると二孔が対におこなわれ、穿孔と穿孔の間が縦方向に破れている。穿孔と穿孔の間は、0013が 3.7cm、0044が 3.5cmから4cmを計る。0044には、2対の穿孔が3ケ所におこなわれ、いずれも穿孔間が縦に破れている。

B　角筒土器

当遺跡においては角筒土器が、第1地点と第2地点をあわせて9点出土している。第1地点出土のものは、2類（前平式土器）の円筒土器に伴って出土したものである。底部を除きほぼ全形を知り得るものが3個体（0075、0076、0079）ある。そのほかに口縁部片が2点、胴部片が1点、底部片が1点出土している。また、第2地点においては、胴部片2点がみられる。当遺跡でみられる角筒土器は、器形および施文上の共通性がみられるが、細部の施文においてそれぞれ特徴がみられるので個々について説明する。

0075の土器　底部を除きほぼ全形を知り得るものである。口縁端部において一辺が12cmの方形を呈する角筒土器である。現存高は、18.5cmを計る。方形の角部において陵をもち、辺の中央部が最も低くその差は 2.1cmを計る。口縁端部は、若干内傾する平坦面をもちそのうえには規則正しいキザミが施されている。口縁部外面には、約 1.7cmの文様帯がみられその境に並行する2列の貝殻腹縁刺突線が施されている。文様帯中には、貝殻の肋部2つを施文具とした貝殻連続刺突文が施されている。口縁部文様帯以下胴部にかけては、地文に規則正しい貝殻条痕文がみられる。この条痕文は、円筒土器にみられる荒いタッチの縦横方向の条痕文ではなく約0.2

cm程度間隔に平行する沈線文（凹線文）である。角部においては、巾約1cmのところで規則正しく上方へ施文するものであり条痕自体も文様を意図したものと考えられる。角部には、2個繋ぎの楕円形の連続刺突文が縦位に施されている。胴部の条痕文の上から文様が施文されている。口縁部文様帯の貝殻腹縁刺突線の一部を一辺に利用した鋸歯文が3個連続して施文されている。鋸歯文は、他の2辺も貝殻腹縁刺突線である。三個の鋸歯文の頂点からは下方に2条1組の平行する波状文がみられる。

0076の土器　底部を除きほぼ全形を知り得るものである。口縁端部では一辺が10cmの方形を呈するが、胴部においては径11.7cmの円筒形になるものである。現存高は、22.5cmを計る。方形の角部においては陵をもち中央の低いところとの差は、0.7cmである。口縁端部は、0075と同じく若干内傾する平坦面に規則正しくキザミが施されている。同じく口縁部には文様帯がみられ境には貝殻腹縁刺突線（1条）が施されている。文様帯には、貝殻の肋部1個を施文具とした貝殻連続刺突文が施されている。口縁部文様帯以下胴部にかけては、地文に貝殻条痕文がみられるが、規則正しく水平に施された条痕文はむしろ凹線文ともいうべきものでていねいに施文されたものである。角部と一辺の中央部には、2個繋ぎの楕円形の連続刺突文が縦位に施されている。角部から発する2条の平行凹線文は、中央部に集りて菱形を作っている。

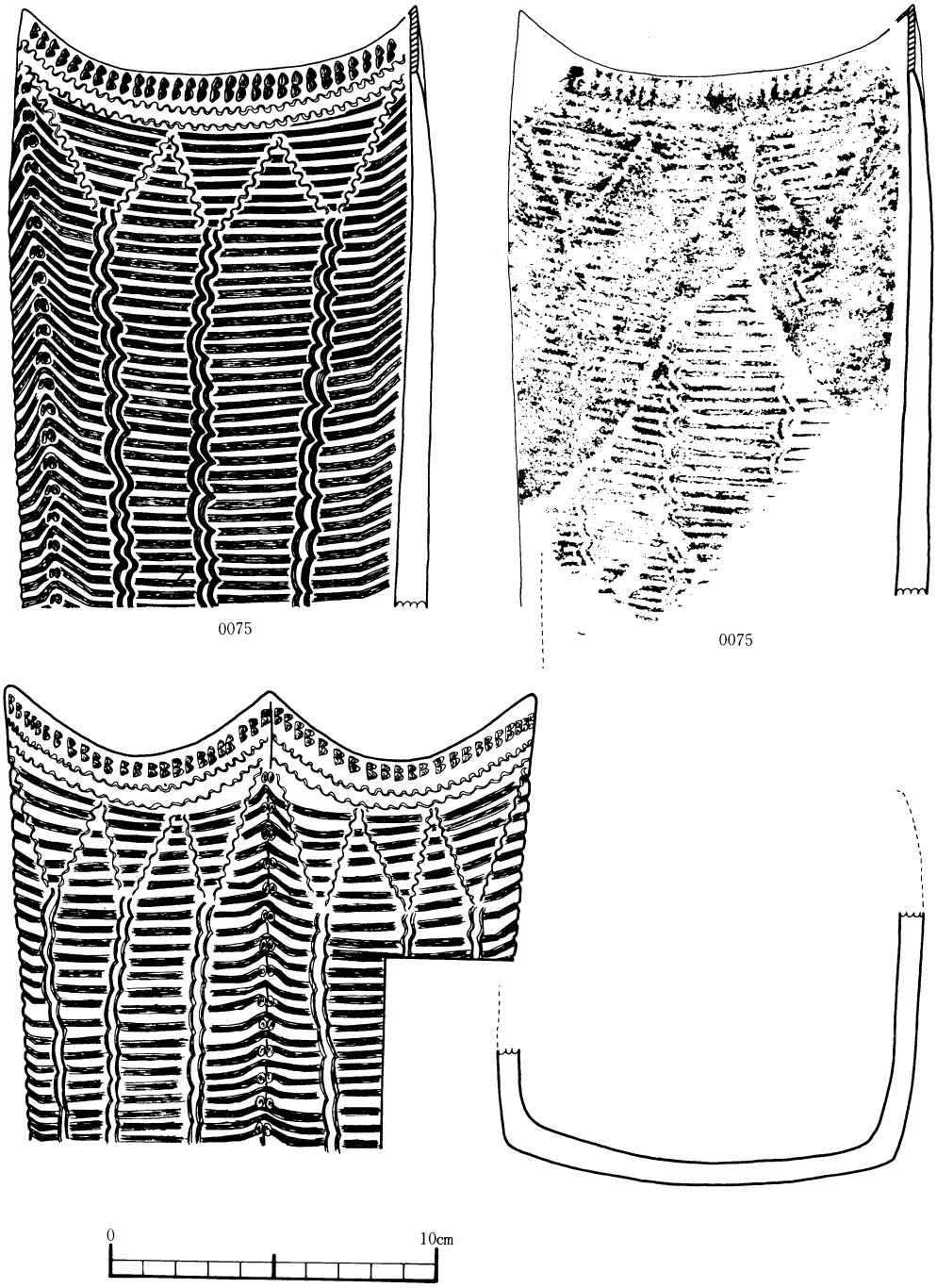
0077の土器　角筒土器の口縁角部の一部である。口縁端部は、若干内傾する平坦面に規則正しいキザミが施されている。口縁部には、一条の貝殻腹縁刺突線によって区切られた文様帯があり貝殻の肋部3個を施文具とする貝殻刺突文が施されている。角部には、連続刺突文が縦位に施されている。地文の貝殻条痕文は、角部においては斜位に施され中央部では水平に施されている。貝殻条痕文のうえから巾 0.5cmのクシ描き沈線が縦位に施されている。

0078の土器　胴部の一部であるが、0077の土器と類似するもので同一個体と考えられる。施文はほとんど同一であるが、縦位に施されるクシ描き沈線が波状を呈するところがみられる。

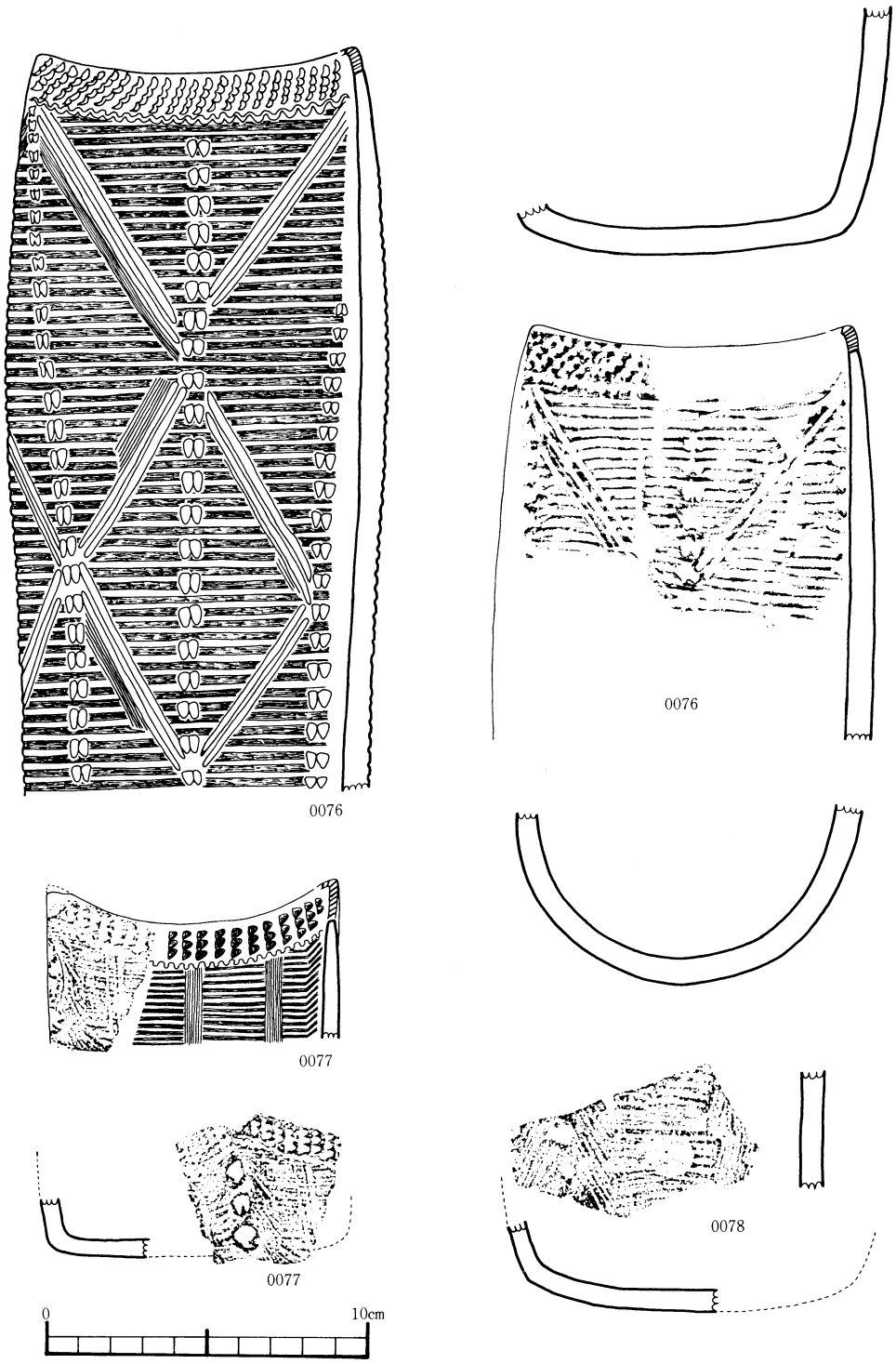
0079の土器　底部を除きほぼ全形を知り得るものである。口縁部において一辺が10.3cmの角筒土器である。現存高は、26.5cmを計る。角部において陵をもち最も低い中央部との差は 1.8

第4表　2類土器（前平式土器・角筒形）一覧表

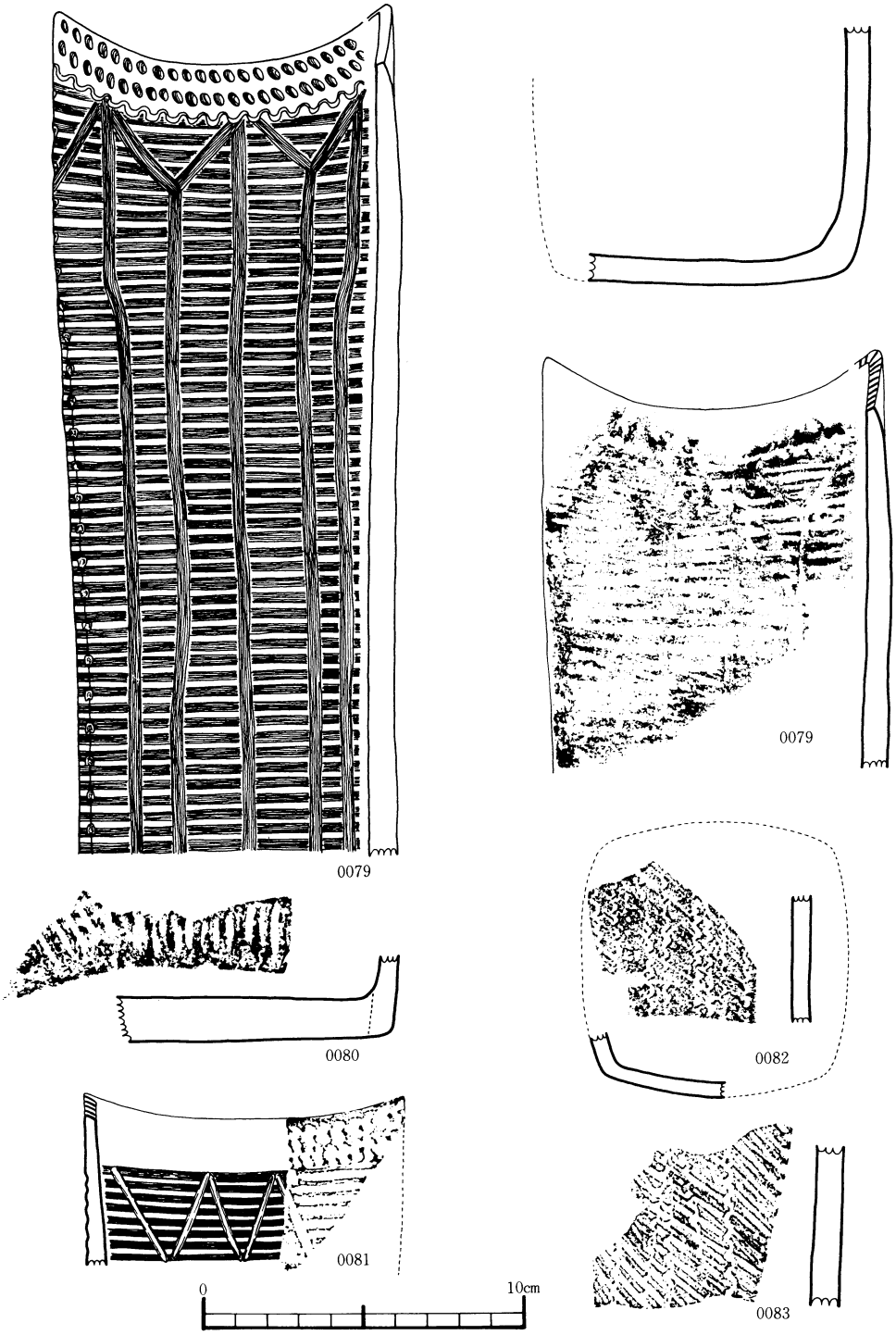
遺物番号	出土区層位	器種・器部	法量	形態の特徴	手法・文様の特徴	胎土	焼成	色調	備考
0075	5D－Ⅲb	口縁部 胴部	口縁部一辺長 12cm 器厚 0.8cm					黒褐色	
0076	3D－Ⅲb	口縁部 胴部	口縁部一辺長 10cm 器厚 0.8cm	上方角筒、下方円筒		石英粒混	普通	黄褐色	
0077	4B－Ⅲb	口縁部	器厚 0.4cm			石英粒混	良好	茶褐色	口縁部一辺長 （推定）9cm
0078	4B－Ⅲb	胴部						黒褐色	
0079	4B－Ⅲb	口縁部 胴部	口縁部一辺長10.3cm 器厚 0.8cm						
0080	5D－Ⅲb	底部	底部厚 1.3cm		底部側面に縦の沈線	石英粒混	良好	褐色	
0081	4B－Ⅲa	口縁部	器厚 0.5cm				良好	赤褐色	
0082	13B－Ⅲa	胴部	器厚 0.5cm	器壁が薄い	地文に斜貝殻条痕 縦並列に貝殻棘突文	石英粒混	良好	黄褐色	
0083	13B－Ⅲb	胴部	器厚 0.9cm		地文に斜貝殻条痕 縦並列に貝殻棘突文	石英粒混	良好	黄褐色	



第28図　2類（前平式土器――Ⅶ）



第29図　2類（前平式土器――Ⅷ）



第30図　2類（前平式土器――Ⅸ）

である。口縁端部は、若干内傾する平坦面をもちその上には規則正しいキザミが施されている。

口縁部には、一条の貝殻腹縁棘突線によって区切られた文様帯があり２列の連続する棘突文が施されている。角部には、縦位に棘突文が施されている。器面には、水平にていねいな凹線文が施されている。凹線文は、貝殻施文具によってていねいに施された条痕の一種と考えられる。口縁部文様帯の下方には、ヘラ状の施文具による鋸歯文が描かれている。鋸歯文の頂点からは、下方に直線のヘラ描と考えられる直線文が施されている。

0080の土器　当遺跡でみられる唯一の角筒土器の底部である。底部粘土版の外側に粘土帯を貼り付ける方法がとられている。底部外面には、縦の沈線がみられる。底部底の厚さは 1.3cm を計りかなり厚い。

0081の土器　角筒土器の口縁角部の一部である。口縁端部は、若干内傾する平坦部に規則正しいキザミが施されている。口縁部には文様帯を形成するが、貝殻腹縁棘突線の区切りはみられない。文様帯には、貝殻の２つの肋を施文具にして２段の棘突文を施す。器面には、地文として貝殻による凹縁文がみられ、そのうえからヘラ状施文具による鋸歯文が描かれている。

0082と0083は、いずれも第２地点出土のものである。胴部のみであるが、これまでの第１地点出土のものとは若干異る整形、施文と考えられる。器面は、非常に硬質であり斜めの条痕がみられる。そのうえから貝殻腹縁を棘突した線文が施されている。

③　３類（0084～0118）（第31図～33図）

第３類に類別した土器は、これまでに設定された土器形式にはみられない土器群である。第１地点の１－Ｄ、２－Ｄ区を中心に出土する一群と、第２地点の10－Ｂ・11－Ｂ区を中心に出土する一群がみられる。第１地点においては、IIIb 層から出土し、第２類（前平式土器）と出土層位を同じくする。若干、上層のIIIa 層からは押型文が出土している。第２地点では、第３類の土器群のみがIIIb 層から出土しているが、その上層のIIIa 層において押型文が出土している。しかしながら第２地点においては、IIIa 層とIIIb 層の区別が難しい層序をなし、押型文もIIIb 層の上部にみられる部分もある。第３類土器の器形は、口縁部が内湾している。口唇部は、平縁を呈し内傾しているのが特徴である。底部の出土は少ないが、平底を呈し胴部に移行するにしたがってかなりふくらみをもつ。第３類としてあげた土器は、器形・施文上いずれも類似点がみられるが、文様の施文において６つのタイプに細分される。

３－ａ類（0084・0085）　第２地点（0084）と第１地点（0085）に口縁部が１点ずつ出土している。器形は、口縁部が内弯する鉢状のものであり口径は24cmを計る。口唇部は、平縁で内傾している。器壁は、均厚であり 1.3cmを計る。文様施文は、口縁部外面に５本組のクシガキ沈線が口縁部に沿って横走している。沈線の巾は、 0.2cmとかなり太いものである。それらが５本１組で２cm程度の文様帯を作っている。この文様帯以下胴部にかけては、縦走する沈線が施されている。縦走する沈線は、５条のクシガキ沈線をもってゆるやかな流水文を描いているが、横走する口縁部をめぐる沈線と同じ施文具と考えられる。内面は、大粒の砂粒（石英）を

含むがヘラ磨き状にていねいな整形で光沢がみられる。

3－b類（0086）　第2地点出土のものであるが、第3類土器中においては特異な器形・文様である。胴部付近で細く、口縁部にいくにつれて広がる擂鉢状の器形を呈している。口縁端部外面は、わずかながら肥厚する。口唇部は、平縁である。口縁部径は19.9cm・器厚は 1.0cmを計る。口縁端部外面の肥厚部分には、3本組のクシ状の施文具で斜方向に沈線が施されている。肥厚部分の連続斜沈線の施された巾は、 2.0cm～ 2.5cm程度あり、器厚は 1.4cmを計る。

3－c類（0087～0092）　すべて第2地点の出土であるが、0088を除くと同一個体とも考えられる。器形は、口縁部が内湾し口唇部は平縁で内傾するもので第3類土器の基本的器形である。4条あるいは5条のクシ状の施文具で、巾1cm程度の長さに沈線を施したものである。沈線の初めと終りがていねいであり、沈線自体強く施文されている。クシ描き沈線が羽状に施文されるところと斜めに施文しながら横方向に連続施文されるところがあり規則性はない。器厚は、 1.2cm～ 1.4cmを計る。胎土に石英を若干含み焼成は良好である。色調は、赤褐色から黒褐色を呈している。内面は、ヘラ磨き状にていねいに整形され光沢を帯びている。

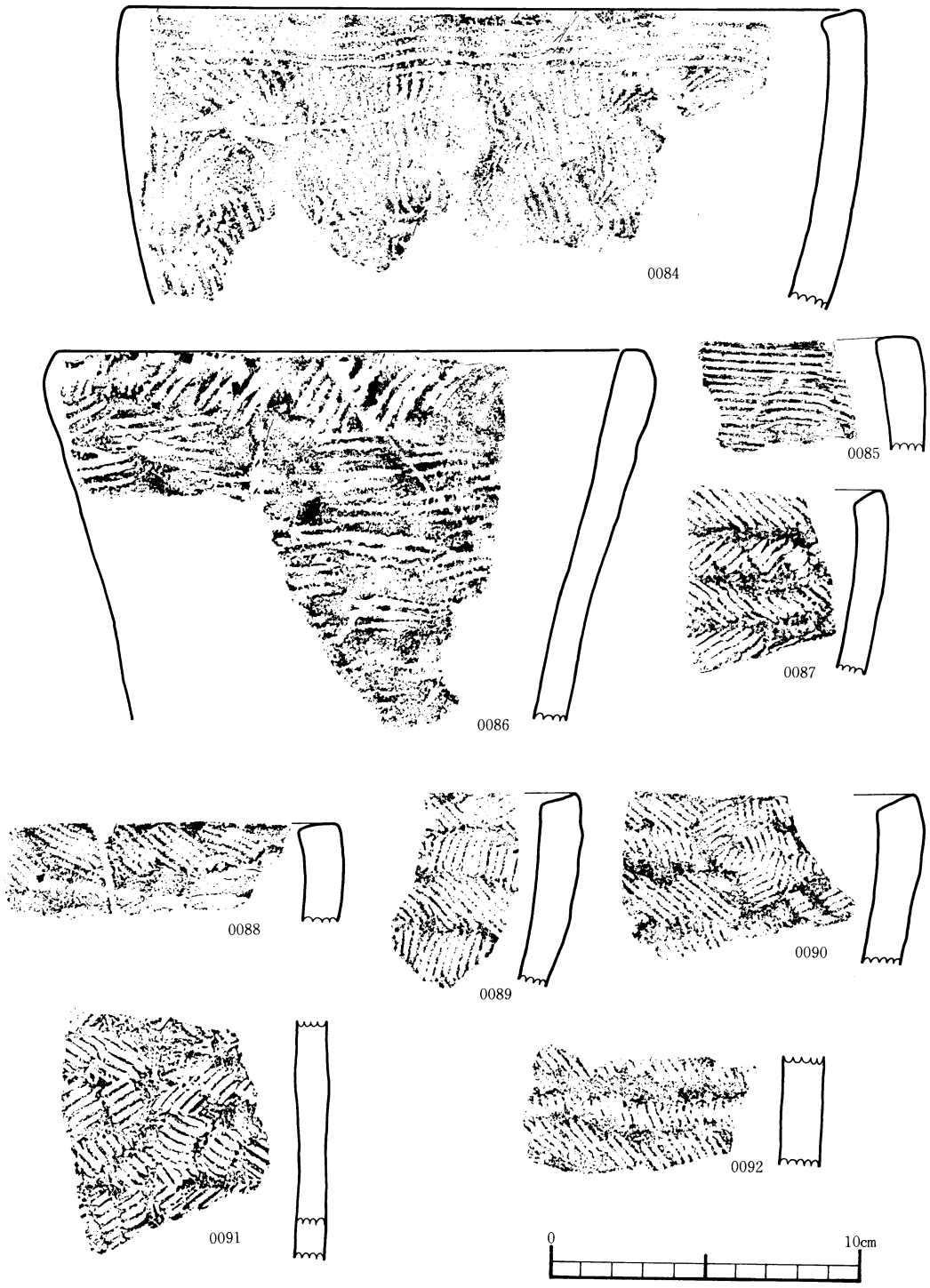
3－d類（0093・0096～0111）　第1、第2両地点から出土している器形は、口縁部が直口し口唇部が内傾するもの（0093・0096・0097）と、口縁部が内湾し口唇部が内傾するもの（0106～0108）の両方がみられる。底部径16.7cmのかなり大形の底部が出土している。底部厚みは、0.8cmで薄い。底部と胴部片からみると、胴部においてかなりふくらむ器形と推定される。外面は凹凸がみられるが、整形はていねいであり、内外面ともヘラ磨きの手法がみられ光沢を帯びている。文様は、クシ状の施文具で器面に無雑作に浅い沈線を施文したものである。0101～0105は、沈線の間隔がそろったクシ状の施文具を使用している。他のものはクシ描き沈線ではあるが不ぞろいである。

3－e類（0094・0095・0013～0015）　第1・第2両地点から出土している。第1地点出土のものに口縁部が直口する（0094・0095）器形がみられる。器面の文様は、クシ描き沈線が羽状に施されているものである。0094と0095は、3条のクシ状施文具で等間隔に強い沈線が羽状に施こされているが、0112～0114は、不ぞろいのクシ状施文具で羽状を施している。3－e類は、クシ描き沈線で羽状文を施文しているのが特徴である。

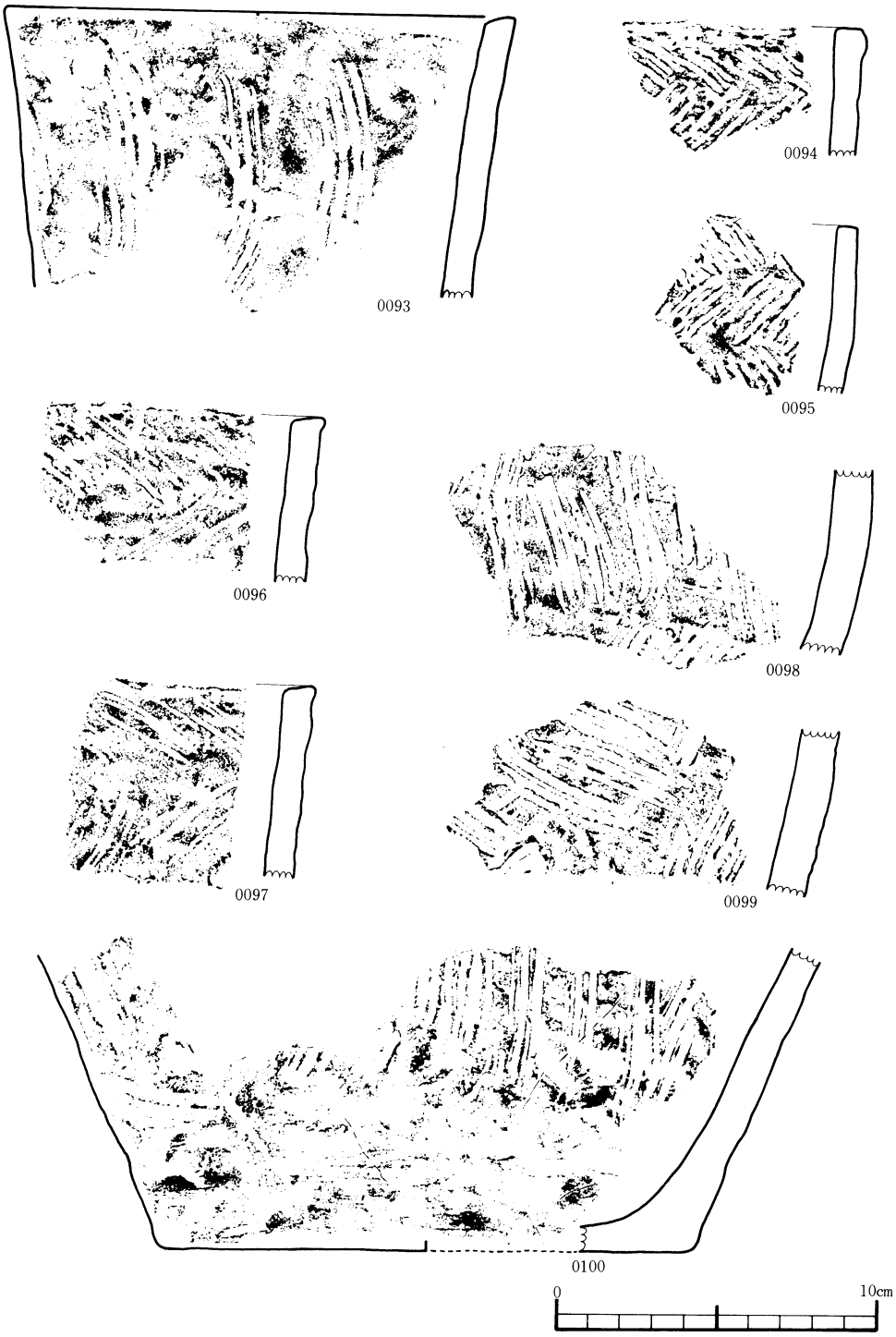
3－f類（0115～0118）　いずれも第2地点の出土である。口縁部2点、底部2点が出土している。口縁径12.2cm（0115）と14cm（0116）と、底部径 6.6cm（0117）と（0118）がある。器形特徴は、口縁部が内弯し、口唇部が丸味を帯びるもの（0115）と、口縁部が内湾し口唇部が内傾するもの（0116）がみられる。底部は平底である。文様はみられないが、0117にヘラ状の施文具で無雑作に施文した跡が残る。口縁部、底部とも手担状の整形であり、器面には凹凸がみられる。

第5表　3類土器一覧表

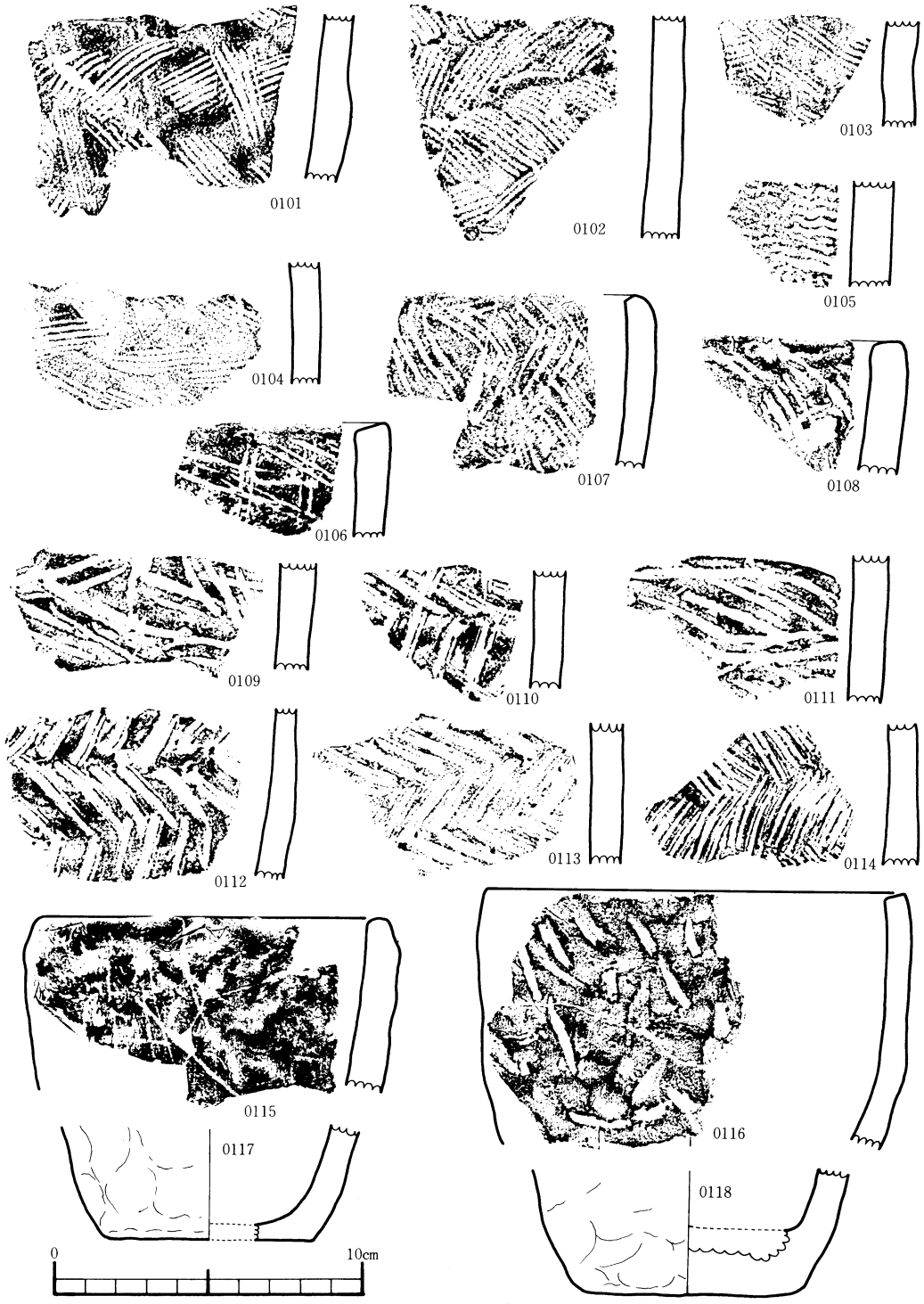
遺物番号	出土区層位	器種・器部	法量	形態の特徴	手法・文様の特徴	胎土	焼成	色調	備考
0084	10B－IIIb	口縁部	口径 24cm 器厚 1.3cm	口縁部内湾	五条沈線	石英粒混	良好	茶褐色	
0085	1E－IIIb	口縁部	器厚 10.2cm			石英粒混	良好	赤褐色	
0086	10B－IIIb	口縁部	口径 19.9cm	口縁部全体に外反	口縁端斜に沈線	石英粒混	良好	黄褐色	
0087	10B－IIIb	口縁部	器厚 1.0cm	口縁部若干内湾	4条の短線を連続施文	石英小粒混	良好	黒褐色	
0088	13B－IIIb	口縁部	器厚 1.2cm	口縁部若干内湾		石英粒混	良好	黄褐色	
0089	10B－IIIb	口縁部	器厚 1.2cm			石英粒混	良好	黒褐色	
0090	10B－IIIb	口縁部	器厚 1.4cm			石英粒混	良好	赤褐色	
0091	10B－IIIb	胴部	器厚 1.2cm			石英粒混	良好	赤褐色	
0092	10B－IIIb	胴部	器厚 1.3cm			石英粒混	良好	明褐色	
0093	2E－IIIb	口縁部	口径 1.6cm 器厚 1.0cm	口縁部直口 口縁端部は内傾する	4条～5条のひっかき状の沈線	石英粒混 長石粒混	良好	茶褐色	
0094	1D－IIIb	口縁部	器厚 0.8cm	口縁部直口 口縁端部は平縁	3本のクシガキ沈線で羽状施文	石英・長石 雲母混入	良好	赤褐色	
0095	1D－IIIb	口縁部	器厚 0.7cm				良好	赤褐色	
0096	1D－IIIa	口縁部	器厚 0.9cm	口縁直口 口縁端部は平縁で内傾する	3本のクシガキ沈線で羽状施文（0095よりはあらい沈線）	石英・長石 細粒混	良好	黄褐色	
0097	2D－IIIb	口縁部	器厚 0.9cm			石英・長石 細粒混	良好	黄褐色	
0098	1E－IIIb	胴部	器厚 1.2cm	器面に凹凸がみられる	数条のクシ状施文具で沈線を施す	石英・長石 細粒混	良好	黄褐色	
0099	1E－IIIb	胴部	器厚 1.2cm			石英・長石 細粒混	良好	黄褐色	
0100	1E－IIIb	底部	底部径 16.7cm 底厚 0.8cm	底部からの立上りは広くなる		石英・長石 細粒混	良好	黄褐色	
0101	10B－IIIb	胴部	器厚 1.1cm	器面に凹凸がある。	数条のそろったクシ描き沈線	石英粒混	良好	赤褐色	
0102	10B－IIIb	胴部	器厚 1.1cm			石英粒混	不良	黄褐色	
0103	10B－IIIb	胴部	器厚 1.0cm			石英粒混	普通	暗褐色	貝施文具によることがわかる
0104	10B－IIIb	胴部	器厚 0.9cm			石英粒混	普通	黄褐色	
0105	10B－IIIb	胴部	器厚 1.3cm			石英粒混	普通	赤褐色	
0106	11B－IIIb	口縁部	器厚 1.1cm		クシ描き沈線	石英粒混	良好	黄褐色	
0107	11B－IIIb	口縁部	器厚 0.9cm	口縁部若干内湾		石英粒混	普通	赤褐色	
0108	11B－II	口縁部	器厚 12cm	口縁内湾		石英粒混	良好	黄褐色	0107に同じ
0109	11B－II	胴部	器厚 1.0cm		不ぞろいのクシ描き沈線	石英粒混	良好	赤褐色	
0110	10B－IIIa	胴部	器厚 10cm			石英粒混	良好	赤褐色	
0111	11B－IIIb	胴部	器厚 1.0cm			石英粒混		黄褐色	
0112	10B－IIIb	胴部	器厚 0.7～0.8cm		不ぞろいのクシ描き沈線の羽状文	石英粒混		赤褐色	
0113	10B－IIIb	胴部	器厚 1.0cm					赤褐色	
0114	10B－IIIb	胴部	器厚 0.9cm			石英粒混	良好	茶褐色	
0115	11B－IIIb	口縁部	口径 12.2cm 器厚 1.1cm	手づくね状の粗精な作りで凹凸がある。	無文に近い状態である。ヘラで雑に施文した跡が残る。	石英粒混	良好	赤褐色	
0116	10B－IIIb	口縁部	口径 14.0cm 器厚 0.8cm			石英粒混	良好	赤褐色	
0117	10B－IIIb	底部	底部径 6.6cm 底部厚 0.5cm			石英・長石 微粒混	良好	黄褐色	
0118	11B－IIIb	底部	底部径 7.5cm 底部厚 2.2cm			石英・長石 微粒混	良好	黄褐色	



第31図　第 3 類 土 器（ Ⅰ ）



第32図　第 3 類 土 器（ Ⅱ ）


0101
0102
0103
0104
0105
0106
0107
0108
0109
0110
0111
0112
0113
0114
0115
0116
0117
0118
0
10cm

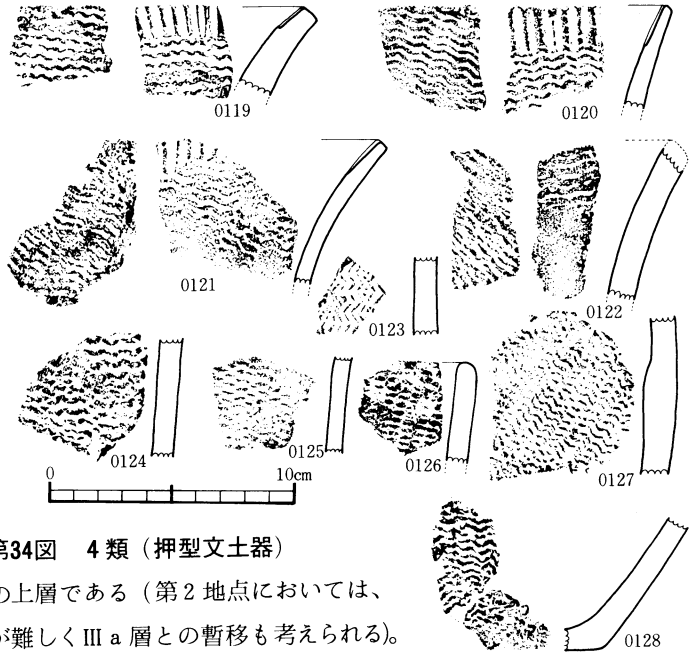
第33図　第 Ⅲ 類 土 器（ Ⅲ ）

④　4類（押型文土器）0119～0128（第34図）

第4類土器は、総数で20片出土している。そのうち2片が楕円押型文であり、他は山形押型文である。第1地点で9片、第2地点で11片の出土であった。出土層位は、第1地点においてはIIIa層と称する青灰色層中であり、第2地点においては、IIIb層と称する乳白色層（微砂混

第6表　4類（押型式土器）一覧表

遺物番号	出土区層位	器種・器部	法量	形態の特徴	手法・文様の特徴	胎土	焼成	色調	備考
0119	10B－IIIb	口縁部	器厚 0.9～1.4cm	口縁部外反 口縁端部平縁	山形	石英粒混	良好	黄色	
0120	3E－II	口縁部	器厚 0.5～0.8cm	口縁部外反 口縁端部平縁	山形	石英粒混	良好	明褐色	
0121	3E－II	口縁部	器厚 0.6cm	口縁部外反 口縁端部平縁	山形	石英粒混	良好	明褐色	
0122	10B－IIIb	口縁部	器厚 1.1cm	口縁部外反 口縁端部破損	山形	石英粒混	良好	黄褐色	
0123	11B－I	胴部	器厚 0.9cm		山形	石英粒混	良好	褐色	
0124	13C－IIIa	胴部	器厚 0.9cm		山形	石英粒混	良好	明褐色	
0125	2C－IIIa	胴部	器厚 0.6cm		山形	石英粒混	良好	明褐色	
0126	4C－IIIa	口縁部	器厚 0.8cm	口縁部直口 口縁端部丸縁	楕円	石英粒混	良好	赤褐色	
0127	1D－IIIa	胴部	器厚 1.1～1.3cm	器厚にふくらみ	山形	石英粒混	良好	明褐色	
0128	11B－IIIb	底部	器厚 0.9cm 底部厚 0.8cm	底部平底	山形	石英粒群混	良好	黄褐色	



第34図　4類（押型文土器）

粘質土）中の上層である（第2地点においては、層位の区別が難しくIIIa層との暫移も考えられる）。実測図は、器形・文様の表現可能なものを10点あげた。山形押型文は、口縁部が若干外反している。いずれも口縁端部（口唇部）は、平縁を呈する。山形押型文の外面の施文は、横走するもの(0119)

と斜走するもの（0120～0122）とが見られる。内面の施文は、原体を擦痕することによって生じるといわれる原体条痕文が口唇部に向って施文されている。その内側には、山形押型文が横走して施文されている。押型文は、いずれも小型の山形施文である。器壁の厚みは、0.6cmの薄いものから1.4cmの厚いものが見られる。なお山形押型文には、底部が1点出土している(0128)。底部は、平底を呈し下端1cmのところまで山形押型文が施文されている。楕円押型文（0126）は、口縁部は直口している。口縁端部（口唇部）は、ヘラ状のもので整形され丸味を帯びている。施文は、外面だけに楕円押型文がみられ内面は無文である。胎土は、山形押型文・楕円押型文いずれも石英微粒が混入している。色調は、明褐色を呈する。

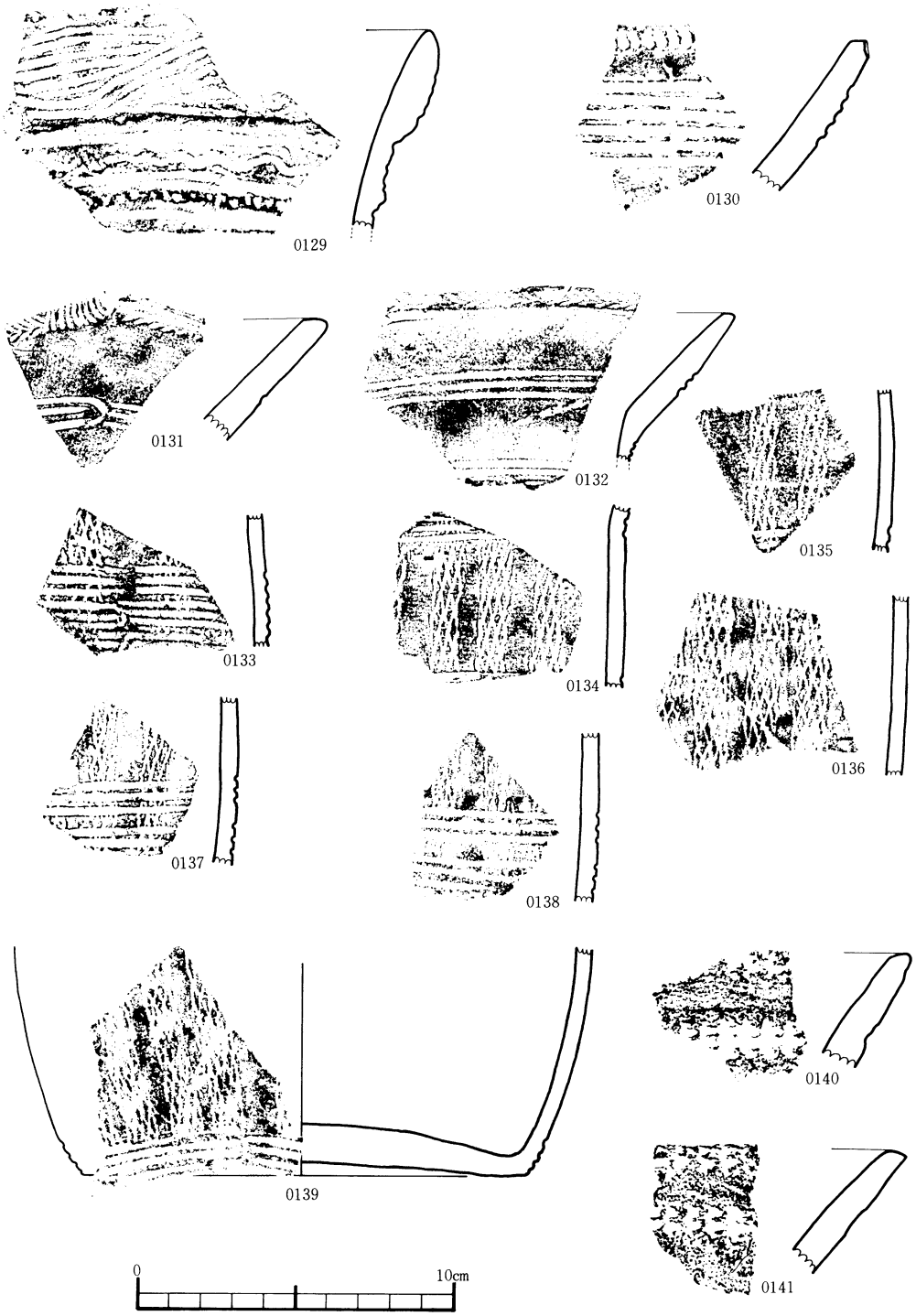
⑤　5類（平栫II式土器0129）（第35図）

頸部から口縁部にかけてのもの1点が出土している。25C区（第4地点）のIIIb層（乳白色土層）中から出土したものである。器形は、頸部から口縁部にかけて外反し口縁部は肥厚して口唇部は丸味を帯びる。頸部には、凸帯がみられる。文様は、頸部凸帯部分にキザミが施されている。頸部凸帯と口縁部肥厚部分の低いところには、凹線文が施されている。2本の並行凹線文の間に1本の波状凹線文が施文されている。口縁部の肥厚部分には、数条の並行凹縁を施文し、そのうえには5条の凹線文を波状に施文し文様効果をあげている。口縁端部（口唇部）の丸味を帯びた部分には連続キザミが施されている。内面は、無文であるが非常にていねいにヘラ磨き状に仕上げてある。胎土は、石英微粒を若干含んでいるが、焼成とも良好である。色調は、黒褐色を呈する。第5類土器は、その形態・文様から平栫II式土器に比定されるものである。

第7表　5類（平栫式）6類（塞ノ神A式）7類（塞ノ神B式）一覧表

遺物番号	出土区層位	器種・器部	法量	形態の特徴	手法・文様の特徴	胎土	焼成	色調	備考
0129	25C－IIIb	口縁部	器厚 0.7cm 肥厚部 1.2cm	口縁部が肥厚し頸部に凸帯が着く	肥厚部分に凹線文が施され、凸帯にはキザミが施文	石英細粒混	良好	黒褐色	平栫II式で塞ノ神A式とは区別される。
0130	25B－IIIa	口縁部	器厚 1.0cm	口縁部は「く」字に外反	中央に6条の凹線 口縁端部連続キザミ	石英粒混	良好	黒褐色	
0131	4E－IIIa	口縁部	器厚 0.9cm	口縁部波状部の陵の高いところ	口縁部外面中央の3条の凹線のつなぎ部分がみられる	石英粒	良好	赤褐色	口縁端部は羽状沈線
0132	4E－IIIa	口縁部	器厚 0.8cm	口縁部「く」字に外反	口縁部外面中央に3条の平行凹線、頸部にも同じ凹線施文	※	良好	赤褐色	口縁端部は羽状沈線
0133	3E－IIIa	胴部	器厚 0.4cm		縄文格子目文	石英細粒混	良好	赤褐色	
0134	4E－IIIa	胴部	器厚 0.6cm	頸部近くの胴部	沈線と沈線の間が4.2cm縄文網目文の巾0.8cm	石英粒混	良好	赤褐色	スス付着
0135	4E－IIIa	胴部	器厚 0.4cm			石英粒混	良好	赤褐色	
0136	3E－II	胴部	器厚 0.5cm			石英粒混	良好	赤褐色	
0137	4E－IIIa	胴部	器厚 0.5cm		縄文網目文の後に凹線が施されている	石英粒混	良好	赤褐色	0133と近く
0138	5E－IIIa	胴部	器厚 0.5cm			石英粒混	良好	赤褐色	0137に近く
0139	5E－IIIa	底部	底部径 14cm 底部厚 1.2cm	底部は上げ底	底部外両端に3条の凹線文	石英粒混	良好	赤褐色	
0140	10B－IIIa	口縁部	器壁厚 0.9cm	口縁部外反	口縁外面に貝殻連続棘突文が平行に施文	石英粒	不良	黄褐色	
0141	10B－IIIa	口縁部	器壁厚 0.9～1.0cm	口縁部外反		石英粒	不良	黒褐色	

※印　石英粒の混入がみられるが器面はきれいである。



第35図　5類（平栫Ⅱ式）、6類（塞ノ神A式）、7類（塞ノ神B式）

⑥　6類（塞ノ神A式土器0130～0139）（第35図）

第6類土器は、第4地点に1点（0130）出土したほかはすべて第1地点出土のものである。第4地点出土のものは、口縁部破片のみであるが、第1地点出土のものは、同一個であり全体の器形を知ることはできるが復元は不可能である。0130は、「く」字に外反する口縁部である。口唇部は、平坦面の外側に斜めにキザミが施されている。口縁部の中央に6条の並行な凹線文が施文されている。口縁部は、若干内湾しているようである。器厚は、1.0cmを計る。胎土に大粒の石英粒を含むが器面の整形は非常に良好である。第1地点出土のもの（0131～0139）は、同一個体であり口縁部・頸部・胴部・底部のそれぞれの器形・文様は知ることができる。口縁部（0131・0132）は、「く」字口縁であり口縁部は波状の陵がある。口縁端部は、平坦面をなしその上にていねいな羽状キザミを施文する。波状の陵がある。

⑦　7類（塞ノ神B式土器0140・0141）（第35図）

頸部から口縁部にかけての破片が、2点出土している。いずれも10B区（第2地点）のIIIa層（青灰色土層）中から出土したものである。器形は、いずれも「く」字形に口縁部が外反するものである。口縁外面には、貝殻縁による2条の連続刺突文が並行に施文されている。胎土は、非常にあらく石英粒を混入し焼成もあまり良くない。第6類土器は、塞ノ神B式に類するものである。

⑧　8類（轟式土器0142・0143）（第36図）

口縁部破片2点が出土している。いずれも4E区（第1地点）のII層（黄褐色パミス層）から出土している。器形は、いずれも口縁部が直口し口縁端部は平縁でありその部分に斜のキザミが連続して施されている。口縁部外面には、地文の条痕の上に粘土帯をはりつけ、それを指頭でつまんだ隆起線文を4条めぐらしている。内面には、斜めのあらい条痕が施されている。胎土は、あらく石英粒を混入している。色調は、暗茶褐色を呈している。第7類は、轟式土器に比定されB式に類するものである。

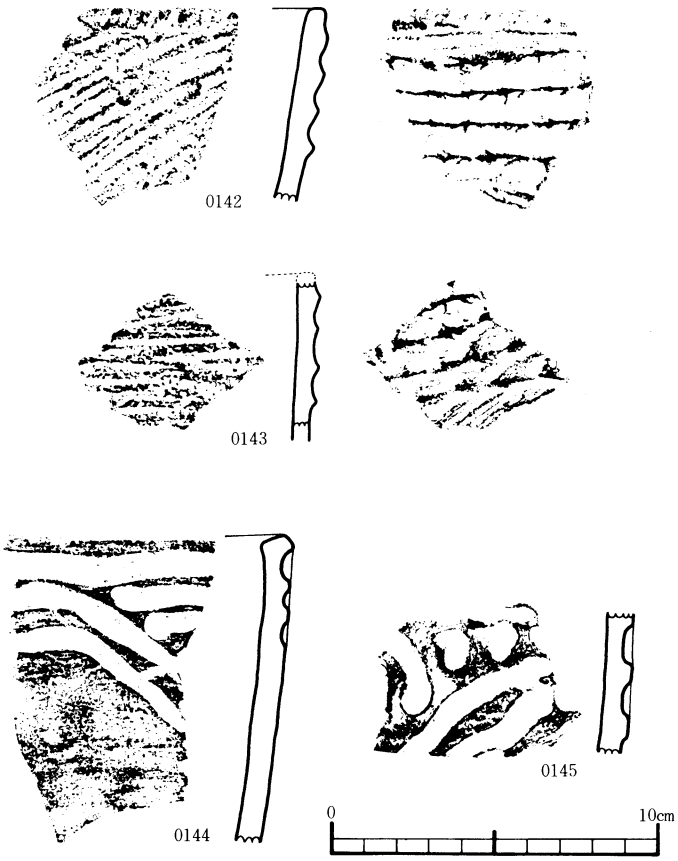
⑨　9類（阿高式土器0144・0145）（第36図）

頸部から口縁部にかけてのものが2点出土している。頸部から口縁部にかけては直口し、その部分に巾1cm程度の凹線文が直線や曲線や連点文などを配して施文されている。器厚みは、

第8表　8類（轟式）　9類（阿高式）一覧表

遺物番号	出土区層位	器種・器部	法量	形態の特徴	手法・文様の特徴	胎土	焼成	色調	備考
0142	4E－II	口縁部	器厚 0.7cm 凸帯部 0.9cm	口縁直口	口縁部4本のみみずばれ、凸帯端部にキザミ			暗茶褐色	
0143	4E－II	口縁部	器厚 0.5cm 凸帯部 0.7cm					暗茶褐色	
0144	4B－II	口縁部	器厚 0.8cm	口縁わずかに内湾	0.8cm間の凹線文竹管状の施文具	石英細粒混	良好	茶褐色	
0145	5B－II	口頸部	器厚 0.8cm			石英細粒混	良好	茶褐色	

0.8cm程度でさほど厚くない。器面は、内外面ともていねいな仕上げであり、若干石英微粒を含んでいる。色調は、茶褐色を呈している。第8類土器は、阿高式土器に比定している。



第36図　8類（轟式土器）・9類（阿高式土器）

⑩　10類（指宿式系土器）（第37図）

10類土器は第II層中（黄褐色火山灰土層）に出土する。出土総数はわずかに4点のみである。0146は口径25.1cmを計る深鉢である。口縁部は直行を呈し、胴部でわずかに丸味を帯び底部へ続く。口唇部は4つの陵を有す。器面は「くし」状の施文具でもって調整を行ない2本の沈線を基本に曲線文様を施す。口唇部の陵に5個の押圧文を施す。内面は「ヘラ」でもって横ナデ調整を行なっている。胎土には雲母、石英を含み、きめの細かい胎土となる。焼成は良好。色調は褐色を呈す。

0147は頸部から口縁にかけて直行する土器片である。口径29.4cmを計る。口唇部はフラットに仕上げ、凹線文を施す。文様は頸部に2本の横位凹線の直線文に囲まれた2本の平行沈線の直線文を基本とする山形の連続文様を施す。器面は、内外面とも横ナデ調整。胎土に雲母、石英を含む。焼成はやや軟質。色調は灰褐色を呈す。

0148は口縁部は直行ないし、わずかに内湾する。4つの陵を有す深鉢である。口径31cmを計る。内外面とも横ナデ調整で雑な仕上がりである。口唇部の陵は、粘土のはり付けの痕跡が認められる。頸部に左側から刺突連続文を3条施文する。胎土に雲母、石英を含む。焼成は良好。色調は赤味を帯びた褐色を呈す。

0149は陵をもつと思われる土器片である。小片の為、口径は定かでない。口縁部近くに、中央に凹みのある突起を有す。口唇部にキザミ目文、内外面とも、2本の沈線による曲線文様を施文する。胎土に雲母、石英を含み、比較的密である。焼成は良好。色調は褐色を呈す。

0150は器台の小片である。底部径 9.8cmを計る。器台の上部構造は破片の為、定かでない。器壁にキザミ目文を施した、はりつけ突帯を有す。又、脚部に4個の突起を施す。器台は中空で上半部に5個（推定）の透しを施している。土器は風化が著しく、剝落を受けている。胎土に雲母、石英を含む。焼成は良好。色調は赤みを帯びた褐色を呈している。

⑪ 11類（西平式・三万田式土器）（第38図）

11類の土器は、第II層中（黄褐色火山灰土層）に出土する。全体的に数量は極めて少ない。

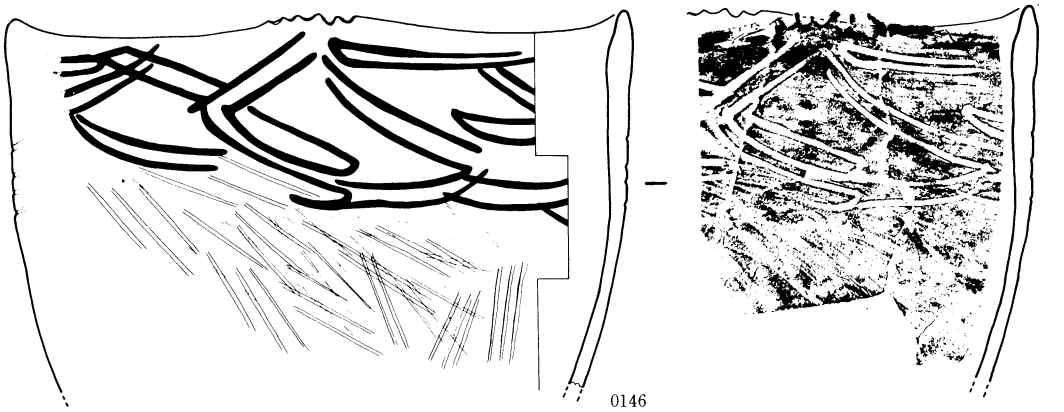
0151は、口径41.2cm、底部径 8.4cm、復元高36.2cmを計る黒色研磨の深鉢である。器形は頸部で「く」の字型に折れ、口縁部は逆に「く」の字型に内湾する。胴部は胴張りを呈し底部へと続く。底部はわずかに上げ底を呈す。器壁は全体的に薄く焼成はきわめて良い。胎土に雲母や石英を混入している。

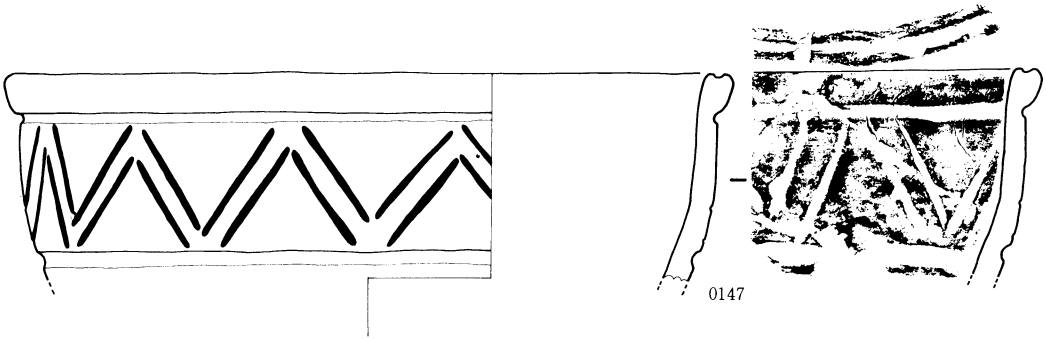
0152は口径24.2cmの黒色研磨の深鉢である。器形は張りをもち底部へと続く。完通していない穴を施す。内外面ともよく研磨されている。胎土には雲母、石英を混入し、焼成はきわめて良い。

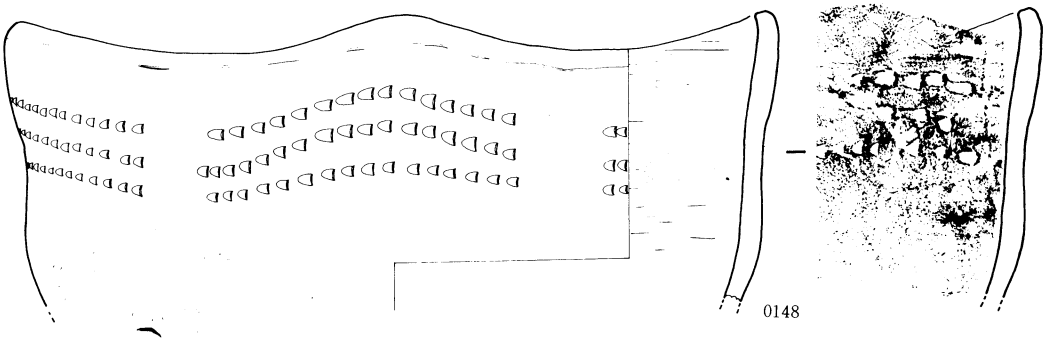
0153は底径 9.2cmを計る底部である。比較的しっかりした脚をもち、立ち上がりに横ナデ調整の為の痕跡を認める。

0154は器形から西平式土器と思わせるが、文様がないことや、黒色研磨がみられることなどから0152、0153と同様三万田式土器系統の土器に想定する。0154は西平式土器の深鉢である。頸部はくびれ外反しながら縁部へと続き、胴部は丸味を帯びる。胴部から頸部にかけて、文様を集中して施している。胴部に縄文をころがし、頸部にそって沈線を廻らし、その上部に連点文を施す。胴部には3本の沈線を基本とし山形文と山形の頂部に刺突文を施し、それを一単位とし計4ケ所に施文している。内面の調整は雑な仕上がり。胎土に雲母、石英粒を混入。焼成は良好。頸部にスス付着。色調は褐色を呈す。西平式土器である。

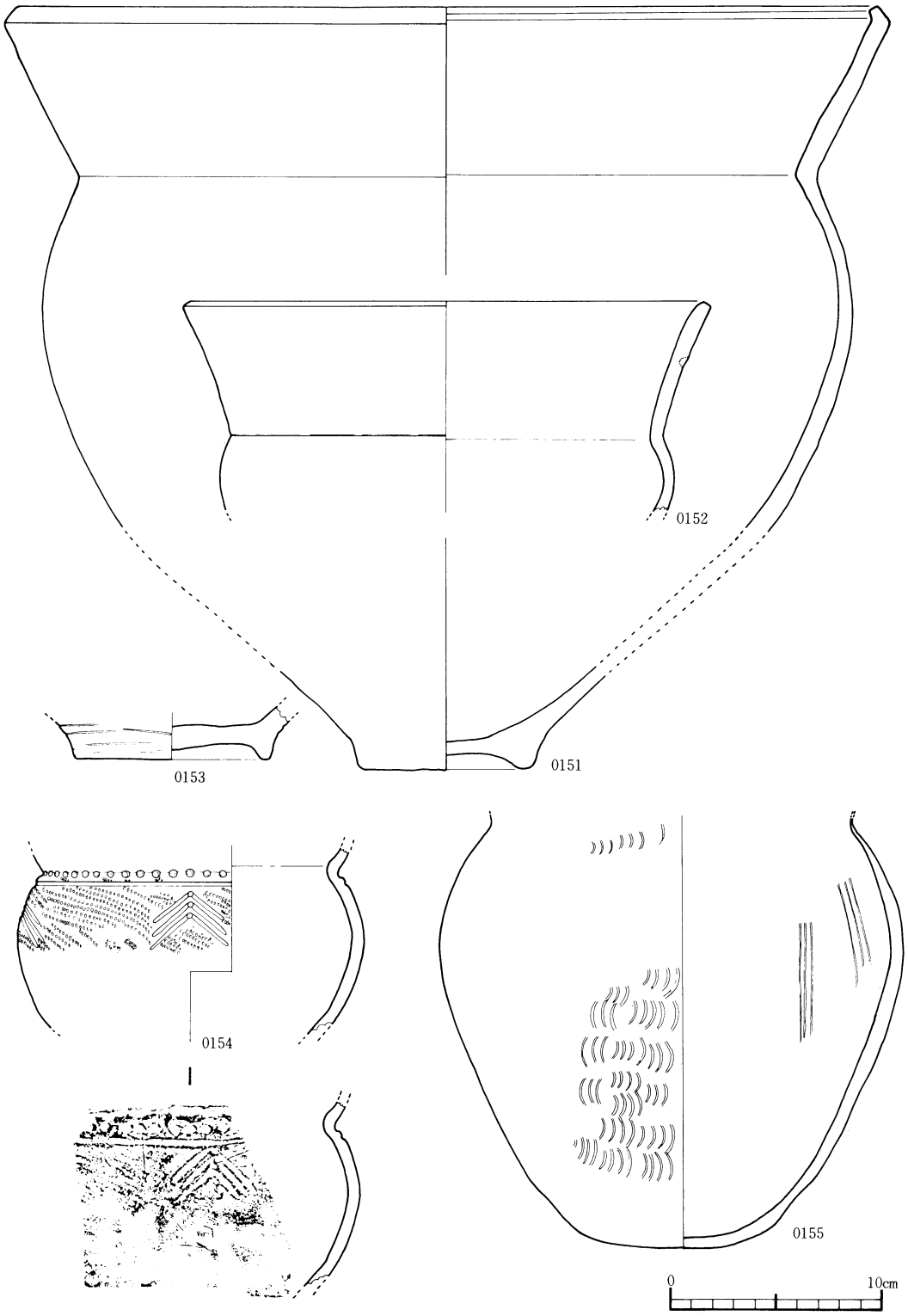
0155は復元口径17cm、器高28cmを計る深鉢である。口縁部はきわめて薄くわずかに外反を呈す。頸部はしまり、胴部は厚く丸味を帯び、直線的に底部へ続く。底部は丸味を帯びた平底状を呈す。器面全体に貝殻腹縁による「ヒッカキ」文を施す。頸部にも部分的に同様な痕跡が認められる。



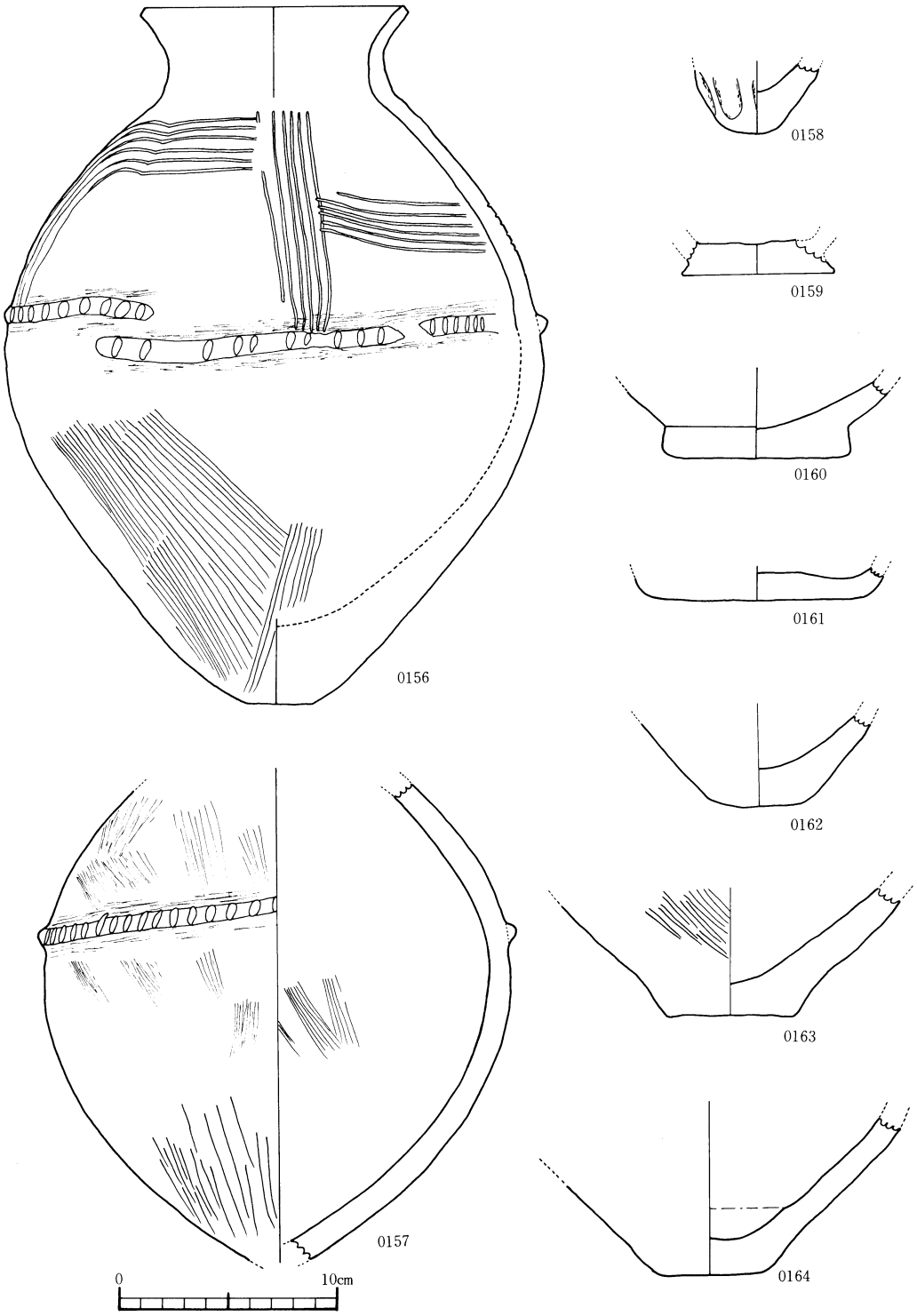




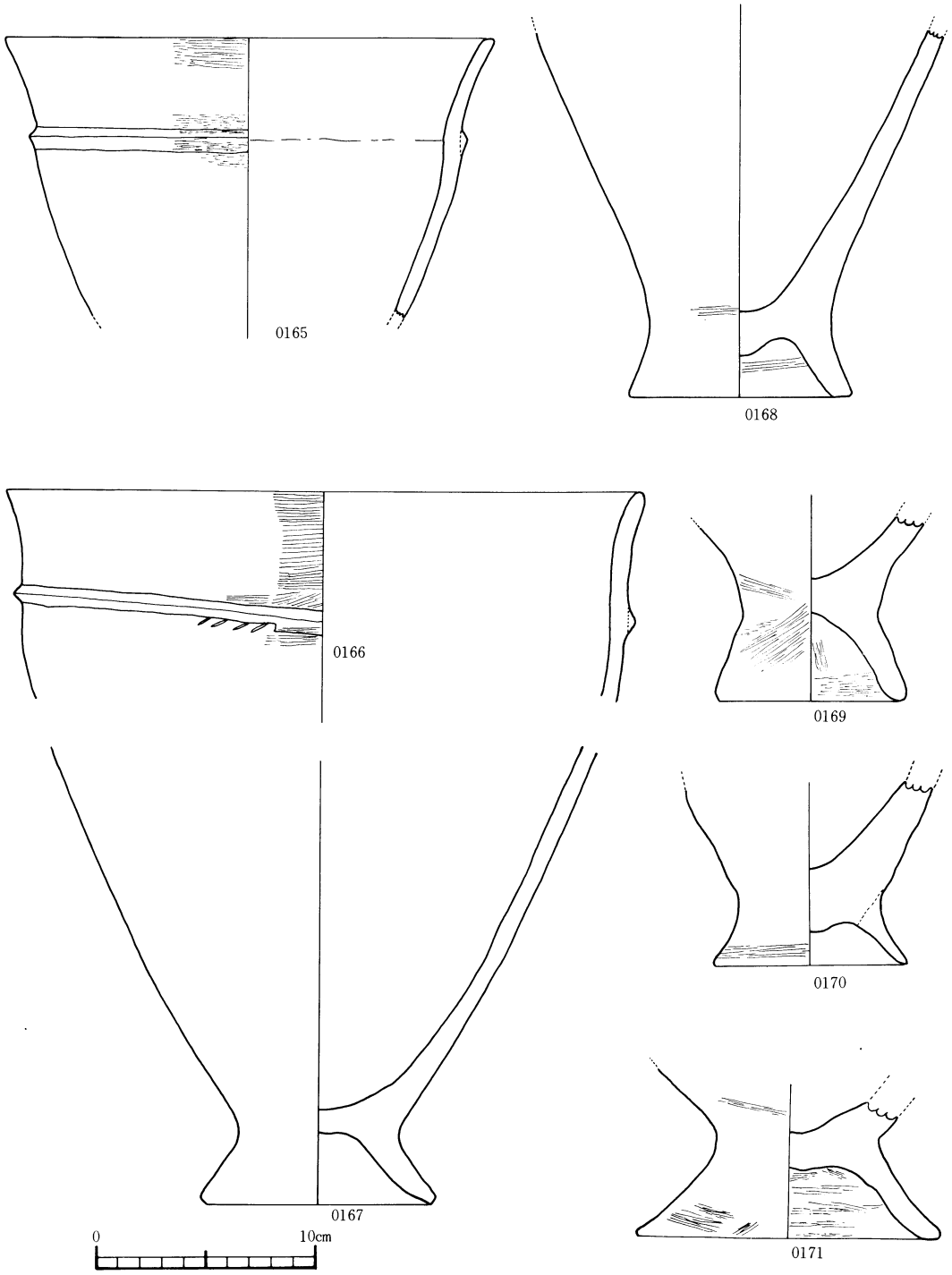
第37図　第10類（指宿式系土器）



第38図　11類（西平式、三万田式土器）



第39図　12類（成川式土器―― Ⅰ）



第40図　12類（成川式土器――Ⅱ）

第９表　10類（指宿式土器）11類（西平・三万田系式土器）一覧表

遺物番号	出土区層位	器種・器部	法量	形態の特徴	手法・文様の特徴	胎土	焼成	色調	備考
0146	25－B	深鉢口縁部	口径 25.1cm	口縁部は直行、若干胴張り、口縁部は４つの陵を有す。	２本を基本にする沈線文陵に押圧文、貝殻調整	雲母・石英	良好	褐色	
0147	25－B	深鉢口縁部	口径 29.4cm	頸部は丸味を帯び、口縁は直行	沈線文	雲母・石英	やや軟弱	灰褐色	
0148	25－B	深鉢口縁部	口径 31cm	胴部は丸味、頸部はしまり、口縁は内湾、口縁部に４つの陵有す。	陵を有す、押圧文	雲母・石英	良好	褐色	
0149	25－C	深鉢口縁部	不明	口縁部は直行し、口唇部は丸味を帯びる。	突起、キザミ目文、沈線	雲母・石英	良好	褐色	
0150	26－C	器台	底径 9.8cm	脚は若干外開き	突帯文、キザミ目文突起穿孔	雲母・石英	良好	赤褐色	風化が著しい
0151	25－B・C	深鉢完形	口径 41.2cm	頸部は「く」の字、口縁部は直行、内側に「く」の字型、胴張り、上げ底	黒色研磨土器	雲母・石英	良好	黒色	復元高 36.2cm
0152	26－C	深鉢口縁部	口径 24.2cm	頸部は「く」の字型、胴張り	黒色研磨土器	雲母・石英	良好	黒色	
0153	25－B	深鉢底部	口径 9.2cm	上げ底	精製土器	雲母・石英	良好	褐色	
0154	26－C	深鉢胴部	頸部径 9cm	頸部は「く」の字型、胴丸	磨消縄文、沈線文、連点文	雲母・石英	良好	褐色	
0155	11－F	深鉢胴底部	復元口径 17cm	頸部は「く」の字、胴丸を呈し丸底に近い底部		雲母・石英	良好	褐色	

第10表　12類（成川式土器）一覧表

遺物番号	出土区層位	器種・器部	法量	形態の特徴	手法・文様の特徴	胎土	焼成	色調	備考
0156		壺・完形	器高 32cm 口縁径 12cm 底部径 3.4cm	胴部がはり、口縁は外反する。	ヘラ描き沈線文、胴部はりつけ突帯を施す	雲母・石英	良好	褐色	
0157	２E－I層	壺・完部	胴部径 20cm	球形状の胴張りをし、底部は尖底に近い	※	雲母・石英	良好	褐色	
0158	表層	壺・胴部		手づくね様	指による押圧調整	雲母・石英	良好	白みがかった褐色	
0159	25C－I層	壺・底部	底部径 7.0cm	円盤状の底部から「く」の字状に広がる。		石英	良好	褐色	
0160	11・B－I層	壺・底部	底部径 9.2cm	円盤状の底部	ハケ調整	雲母・石英	良好	褐色	スス付着
0161	表層	壺・底部	底部径 10.2cm	円盤状の底部		石英・角セン石	良好	褐色	
0162	１D－I層	壺・底部	底部径 4.0cm	丸底に近い平底		雲母・石英・角セン石	良好	褐色	
0163	１C－I層下部	壺・底部	底部径 5.8cm		ヘラなで		良好	褐色	
0164	23・E－表層	壺・底部	底部径 4.8cm				良好	褐色	
0165	０D－I層下部	甕・口縁部	口縁部径22.0cm	口縁部外反する。	三角形はりつけ突帯ハケ横ナデ	石英・角セン石	良好	褐色	
0166	１D－I層	甕・口縁部	口縁部径28.3cm 器高約 32.4cm 底部径 10.7cm	胴部がわずかに張り、口縁部は外反する。	三角形はりつけ突帯ハケ調整	雲母・石英・角セン石	良好	褐色	
0167	１D－I層	甕・胴部・底部		底部はあげ底の脚台を有す。		雲母・石英・角セン石	良好	褐色	0168と同一体と思われる。
0168	１C－I層下部	甕・底部・胴部	底部径 10.0cm	あげ底の脚台		雲母・石英	良好	赤みをおびた褐色	
0169	表層	甕・底部	底部径 8.4cm	あげ底の脚台	内・外面ハケなで	雲母・石英	良好	褐色	
0170	１D－I層	甕・底部	底部径 8.7cm	あげ底の脚台、脚部はりつけ	ハケの横なで		良好	褐色	
0171	23・E－I層	甕・底部	底部径 13.8cm	あげ底の脚台	内・外面ハケなで	雲母・石英・角セン石	良好	褐色	
0172	１D－I層	坩・底部	底部径 4.0cm		外面丹塗り	雲母・石英	良好	外面……赤 内面……褐色	
0173	表層	高坏・坏部			外面丹塗り	雲母・石英	良好	外面……丹 内面……褐色	
0174	23・E－I層	壺・胴部	突帯幅 1.8cm		はりつけ突帯にヘラによる山形文様と小さい竹管文を施す	雲母・石英	良好	褐色	
0175	１D－I層	壺・胴部	突帯幅 1.8cm		はりつけ突帯に布目の見られる格子状の刻目を施す	雲母・角セン石	良好	褐色	一部スス付着
0176	２E－I層	壺・胴部	突帯幅 0.8cm	球形状の胴張をする。	はりつけ突帯に布目の見られる刻目を施す	雲母・石英	良好	褐色	0158と同一

※印　胴部に一条のはりつけ突帯をめぐらす。突帯は布目の見られる刻目を施す。

⑫　12類（成川式土器）(第39図～40図)

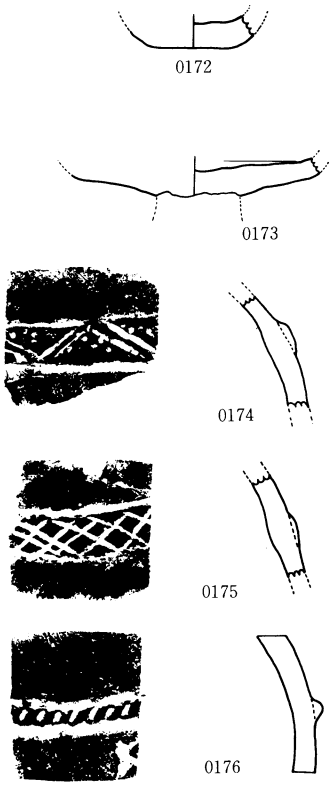
桑ノ丸遺跡の12類の土器は舌状台地の南側先端部に集中して出土しており、包含層はⅠ層下部と思われる。しかし包含層が浅いため後世の攪乱を受けやすいせいもあったのか遺物のほとんどが小片で散在している出土状態であり、壺で完形土器が1個体、完形に近い土器片が1個体、甕で完形に近い土器が1個体出土しているぐらいである。土器の形態は壺型土器、甕形土器、丹塗り土器で高坏、坩が見られる。

壺形土器は底部の形により3つに分類される。第1は尖底に近い底部で、胴部は球形状に張り口縁部は外反するもので0156、0158の土器に見られる。0157の土器は胴部最大径の部分に一条のはりつけ突帯をめぐらす。突帯には布目圧痕の見られる刻目を施す。外面は斜位のハケによる撫で調整である。第2は平底で円盤状の底から「く」の字状に広がってゆくもの、あるいは円盤状の底からそのまま広がってゆくもので0159、0160、0161の土器に見られる。第3は丸底に近い平底で底の厚手のもので0162、0163、0164の土器に見られる。又壺型土器の類にはいると思われる土器の底部で指による押圧調整が施された手づくね様の土器(0158) も見られる。

甕型土器は底部が上げ底になっている脚台を有するものがほとんどである。0166、0167の土器は同一個体と思われるがこの土器は上げ底の脚台で胴部がわずかにはり口縁はゆるやかに外反し、頸部には三角形のはりつけ突帯を一条めぐらせる。0165の土器は胴部がわずかに張り口縁は外反する。頸部には三角形のはりつけ突帯を一条めぐらせる。0168、0170の土器はあげ底の脚台であるが中心部に突起が見られる。又0176の土器は底を尖底にした甕に円筒状の脚台をはりつけたあとが見られそのはりつけ部分には亀裂が生じている。

丹塗り土器は絶対量が少なく器形の判明するものはわずかである。0172の土器は小型の坩の底部であり外面は全面丹塗りである。0173の土器は高坏の坏部であり外面は全面丹塗りである。これら丹塗り土器は胎土が精選された粒子の細かい上質の粘土に極めて小さい雲母・石英が混入しており、他の土器とは胎土を異にしている。

12類の土器には壺形土器、甕型土器共に



第41図　第12類（成川式土器－Ⅲ）拓影

突帯が見られる。壺型土器にみられる突帯は幅とはりつけの方法により2種に分けられる。第1種は幅が約2cmの突帯をはりつけるものであり、突帯にはそれぞれ文様が施される。0174の土器の突帯にはヘラにより二条の山形沈線と径2mmのごく小さい竹管文が施される。又0174に類似しているが竹管文が見られず二条の山形沈線だけのものもある。0175の土器においては布目の見られる細かい刻目を格子状に施す。第2種は幅が約0.8cm、厚さ0.5cmの粘土紐をはりつけるものであり、突帯には布目の見られる刻目を施す。又突帯はつながらずに上下にすれ違うようである。0157、0156等の土器に見られるものである。

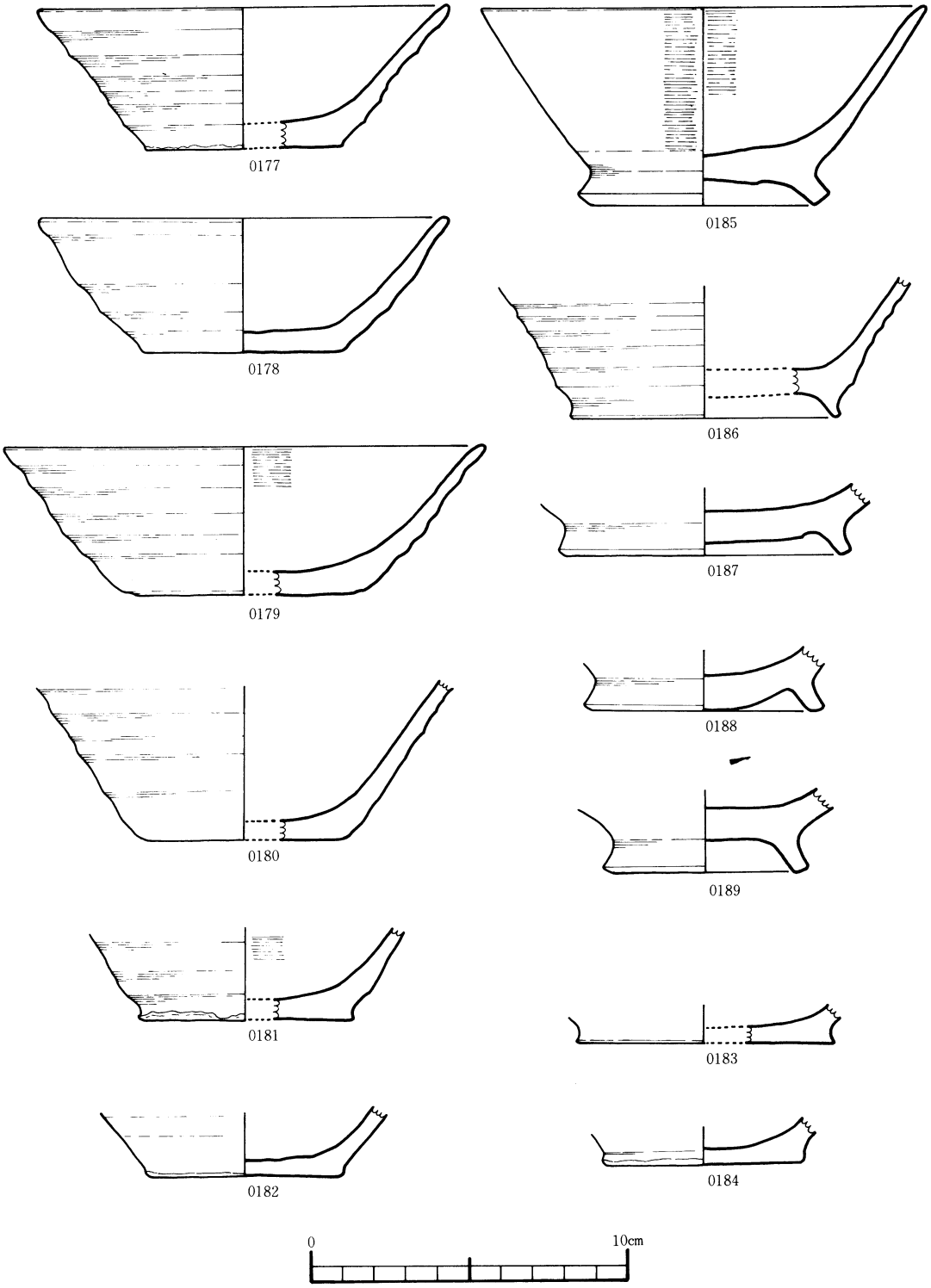
甕型土器においては幅1cm前後の断面三角形のはりつけ突帯を頸部にめぐらせるものであり0165、0166等に顕著に見られ、他の甕型土器の小破片にもよく見られるものである。

⑬ 13類土器（土師器0177～0189）（第42図）

土師器は、坏形土器が出土している。坏は、2種類で平底の底部と高台の付く底部がみられる。他の器形の土師器は、出土していない。実測可能なもの13点を図示したが、他に細片が若干みられる。第1地点で3点、第2地点で3点、第4地点で7点出土している。いずれも、上層中より出土したものである。平底の底部は、糸切り底が1点（0183）あり、他はすべてヘラ起しである。器面は、いずれもロクロ引きによる凹凸が顕著にみられる。器内には、ハケによる刷毛目がていねいに施されている。0177には、墨書の痕跡がみられるが字体は不明である。

⑭ 14類土器（須恵器0191～0192）（第43図）

須恵器は、第2地点（13B区）と第4地点（26B区）においてそれぞれ1点ずつ出土している。いずれも胴部片であり1層から出土している。0191の器面は直であり、0192の器面は、若干胴張りを呈する。いずれも外面は、タタキの整形がみられるが0191は、タタキ整形後再度調整がおこなわれている。

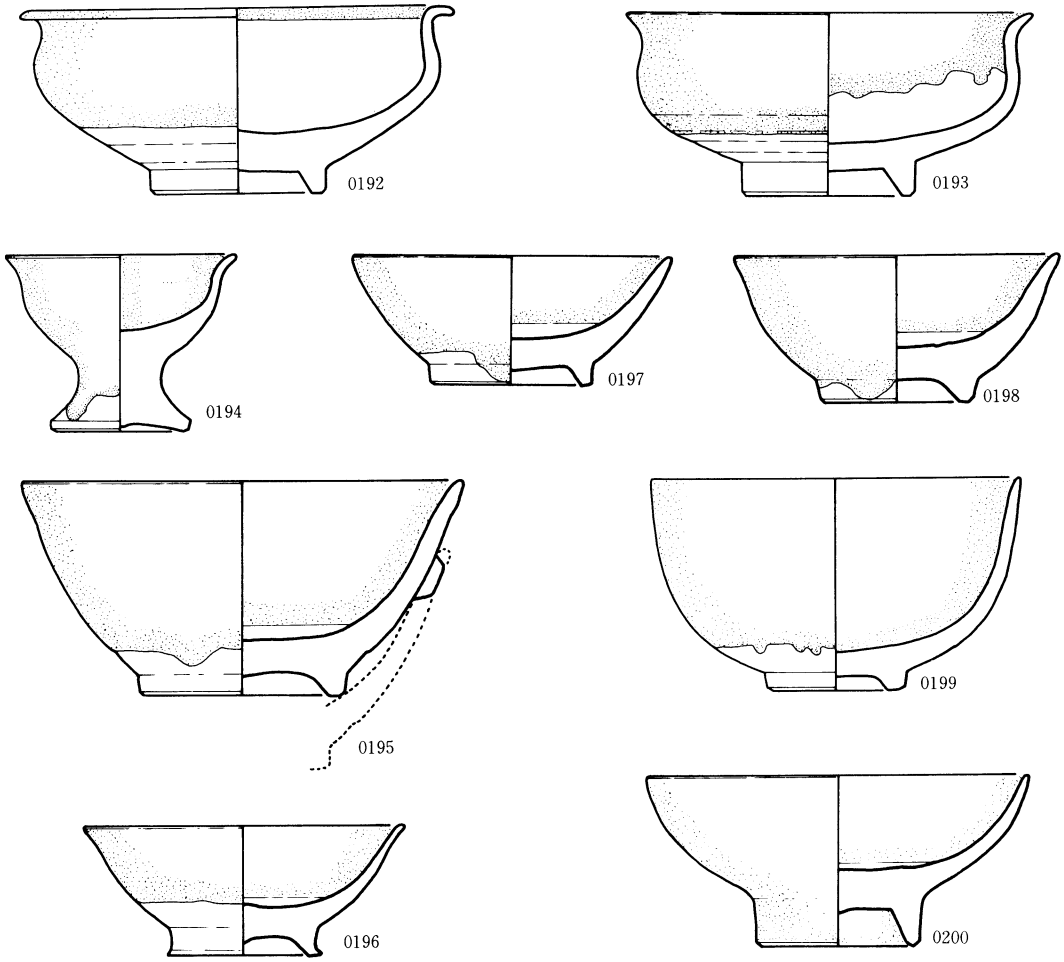

0177
0178
0179
0180
0181
0182
0185
0186
0187
0188
0189
0183
0184
0
10cm

第42図　13 類（ 土 師 器 ）

第43図　14類（須恵器）

⑮　15類（近世陶器）　図44　0192～0200

いずれも、第1地点の墓道及び近世墓周辺で出土したものである。香炉と高坏の仏具および碗類が出土している。これらは、近隣の加治木町小山田に窯元が所在する竜門寺焼である。香炉は、2例みられる。口縁端部が水平に外へ伸びるものと、口縁端部が外反するものとがある。



第44図　15類（近世陶器）

いずれも、胴部下半部まで飴釉が施されているが、0193は、焼成不足で釉美に乏しい。 高 坏(0194)は、化粧土透明釉が施されたものできれいな仕上りを呈している。仏具は、以上の３、点である。他に、碗類が出土している。化粧土に透明釉を施したものと飴釉を施したものがみられる。いずれも重ね焼きをおこなっていて、器内面には、蛇目がみられる。0195は、重ね焼き時に付着した陶片が残っている。0200は、黒釉を施したもので高台の高いものである。粘土は致密で焼成も良好である。他の碗とは、若干異り移入品とも考えられる。

第11表　13類（土師器）14類（須恵器）一覧表

遺物番号	出土区層位	器種・器部	法量	形態の特徴	手法・文様の特徴	胎土	焼成	色調	備考
0177	25C－Ⅰ	坏	口径 13cm 器高 4.5cm 底部径 6.2cm	ロクロ引きの痕跡顕著	内面刷毛目	若干細砂含む	普通	黄褐色	墨書の痕跡がみられるが字体は不明
0178	25C－Ⅰ	坏	口径 13cm 器高 4.3cm 底部径 7.0cm	底部はヘラ起し	不明	若干細砂含む	普通	黄褐色	
0179	4B－Ⅰ	坏	口径 15.2cm 器高 4.7cm 底部径 7.0cm	ロクロ引きの痕跡顕著	内外面とも刷毛目		普通	黄褐色	
0180	13－C－Ⅰ	坏	底部径 6.4cm	不明	内面刷毛目	若干細砂含む	普通	黄褐色	
0181	1B－Ⅰ	坏	底部径 6.8cm	底部ヘラ起し	内面うすい刷毛目		普通	黄褐色	
0182	25D－Ⅰ	坏	底部径 6.2cm	底部あらい糸切り	内面ともうすい刷毛目		普通	黄褐色	
0183	4B－Ⅰ	坏	底部径 8.0cm		外面にうすい刷毛目		普通	黄褐色	
0184	26B－Ⅰ	坏	底部径 6.3cm		不明		普通	黄褐色	
0185	26D－Ⅰ	坏	口径 14.0cm 器高 6.2cm 底部径 7.0cm	高台	内面刷毛目		普通	黄褐色	
0186	13C－Ⅰ	坏	底部径 8.4cm	高台	内面刷毛目		普通	黄灰色	
0187	25C－Ⅰ	坏	底部径 8.7cm	高台	不明		不良	黄灰色	
0188	13C－Ⅰ	坏	底部径 7.0cm	高台内部に糸切の痕跡	不明		普通	黄灰色	
0189	25 －Ⅰ	坏	底部径 6.7cm	高台	不明		普通	黄灰色	
0190	13B－Ⅰ	胴部	器厚 1.0cm		外面タタキの後整形 内面斜圧痕文				
0191	26B－Ⅰ	胴部	器厚 0.9cm	若干胴張	外面斜のタタキ文が強い 内面青海波くずれている				

第12表　15類（近世陶器）一覧表

遺物番号	出土区層位	器種・器部	法量	形態の特徴	手法・文様の特徴	胎土	焼成	色調	備考
0192	6D－Ⅰ	香炉	口径 11.8cm 器高 5.0cm 底部径 4.5cm	口縁端部水平に外伸びる	飴釉（胴部下半部まで）		良好	茶褐色	
0193	6D－Ⅰ	香炉	口径 11.0cm 器高 5.0cm 底部径 4.5cm	口縁端部外反	飴釉、焼成不足		不足	黄灰色	
0194	7D－Ⅰ	高坏	口径 6.8cm 器高 4.8cm 底部径 3.8cm		化粧土に透明釉	若干長石混入	良好	緑灰色	
0195	7D－Ⅰ	碗	口径 12.0cm 器高 5.8cm 底部径 5.4cm		化粧土に透明釉		良好	緑灰色	重ね焼陶器破片付着
0196	2C－Ⅰ	碗	口径 8.7cm 器高 3.5cm 底部径 4.3cm		飴釉、焼成不足	若干長石混入	不足	黄褐色	
0197	3C－Ⅰ	碗	口径 8.7cm 器高 3.5cm 底部径 4.2cm		飴釉	長石混入	良好	緑褐色	
0198	3B－Ⅰ	碗	口径 8.8cm 器高 4.0cm 底部径 4.0cm		飴釉	若干長石混入	良好	茶褐色	
0199	ⅠB－Ⅰ	碗	口径 10.0cm 器高 5.8cm 底部径 3.4cm		化粧土に透明釉	長石混入	良好	黄灰色	
0200	2C－Ⅰ	碗	口径 10.4cm 器高 4.6cm 底部径 4.1cm	高台が高い	黒釉		良好	黒色	

(2) 石　　器

石器には石鏃・石匙・スクレーパー・石斧・磨石・凹石・敲石などがある。

石　鏃（第45図）

磨製石鏃（0201・0202）

扁平無茎のもので2本とも基部にえぐりがみられる。大型の完形品で鎬が先端部付近で両方に分かれ、基部までつづく。石材はホルンフェルスと粘板岩である。共伴遺物として、成川式土器があげられる。

打製石鏃（0203・0204・0205・0206・0207）

すべて無茎の凹基式石鏃である。0203は2層からの出土で硅岩製の片脚が欠損しているが、交互剝離のよく整ったものである。0204は黒曜石製の両面剝離の厚いものである。片脚が欠損している。0205は良質の黒曜石で作った3ケ所に左右対象のえぐりがみられる整った形である。0206も黒曜石製である。二等辺三角形のぶ厚いものである。0204・0205・0206ともⅢa層から出土している。共伴土器は塞ノ神式土器である。0207はチャート製の鍬形の剝片鏃で前平式土器に共伴するものと思われる。

石　匙（0208・0209・0210・0211）（第46図）

0208はチャート製で横長のよく整正されたものであるが、表面採集である。0209は黒曜石製である。形態的にみてスクレーパーの類にはいると思われるが、つまみの部分と刃部を考えた場合石匙とおもわれる。唯、一般の横長の石匙と比較すると特殊な使用目的があったものと思われる。交互剝離でよく整正されている。0210は刃部の剝離状態よりつまみの欠損した縦長の石匙であると思われる。玄武岩製で刃部の剝離は整正されている。0211も玄武岩製で横長の粗雑なつくりの石匙である。

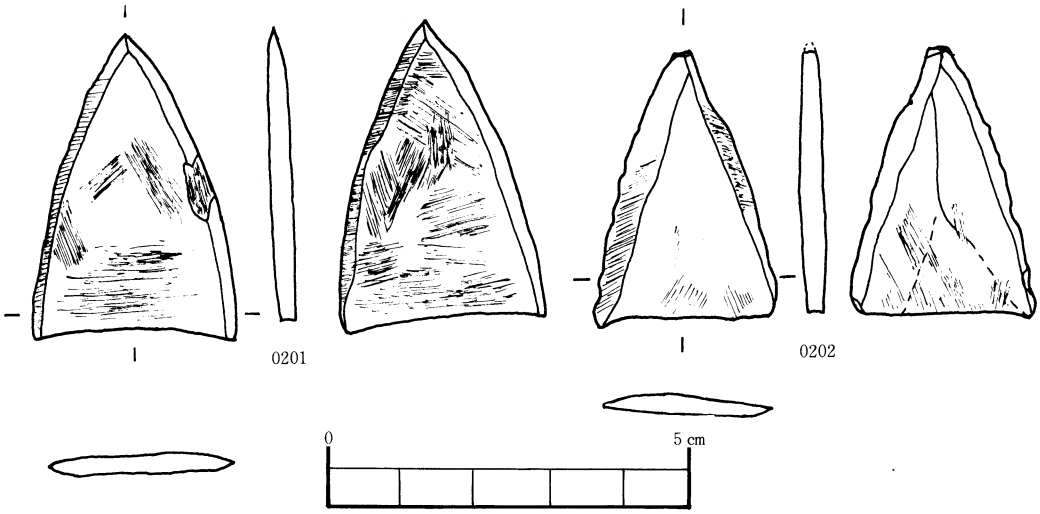
スクレーパー（0212・0213）（第46図）

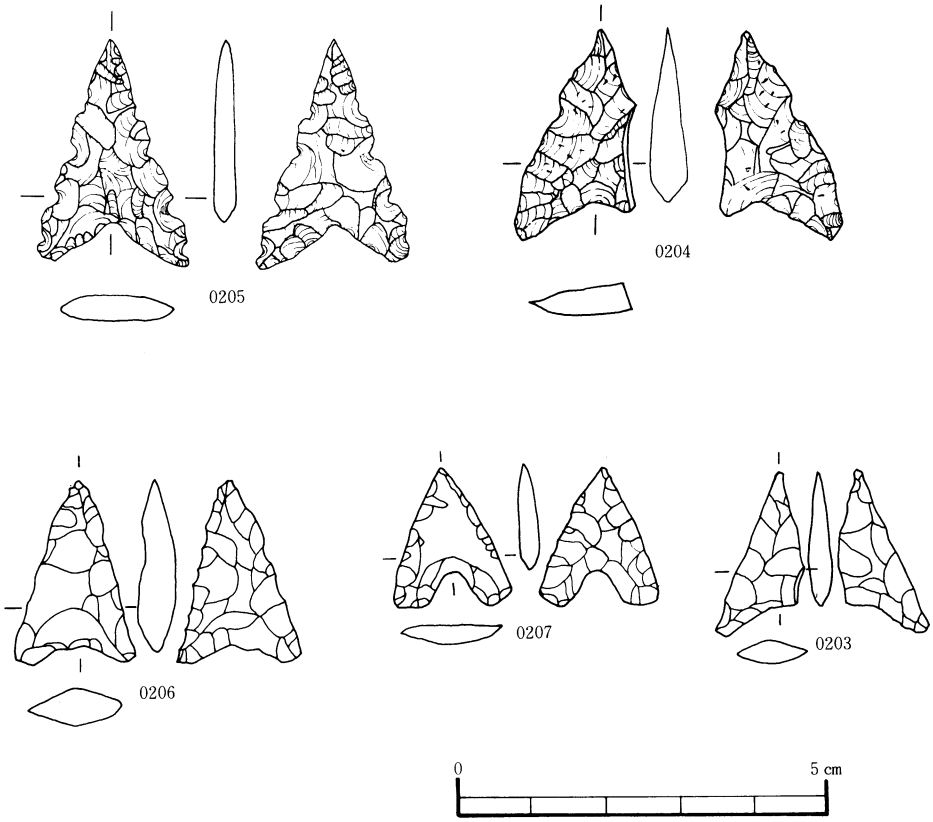
0212は自然面を多く残した黒曜石の剝片を利用した鋭利な刃部をもつスクレーパーである。0213は玄武岩の縦長剝片を利用した交互剝利の刃部をもつスクレーパーである。2点とも2層から出土し石材の差はあるが同形態である。

石斧（0214・0215・0216）

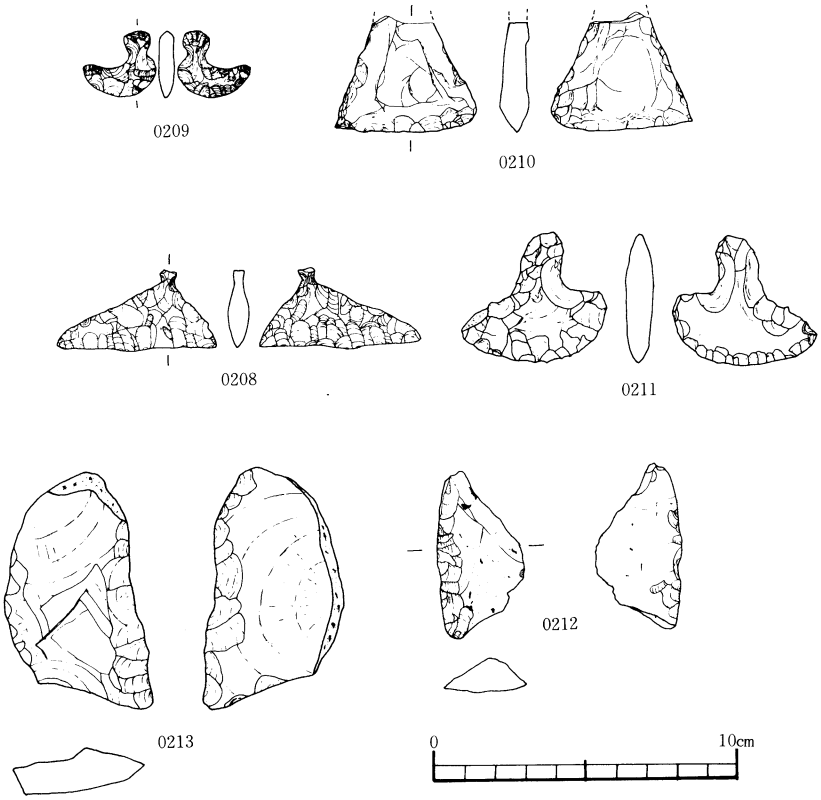
石斧は磨製石斧1本と打製石斧2本が検出された。

0214は硬質砂岩とみられ全体を丁寧に研ぎ刃部は蛤刃状である。鋭利な刃物ではあるが特に激しく使用された痕跡はみうけられない。長径10.9cm・短径 4.2cm・厚さ 2.1cm・重さ 166g である。0215は砂岩製の刃部が敲打によって鈍くなっている。長さ11.3cm・短径 4.7cm・厚さ 2.2cm・重さ 180g である。0216は敲打によって調整された自然面をもつ打製石斧である。玄武岩製で敲打によって鋭い刃部をもつ石斧となっている。長径11.7cm・短径 5.7cm・厚さ 2.8cm・重さ 228g である。





第45図 石 鏃 実 測 図



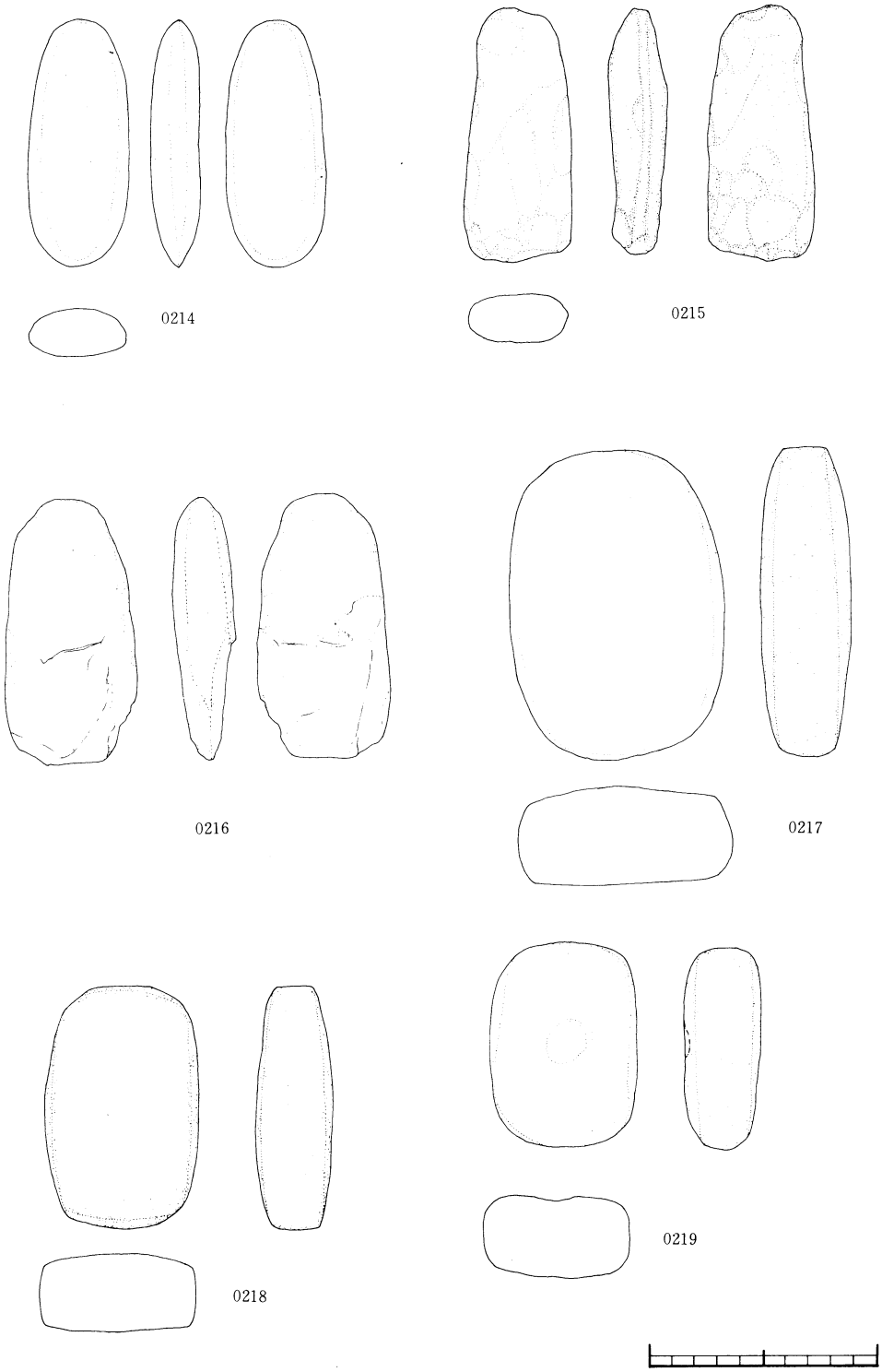
第46図　石匙・スクレーパー実測図

磨　石（0217・0218・0219・0220・0221）

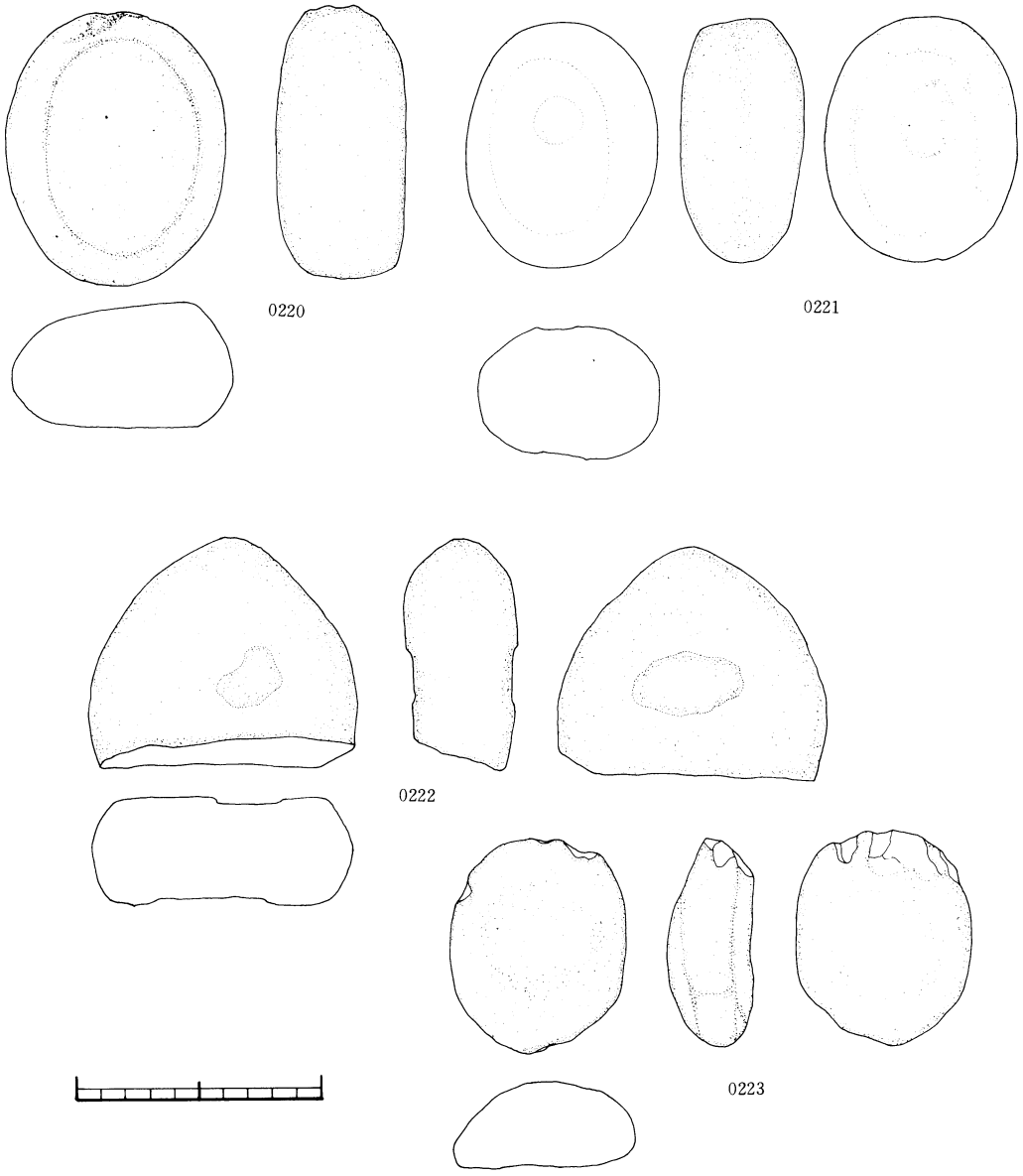
磨石は6点検出された。6面を磨ってある石ケン状磨石（0217・0218・0219）、全体を磨ってある楕円状円礫の磨石（0220・0221）にわけられる。石材はすべて輝石安山岩である。0217は長径・13.7cm・短径 9.3cm・厚さ 4.0cmで重さ 809ｇで平面はよく使用されている。0218は長径10.9cm・短径 7.0cm・厚さ 3.5cmで重さ 355ｇである。表面は風化が著るしく磨石としての形態はとどめるが使用面が不鮮明である。0219は長径 9.1cm・短径 6.3cm・厚さ 3.4cmで重さ 244ｇである。やはり風化が著るしく亀裂を生じているが表面の中央部に敲打による凹みを生じ凹石としても使用したと思われる。0220は、長径11.3cm・短径 8.9cm・厚さ 5.3cm・重さ875ｇの輝石安山岩製の側面部に敲痕があり敲石としても使用した磨石である。0221は長径10cm・短径 7.8cm・厚さ 5.2cm・重さ 558ｇの輝石安山岩の円礫で両面に敲打によって生じた凹みを生じる。凹石としても使用したとおもわれる。

凹　石（0222）

長径11.0cm・現在短径 9.2cm・厚さ4.9cm・重さ 529ｇの両面に敲打によって生じる凹みを生じる。約3分の1が欠けているが凹みが中央部にあり再利用と思われる。



第47図 石 器 実 測 図



第48図　石器実測図

敲　石（0223）

長径 8.5cm・短径 7.2cm・厚さ 3.5cm・重さ 312 g の輝石安山岩で風化により赤みをおびている。側面部2ケ所に敲痕があり敲石として使用したものと思われる。

第13表　石器一覧表

遺物番号	出土区	層	石　器	長　径	短　径	厚さ	重　さ	石　材	備　考
0201	7－B	II上	磨製石鏃	4.2	2.8	0.25	38 g	ホルンフェイス	
0202	4－B	II	〃	3.7	2.5	0.35	3.05 g	粘　板　岩	
0203	25－B	II	石　鏃	2.3	(1.5)	0.3	0,5 g	硅　　岩	
0204	25－B	IIIa	〃	2.9	(1.7)	0.45	1.55 g	黒　曜　石	
0205	25－B	IIIa	〃	3.2	2.0	0.3	1.2 g	〃	
0206	26－B	IIIa	〃	2.5	1.55	0.5	1.55 g	〃	
0207	25－B	IIIb	〃	1.9	1.6	0.25	0.6 g	チ　ャ　ー　ト	剝片鏃
0208	表　採		石　匙	2.6	5.4	0.8	7.2 g	〃	横長
0209	4－B	II下	〃	2.1	2.5	0.6	2.1 g	黒　曜　石	
0210	25－D	IIIa	〃	(3.9)	4.7	1.0	18.5 g	玄　武　石	
0211	25－B	II	〃	4.2	4.8	1.0	13.7 g	〃	横長
0212	25－B	II	scraper	5.4	2.8	1.3	15.0 g	黒　曜　石	
0213	26－C	II	〃	8.0	4.4	1.4	52 g	玄　武　石	
0214	18－D	I	磨製石斧	10. 9	4.2	2.1	166 g	砂　　石	
0215	3－E	IIIb	石　斧	11.3	4.7	2.2	180 g	〃	
0216	3－D	IIIb	〃	11.7	5.7	2.8	228 g	玄　武　岩	
0217	1－C	IIIb	磨　石	13.7	9.3	4.0	809 g	輝石安山岩	石ケン状
0218	6－C	III	〃	10.9	7.0	3.5	355 g	〃	〃
0219	4－E	IIIa	〃	9.1	6.3	3.4	244 g	〃	〃　凹石
0220	21－B	I	〃	11.3	8.9	5.3	875 g	〃	
0221	1－D	II	〃	10.0	7.8	5.2	558 g	〃	敲石
0222	26－B	II上	凹　石	(9.2)	11.0	4.9	529 g	〃	
0223	1－C	IIIb	敲　石	8.5	7.2	3.5	312 g	〃	

桑ノ丸遺跡出土の石器分類表

(3) まとめ

桑ノ丸遺跡の出土遺物について若干まとめてみたい。

1類土器（吉田式土器）

口縁部が若干外反し、端部が平縁を呈しその部分にキザミをもつもので2類土器とは明確に区別できる。桑ノ丸遺跡出土のものは、口縁部外側に貝殻腹縁による4条の刺突線が施されている。胴部は、貝殻押引文の施文である。2ケ所から出土しているが、当遺跡においては少ない量の遺物である。当遺跡出土の1類土器は、吉田町大原遺跡で出土するような木ノ実圧痕文やクサビ形貼布文の施されたものはない。貝殻押引文も非常に[(1)]あらいタッチのものである。

出土層位は、IIIb 層であり2類土器（前平式土器）と同層位ではあるが、その関係については不明であった。当遺跡出土の土器の中では、2類土器及び3類土器とともに最も古いグループに属する。

2類土器（前平式土器）

桑ノ丸遺跡において最も多量に出土した一群の土器である。2類土器は、第1地点から出土し他の地点からはみられない。2類土器は、第1地点において3ＣＤ区、4ＣＤ区に最も集中している。また、2類土器の出土したIIIb 層は1ＤＥ区、2ＤＥ区で3類土器と若干混在する以外は他の型式の土器とは混在せず、一応2類の単純層とみられる。なお、上層のIIIb 層からは、4類の押型文土器が出土している。

2類土器には、円筒土器と角筒土器がみられる。まず、円筒土器についてまとめてみたい。

円筒土器は、器形のうえにおいて基本的には同形のものである。口縁端部外側にキザミなどの連続施文をおこない、胴部の器面には、貝殻条痕文が施されている。口縁部は、ほとんど直口するものである。底部は、平底であり外側に縦位の沈線を施すものが1点あり、他は、器面の条痕が下まで施されるものと、条痕のうえからヘラ削りで整形するものがある。次に、桑ノ丸遺跡における2類土器の口縁端部施文に、若干の違いが認められる。これは、基本形において形式を起えるものではないが、桑ノ丸遺跡出土の2類土器のバリエーションとして把握したい。それは、大きく3つに区別された。1は、口縁端部に凹凸をもつものであり、凹凸をもつものは、口縁内部に段をもっている。2は、口縁端部に指頭圧痕および貝殻肋背の圧痕文を連続に施すものである。3は、口縁端部に連続刺突文を施すものである。3には、ヘラ状施文具と貝殻施文具の両者がみられ、羽状に施されたものも存在する。量的には、1および2は非常に少なく、3が主体を占める。

2類土器（前平式土器）には、角筒土器が共伴している。桑ノ丸遺跡出土の角筒土器は、すべて口縁部の角部が陵をもち高くなり、一辺の中央部分が低いものである。口縁端部には、文様帯を作り、その境目には、貝殻腹縁刺突線が施されている。地文は、規則正しく水平な凹線に近い条痕文が施されるものと、規則正しい水平なクシ状施文具による条痕文が施されるものがある。以上のような類似点がみられるが、器形および文様施文のうえにおいて若干異なる部

分についてみてみよう。まず器形において、口縁部が、角形を呈し、底部が円形をなすもの(0076)がある。すでに知覧町永野遺跡の調査において、河口貞徳氏が指摘されているように、円筒形と角筒形の中間的な器形であり[(2)]両者の密接な関係を示している。施文上の大きな違いは器面における地文の条痕文上に施文される文様である。口縁部文様帯の下方に接して鋸歯文を描き鋸歯文の先端から縦位の施文が底部まで施文されるものと、角部から発した凹線文が中央に集まり菱形の文様を施文するものと、文様帯から直接縦位のクシ状沈線が施文される3種類の違いがみられるが、口縁文様帯直下に鋸歯文を施文するものが最も多い。鋸歯文は、縦位の施文と同じ施文具で施されたものと、貝殻腹縁刺突線で施文し文様効果を出すていねいなものもみられる。口縁部文様帯における施文は、単独の指突文を二段に連続に施すものと、貝殻の腹縁を2肋のもの、3肋のもの、4肋のもの、5肋のものそれぞれで作った施文具で連続する刺突文を施こすものとそれぞれ違いがあるが、施文手法は同一である。また、角部分には、口縁部から底部まで連続刺突文が施されている。地文施文においても、器面に水平に施文された条痕を角部において斜上させるていねいな施文がみられ、円筒土器に比較し角筒土器は、ていねいに施文されたことが推測される。以上が、第1地点における出土であり前記円筒土器と共伴して出土したものである。しかし、第2地点において、若干形態の異る角筒土器片がみられる。第2地点においては、2類（前平式土器）の円筒土器は、出土していない。2類の角筒土器に比較すると、器面の厚みは均勢がとれて焼成が良好である。地文には、斜の条痕文が施されている。条痕文の上には、貝殻腹縁による刺突線で文様が構成されている。小片であり、全体の器形は不明であるが、2類土器の角筒土器との相違がみられるのでⅠ類（吉田式土器）等との関係などを含めて今後検討が要求されるものであろう。

3類土器

前記したように3類土器は、これまで形式区分されていなかった一群の土器である。当遺跡においては、第1地点と第2地点の2ケ所で出土している。出土層位は、Ⅲb 層であり2類前平式と近い関係にあると考える。器形は口縁部が内湾し、口縁端部が平縁で内傾するのが特徴である。施文は、貝殻状の施文具で櫛描き状に沈線文を施すものである。施文様には、6つのタイプがみられた。ⓐ口縁部には横位の平行櫛目文を施し、その下には縦位の波状の櫛目文を施すタイプのもの（0084)。ⓑ口縁部は、荒いタッチで平行斜線を櫛目施文しそれ以下は、止切れた平行櫛目文が描かれるもの（0086)。ⓒ短い櫛目文で力強く規則的に描くもの（0089)。ⓓ比較的整った櫛目文を縦横位に描くもの（0101)。ⓔ羽状を意図した櫛目文を施すもの（0112)。ⓕ器形は類似するが、荒いタッチを加え無文に近いもの（0115)。以上のように施文のうえにおいては、各種のタイプがみられ個性的な感じがみられないでもないが、これらに類する器形及び施文の土器をもつ遺跡は、県下においても若干みられる。志布志町倉野遺跡で①・③のタイプ、志布志町宮ノ後遺跡で④のタイプ、隼人町鹿児島神宮境内遺跡で⑤のタイプ、栗野町花ノ木遺跡で⑥のタイプが[(3)]みられる。いずれも、石坂式・吉田式・前平式・押型文・塞ノ神A式など早期[(4)]・前期に比定される土器とともにみられるものである。

4類土器（押型文土器）

第1地点においては、2類（前平式土器）の上層（IIIa ）から、第2地点においては、3類土器の上層（IIIa もしくは、IIIb に若干入る部分）からみられ、2片が楕円押型文であり他はすべて山形押型文であった。山形押型文は、内面にも山形の施文をもち端部に原体条痕をもつものであり、楕円押型文は、内面は無文である。尚、底部は、小さな平底が1点出土している。

5類・6類・7類・8類・9類の土器

いずれも、数片の出土であってこれらの遺物から層位的に位置づけることは、困難なことである。しかしながら、今後当遺跡近隣においてこれらの土器の出土遺跡が発見される可能性は大きく、これらの土器文化の影響があったことを示唆するものとなろう。

10類・11類土器

0146・0147・0150は、口縁部は直行し、山形隆起を持つ器形となす深鉢である。器面に2本の平行沈線の曲線文を基本とする文様形態を示す。この種の土器は「指宿市十二町下里の下層」の土器を標準とし、南九州を中心にその分布を知ることができる。本県においては「木ケ暮遺跡」[5]、「渡瀬遺跡」[6]、「春日遺跡」[7]出土のものと同種の土器で、縄文時代後期中葉の指宿式土器と思われる。0148は、0146、0149[8]と共伴遺物である。器形は指宿式土器の形をとるが、文様にヘラ状の施文具でもって3条の刺突連続文を施文とする特徴をもっている。時期は定かでないが、器形その他により縄文時代後期の所産と思われる。今後の資料としたい。0149は器台である。この種のものは縄文時代後期になって現われる。本県においては指宿式土器に伴う器台は現在のところ、その報告例は無いが、縄文時代後期の遺跡である「市来貝塚」・「大渡遺跡」・「草野貝塚」[9]などあげられる。これらの資料により縄文時代後期中頃に設定されよう。0152は頸部が[10]「く」の字を呈する器形から西平式土器系統のものを思わせるが、器面に文様がないことや、黒色研磨土器であることなどから、西平式土器よりわずかに新しい時期と思われ三万田式土器系統の土器に設定されよう。0153の底部も、それらと同時期のものと考えられる。0154は西平式土器の特徴である頸部がしまり胴部に磨消縄文や直線文、連点文を施すもので西平式土器と思われる。西平式土器出土の遺跡には、「黒川洞穴」、「西平貝塚」が知られ三万田式土器出土の遺跡には「東原遺跡」をあげることができる。

以上のごとく桑ノ丸遺跡の縄文後期の土器は舌状台地の基本に近い、25、26－B、C区の第II層（黄褐色火山灰土層）の中ほどに少範囲にその分布を示している。また、土器類は、極めて少ないが破片としては大きく復元可能なものもあった。なお、指宿式土器や西平、三万田系の土器は同じレベルで検出され、層位的に把握することは困難であった。

12類土器

桑ノ丸遺跡における12類の土器は指宿郡山川町にある成川遺跡の第Ⅳ類土器を標準としている成川式土器と呼称されているものに類似している。成川遺跡の第Ⅳ類土器は弥生時代終末期に置かれる。しかし第Ⅴ類土器（和泉式土師器に先行する古式土師器）が含まれるため弥生時代終末期の様相を呈しているが、中央においては古墳時代にはいっているものと考えられてい

る。指宿市の橋牟礼川遺跡、根占町の千束遺跡、鹿児島市吉野町の七社遺跡、吹上町の入来遺跡[11]、吉松町の永山遺跡等[12]においても、成川式土器[13]と須恵器、古式土師器[14][15]が共伴しているのが見られる。このように近年の調査によっても成川式土器は時間的に、古墳時代まで下降することがわかってきた。ところが同じ成川式と呼称されている土器の中に須恵器を共伴しないと思われるものがある。金峰町中津野遺跡、吹上町花熟里遺跡等[16]がそうであり甕形土器[17]に特徴が見られる。すなわち肩部から口縁部へかけて[18]「く」の字状に外反し[19]突帯を施さず底部はあげ底の脚台を有するものである。これらは須恵器を共伴するものより先行するものと思われる。桑ノ丸遺跡の12類土器についてみると甕形土器は頸部に断面三角形のはりつけ突帯を施し口縁部[20]は外反する。底部はあげ底の脚台を有しているものであり、器形は中津野遺跡等の甕形土器と類似している。又、桑ノ丸遺跡においても須恵器の共伴は見られず中津野遺跡等の土器に比定できるものと考えられる。

桑ノ丸遺跡出土の0156の土器にはヘラ描きによる沈線文が施されている。このようなヘラ描きは数例知られているが絵画様のものと幾何学的な文様とが見られる。指宿市出土の土器片には舟と波を模したような沈線文が施されている。吉野町七社遺跡出土の土器片には魚を描いたものが見られる。薩摩郡下甑村の大原・宮園遺跡[21]、山川町成川遺跡、枕崎市松ノ尾遺跡[22]においては絵画状のもの[15]ではなく幾何学文を施している。このような沈線文[11]は類例が乏しいため[23]判断を下すことは出来ない。只桑ノ丸遺跡の0156の土器、松ノ尾遺跡の土器における文様には数条の沈線を曲線状に施したものが見られる所から、免田式土器における重弧文との関連性を考えても良いのではなかろうか。

13類・14類・15類

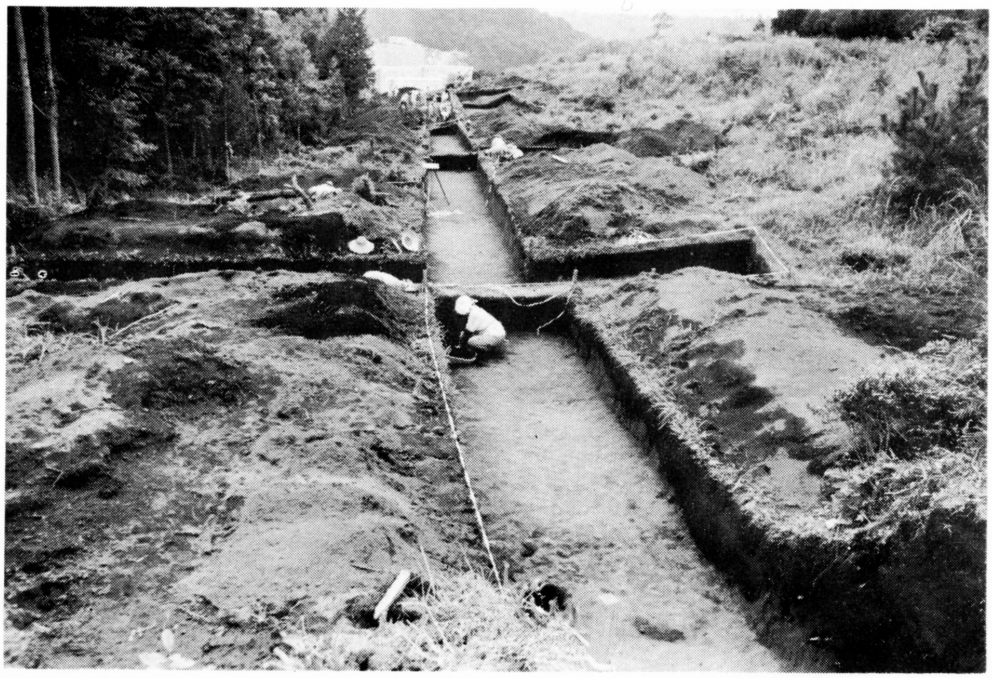
13類（土師器）・14類（須恵器）においては、後世の攪乱がみられ出土状態を明確に知るものはない。土師器の出土層は、比較的多くみられたがほとんどが細片となっている。なお墨書の痕跡の存在するものもみられるが、破損のため字体は不明であった。近世墓に関係して、竜門寺系焼の陶器の発見がみられたが、この分野における資料の整備はいまのところほとんどみられず今後要求されるところである。

石器について簡単にまとめると桑ノ丸遺跡の石器の特徴として、出土量は少ないが種類が豊富であるということであろう。磨製石鏃2本はいままで出土したもとの比較して大型である。成川式土器に共伴するものと思われる。打製石鏃は剝片鏃を除いて他は塞ノ神式土器に共伴する。また吉田・前平式土器に共伴する石ケン状磨石が桑ノ丸遺跡の特徴としてあげられる。この石ケン状磨石は、鹿児島市の加栗山遺跡、指宿市の小牧遺跡からも吉田・前平式土器に共伴することが最近の調査で判明してきた。

(1) 河口貞徳「鹿児島県鹿児島郡大原遺跡」日本考古学年報　1957年
(2) 河口貞徳「鹿児島県における貝殻条痕文土器について」鹿児島県考古学会紀要　1955年
(3) 瀬戸口望「採集における押型文土器並にその共伴資料」鹿児島考古8号　1973年
(4) 鹿児島県教育委員会「花ノ木遺跡」　1975年
(5) 浜田耕作「薩摩国指宿郡指宿村土器包含層調査報告」京大報告　大正10年11月
(6) 河口貞徳「鹿児島県考古学会紀要」第3号　1953年
(7) 国分直一・重久十郎「鹿児島県考古学会紀要」第4号　1955年
(8) 河口貞徳・河野治雄「鹿児島県考古学会紀要」第4号　1955年
(9) 河口貞徳「鹿児島県日置郡市来貝塚」日本考古学年報　昭和41年3月
(10) 河口貞徳「南九州後期の縄文土器」考古学雑誌42－2　昭和32年3月
(11) 文化庁「成川遺跡」埋蔵文化財調査報告　第7号　1974年
(12) 浜田耕作「薩摩国指宿郡指宿村土器包含層調査報告」京大報告　大正10年11月
(13) 河口貞徳「千束遺跡」根占郷土誌　昭和49年
(14) 出口浩「吉野町七社遺跡」鹿児島考古8号　1973年
(15) 出口浩「吉野町七社遺跡」鹿児島考古9号　1974年
(16) 河口貞徳「入来遺跡」鹿児島考古11号　1976年
(17) 河口・河野・池水・上村・林・出口「永山遺跡」鹿児島考古8号　1973年
(18) 河口貞徳「鹿児島県の弥生式諸遺跡について」鹿児島県考古学会紀要　第2号　1952年
(19) 河口貞徳・出口浩「第一次花塾里遺跡調査報告」鹿児島考古5号　1971年
(20) 出口浩「吹上町中原発見の弥生式土器について」鹿児島考古6号　1972年
(21) 河野治雄「鹿児島県の金石文研究抄」鹿児島考古7号　1973年
(22) 下甑村教育委員会「大原・宮園遺跡」　1974年
(23) 河口貞徳「鍬形石の祖型」鹿児島考古8号　1973年

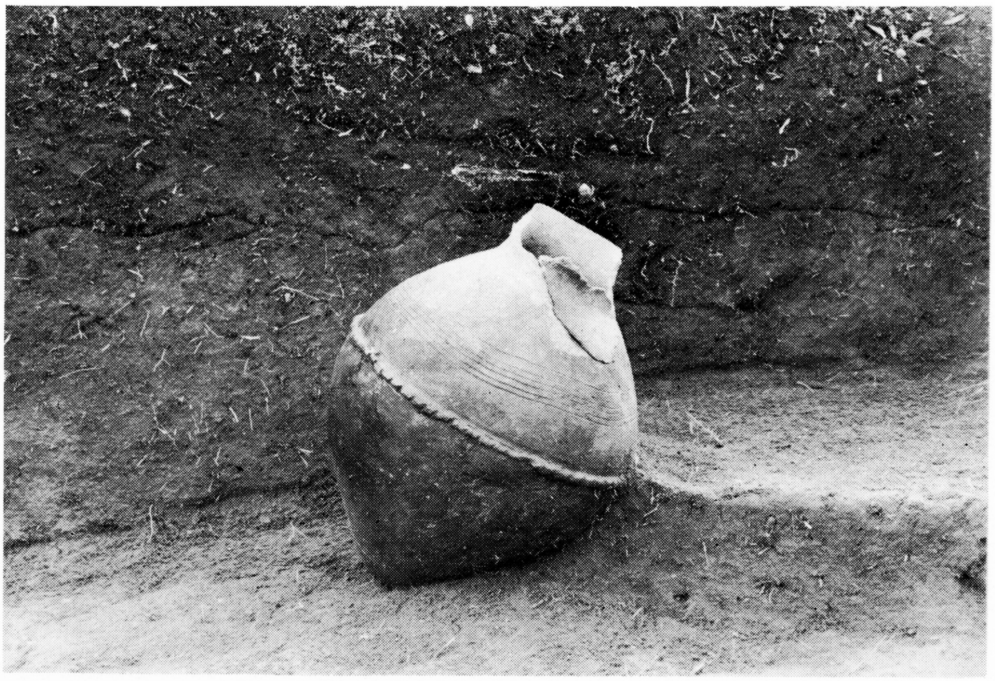
図版１　桑ノ丸遺跡遠景（南から）

図版２　第１地点遠景（東から）



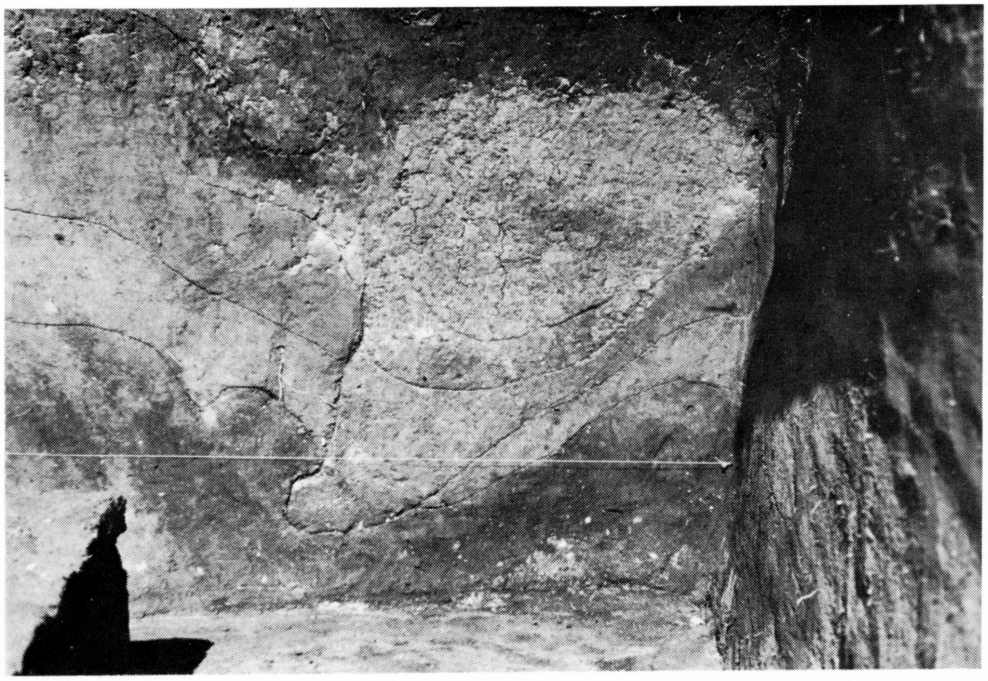
図版３　第１地点確認調査（東から）

図版４　第１地点確認調査（南から）



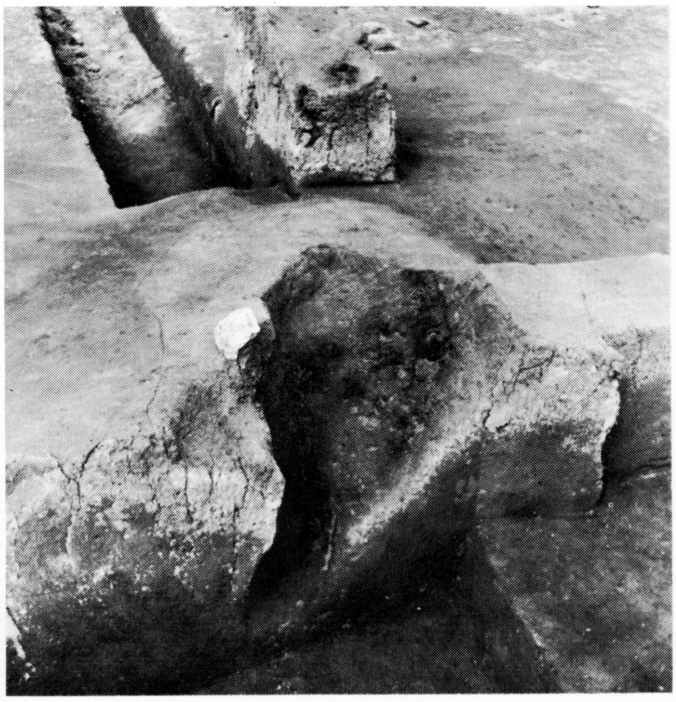
図版５　12類（成川式土器）出土状態

図版６　12類（成川式土器）出土状態

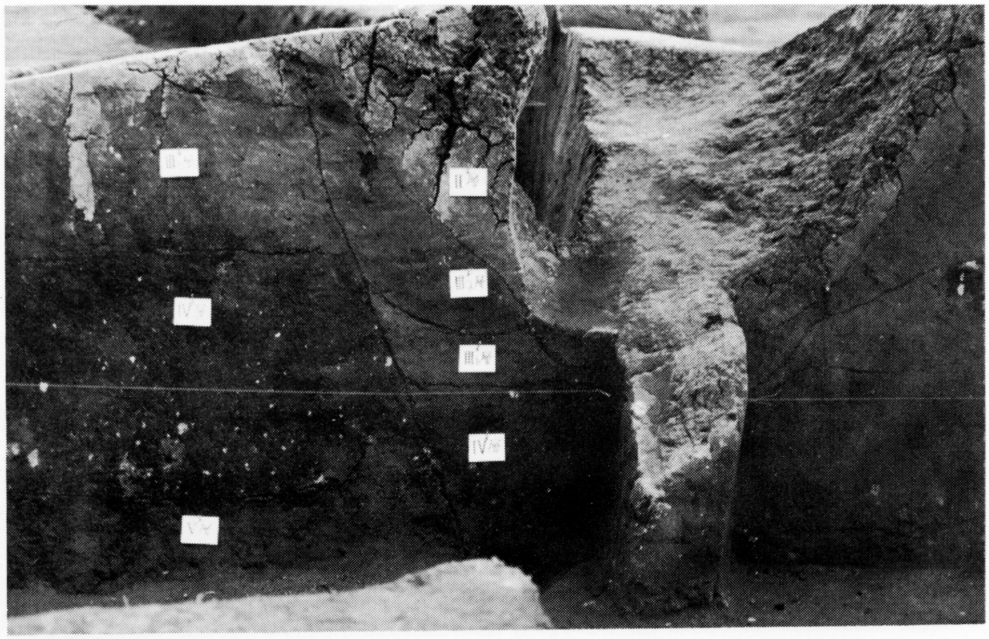


図版7　窯状遺構断面写真

図版8　窯　状　遺　構



図版9　窯 状 遺 構 全 景



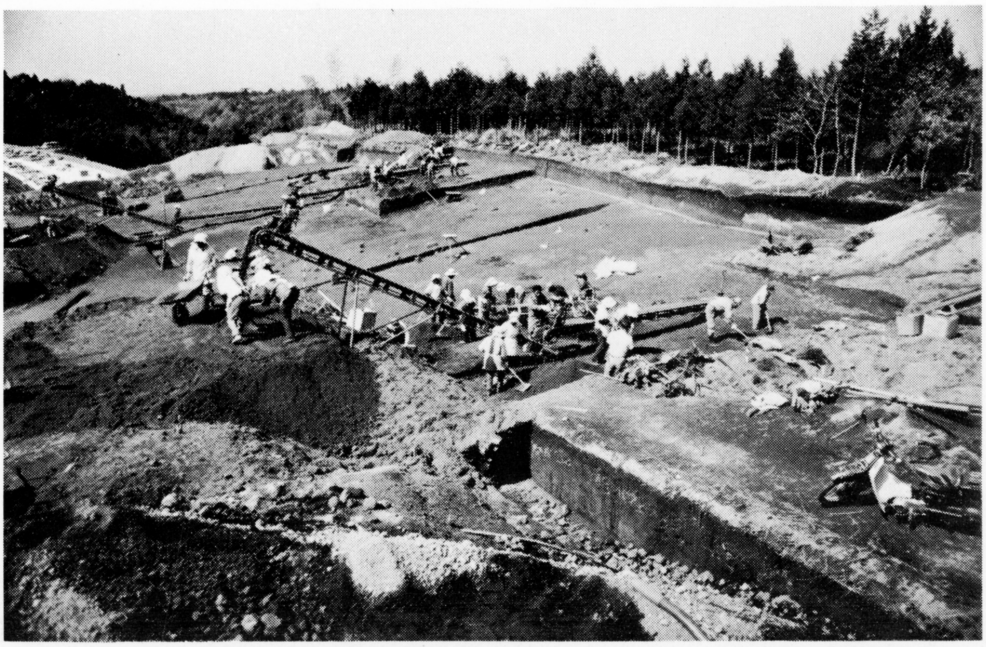
図版10　窯状遺構と断層断面

図版11　円筒土器（2類）出土状態

図版12　円筒土器（2類）出土状態

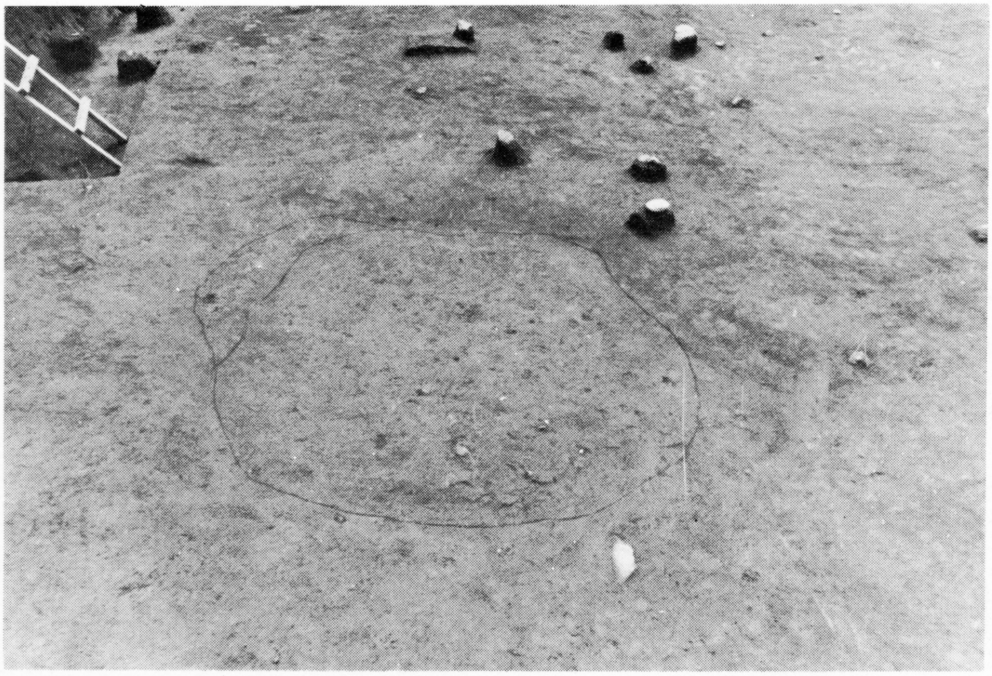
図版13　第1地点遺物出土状態（Ⅲb層）

図版14　角筒土器（2類）出土状態

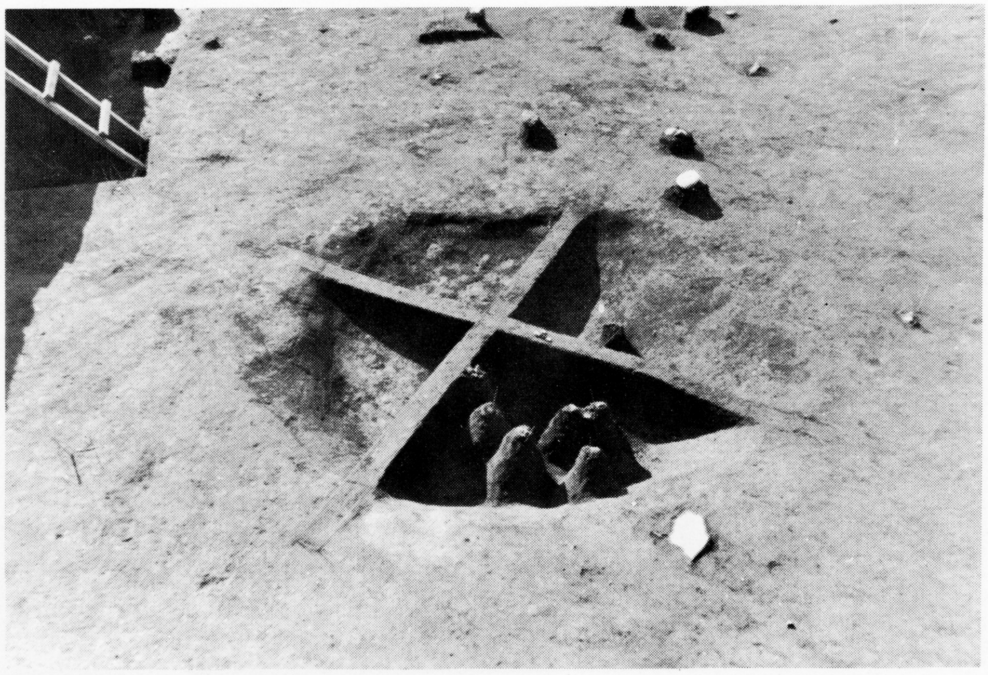


図版15　第１地点発掘風景

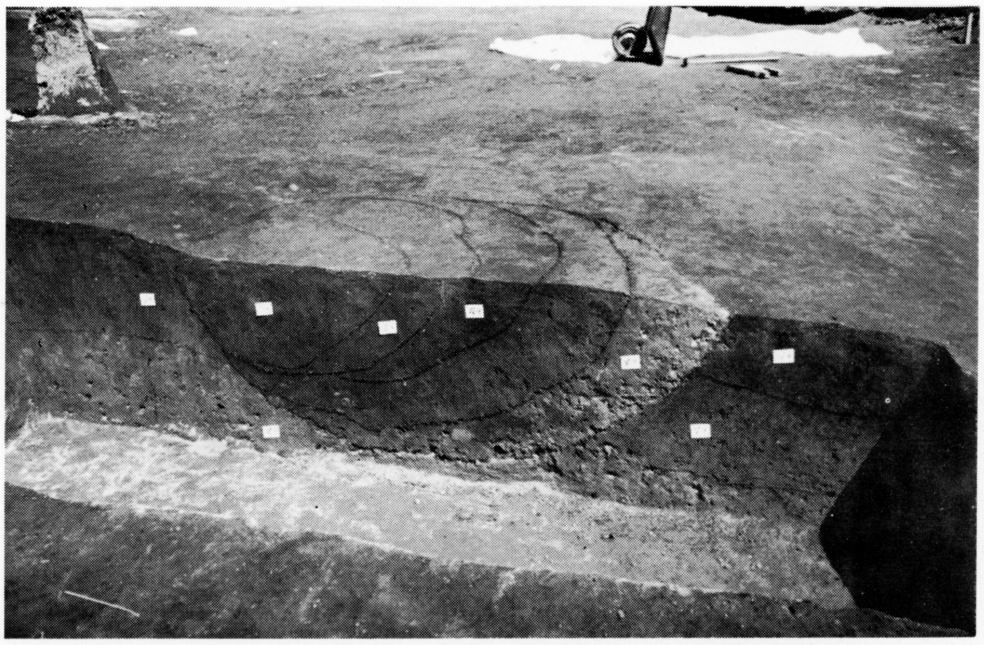
図版16　遺物出土状態（Ⅲｂ層）



図版17　地層横転No.1検出状態



図版18　地層横転No.1堀り上げ状態



図版19　地層横転No. 3断面

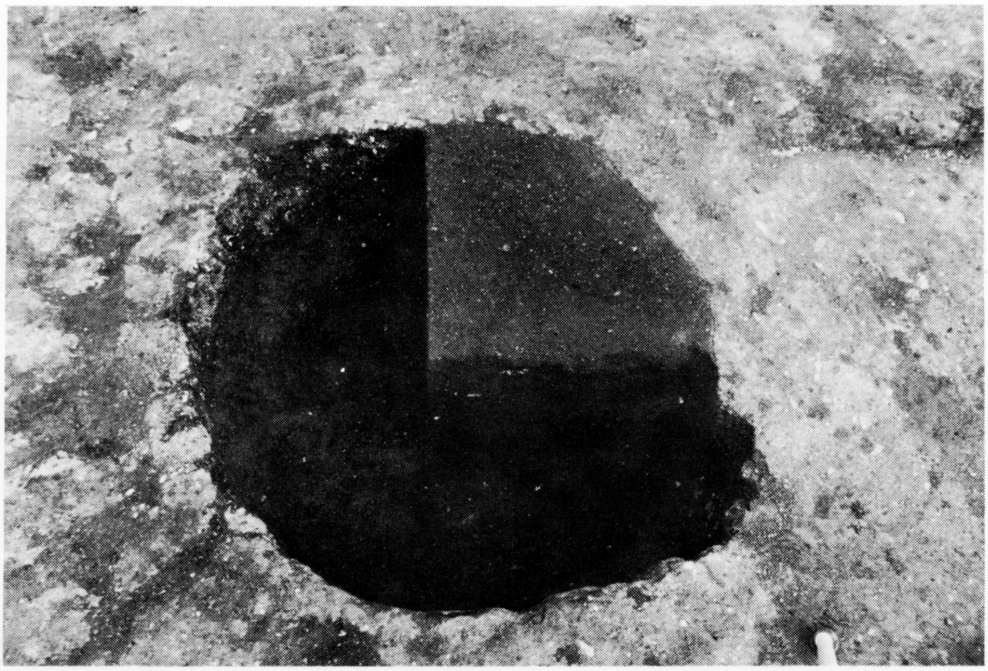
図版20　地層横転No. 3堀り上げ状態

図版21　第2地点遠景（東から）

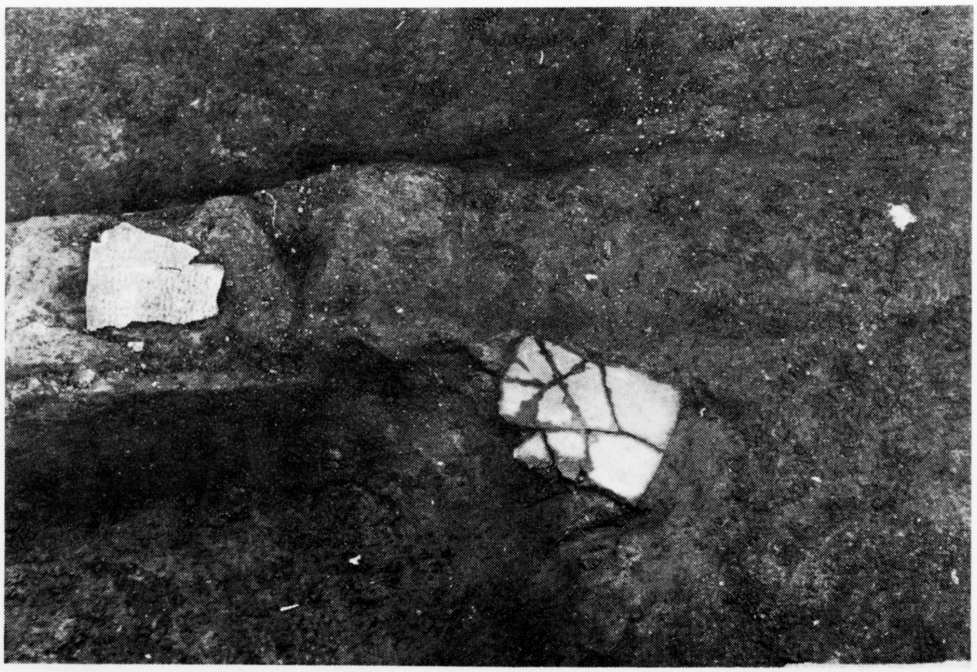
図版22　Ⅲ a 層の集石

図版23　第３地点落ち込み

図版24　第３地点全景（南から）



図版25　落　ち　込　み



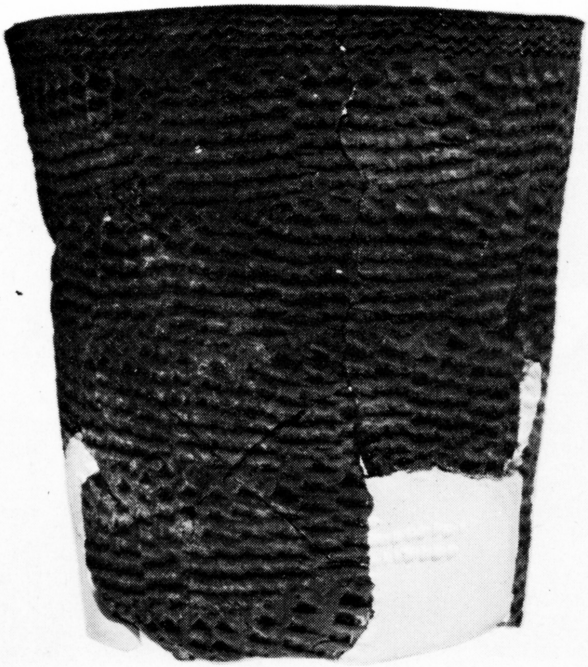
図版26　円筒土器（1類）出土状態

図版27　近 世 墓 検 出 状 態

図版28　近　　世　　墓　　群

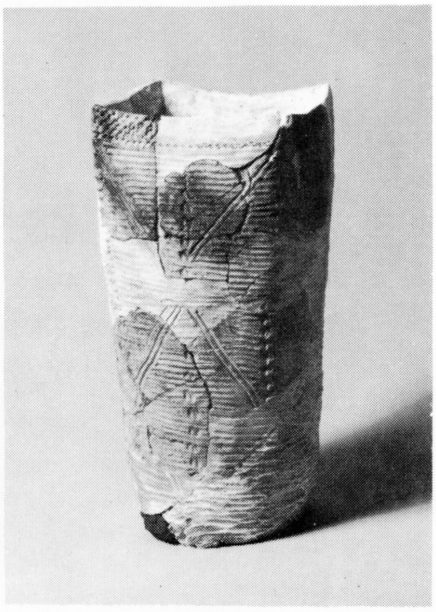
図版29　近世墓の供養祭

図版30　近世墓出土の人骨



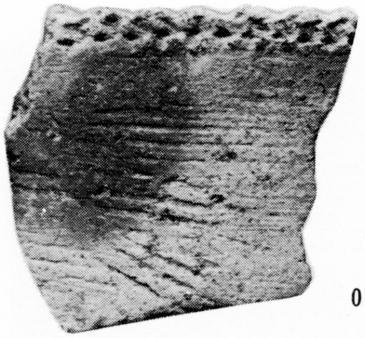
0001

0002



0076

図版31　1類（吉田式土器）・2類（前平式土器）



0005

0007

0008

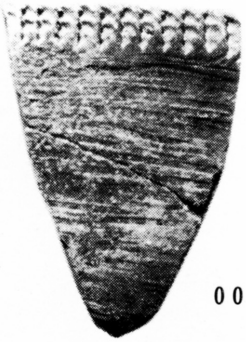
0017

0013

0018

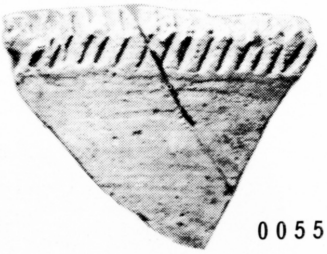
図版32　2類（前平式土器）

0033

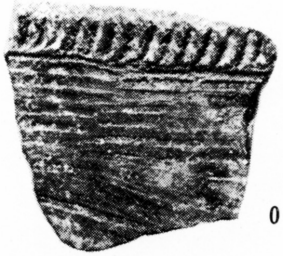


0035

0044

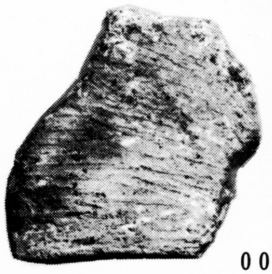


0055



0060

0062



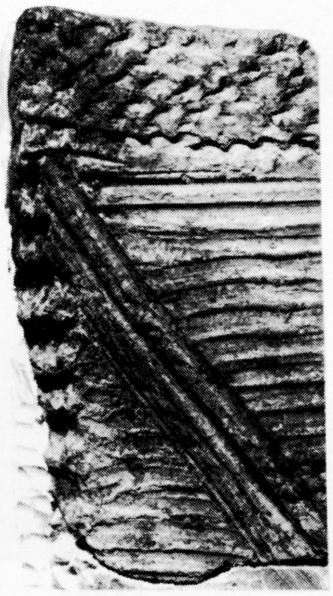
0072

0073

図版33　2類（前平式土器）

0075

0079



0076

（角筒土器0076の角部）

0077

0078

0081

図版34　2類（前平式土器）

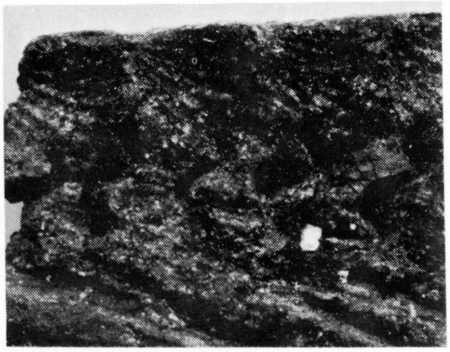
0079

0083

0082

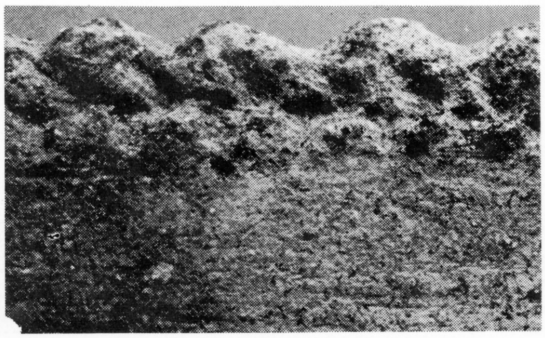
0080

図版35　2類（前平式土器）

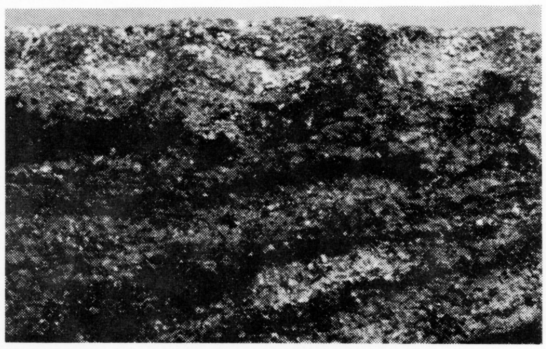


b　圧痕文を連続施文するもの

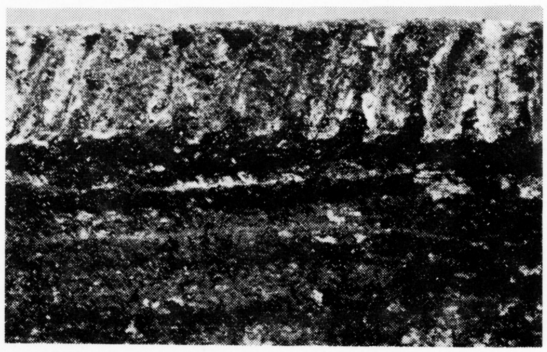
（貝殻肋背による扇状文）



a　口縁部が凹凸をなすもの



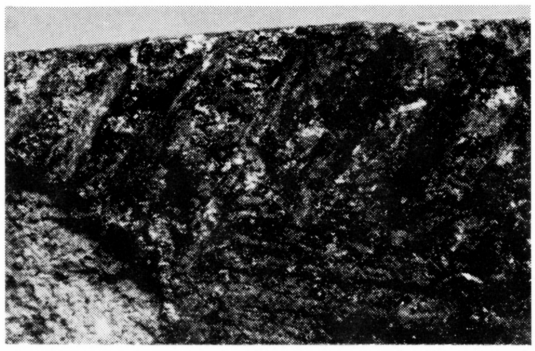
b　圧痕文を連続施文するもの



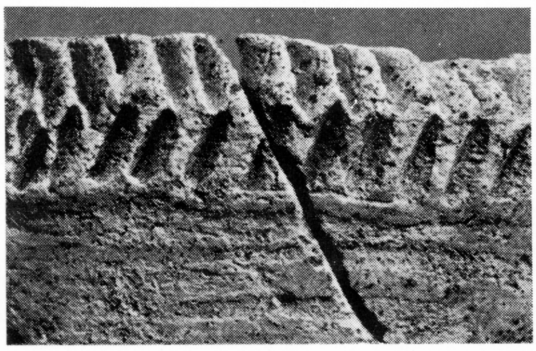
c　連続刺突文を施するもの

（ヘラ状施文具による単斜）

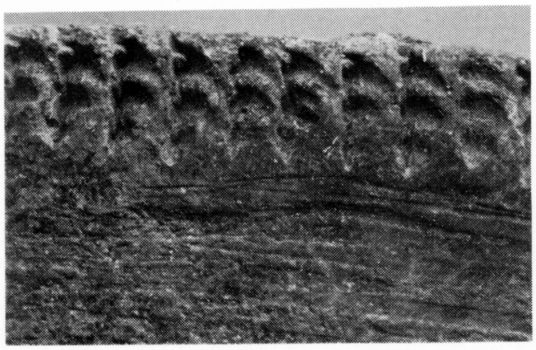
図版36　2類（前平式土器）口縁施文



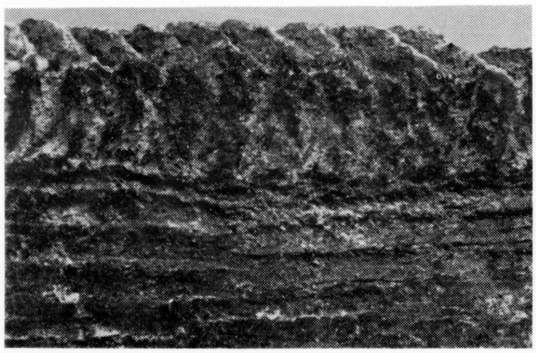
c　連続刺突文を施するもの
（ヘラ状施文具による単斜）



c　連続刺突文を施するもの
（ヘラ状施文具による羽状施文）

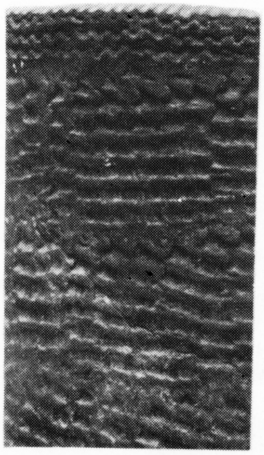


c　連続刺突文を施するもの
（貝殻施文具による単斜）

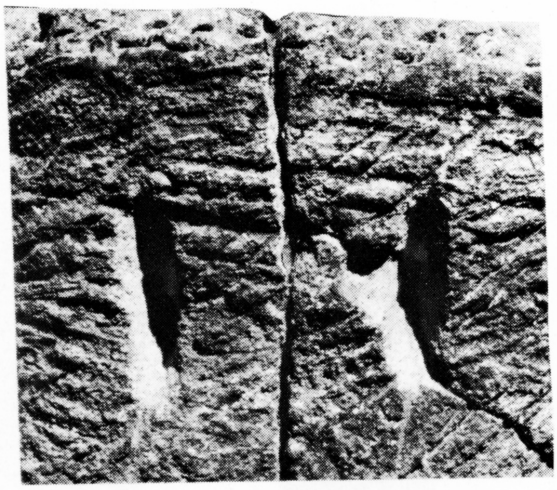


c　連続刺突文を施するもの
（貝殻施文具による羽状施文）

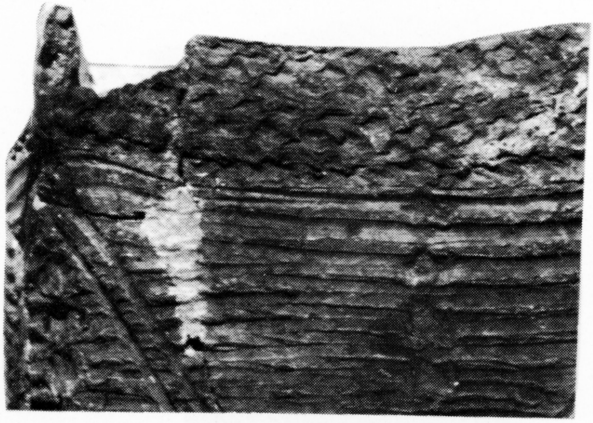
図版37　2類（前平式土器）口縁施文



1類土器口縁部



2類円筒土器の穿孔部分



角筒土器口縁部

2類土器口縁部

図版38　1類（吉田式土器）・2類（前平別土器）